

図180 VII区1次面造構実測図⑧ ($S = 1:80$)

N-2地点 SK58 N-2地点の南壁際で検出されたため、遺構南壁は確認されていない。南側のS-3地点では検出されなかつことより、両調査区が交差する中央未調査部分にて収束すると予測され、およそ3.8×2.5mの長方形土坑と想定される。柱穴・貼床・カマド等の居住に関わる施設は認められず、土坑中央部に多量の滑石製白玉とともに土器群が緩い円弧を描くように列をなして検出された。土師器高杯・小型丸底土器を主体とし、これに壺・甕・碗が加わる。土器群は2～3ヵ所のまとまりとして把握できるが、特に器種の偏りはみられない。完形で残存する個体は小型器種数点にみられるものの、大半が欠損している。接合関係は基本的に周辺の破片により復元される確率が高いが、比較的離れた破片が接合した高杯が1点ある。図181中に杯部と脚部にトーンを付した高杯が該当し、それぞれの杯部と脚部が接合して完形に復元された。これは偶然移動したとするには距離が大きく、意図的な破碎の可能性を示すものと考えられる。

滑石製白玉は出土総数130点で、遺構検出時より土器取り上げ後まで出土しているが、土器群の精査時に最も出土した。出土状況は土器群を取り巻くようであるが、分布に規則性は見いだされない。さらにはいずれもが単独でかつ円孔面（平坦面）を表にして出土し、連珠状の出土状態は全く確認されなかった。このほか、勾玉2・管玉2・土玉1・赤玉1・ガラス玉4の出土があり、玉類は総数140点にのぼる。勾玉・管玉はいずれも土器片上より出土し、土玉やガラス玉は白玉と同様な出土状況である。なお、図181中のドットは玉類の出土位置を示し、●は勾玉、■は管玉、▲はガラス玉で、小円は白玉の出土位置を示している。

石製模造品は2点（鏡形・勾玉形）が確認されている。鏡形は遺構検出時に出土しているため、出土詳細箇所は不明であるが、本遺構に伴うことが確実である。勾玉は土器群に混じって出土している。

鉄製品は不明小片1点の出土が認められた。覆土中よりの出土である。



写真162 SK58遺物出土状況（南から）



写真164 SK58遺物出土状況（東から）



写真163 SK58遺物出土状況（北から）

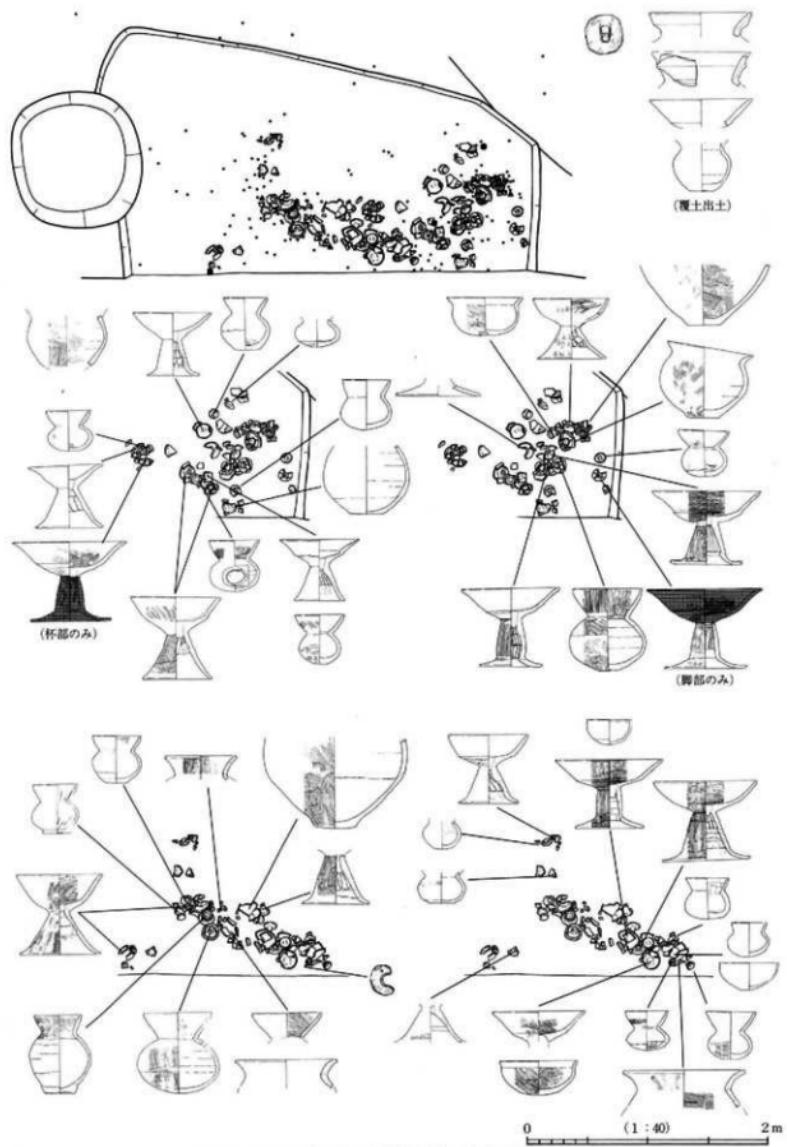


図181 N-2地点 S K58遺物出土状況実測図 ($S = 1/40$)

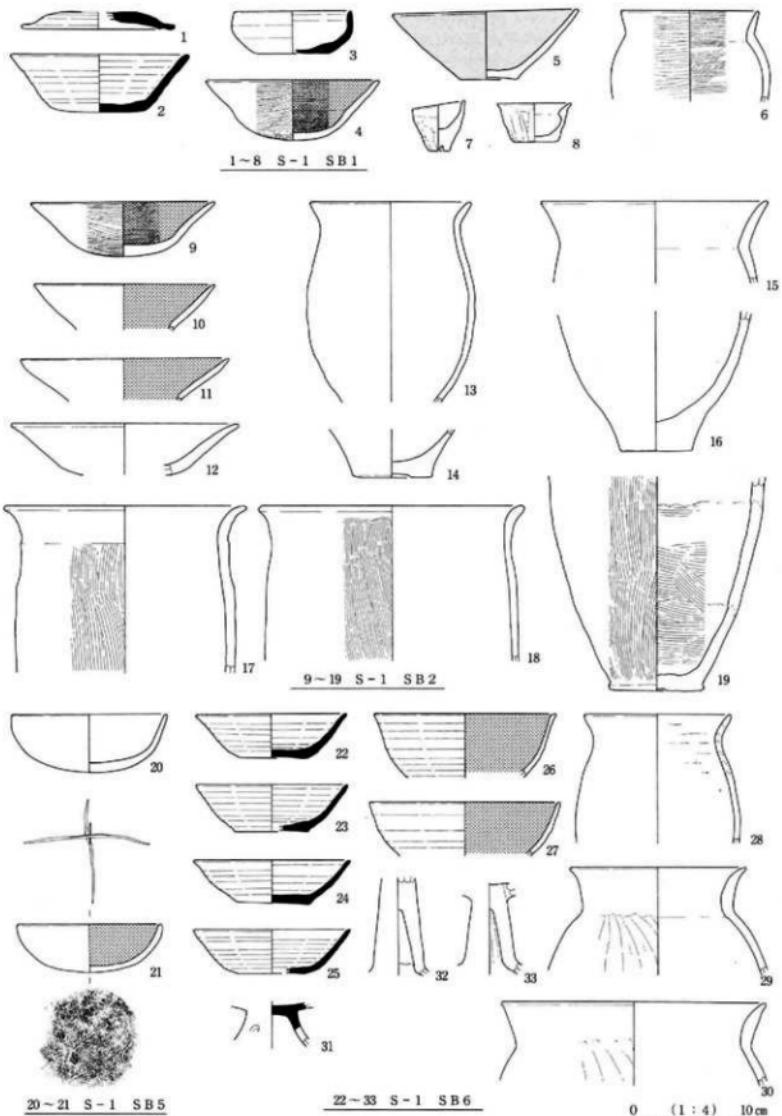


図182 VII区1次面出土土器実測図① (S = 1 / 4)

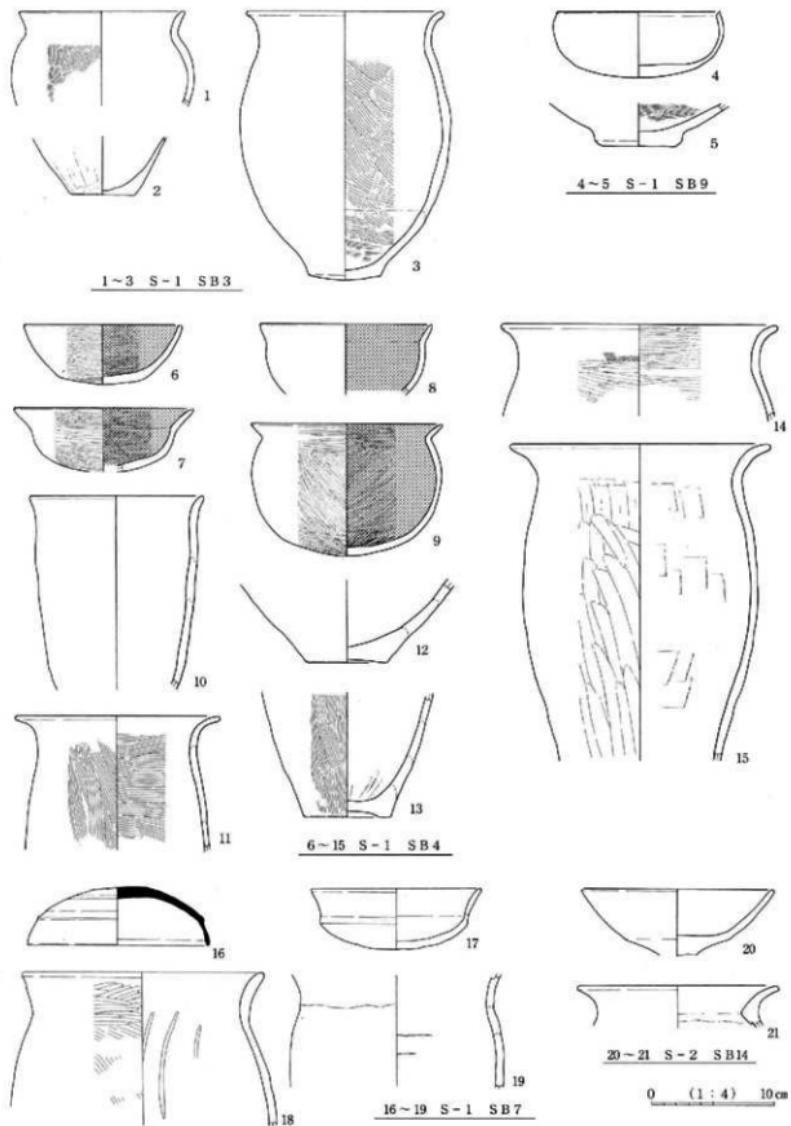


図183 VII区1次面出土土器実測図② (S = 1 / 4)

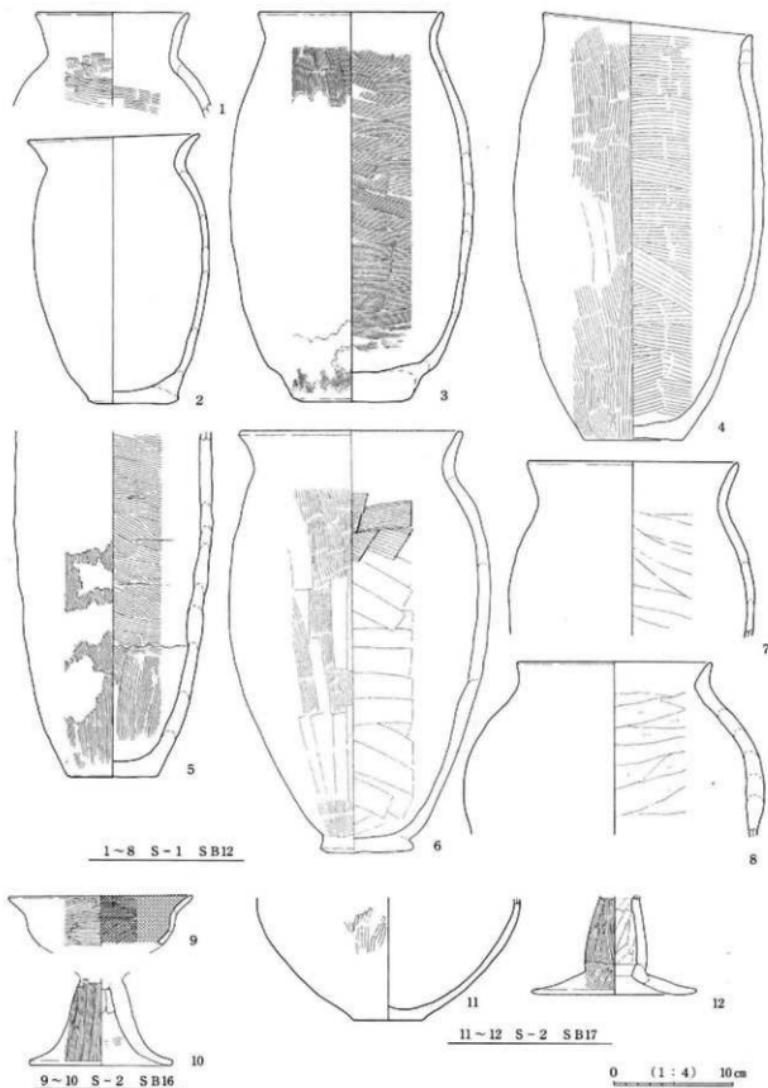


图184 VII区1次面出土器实测图③ (S = 1 / 4)

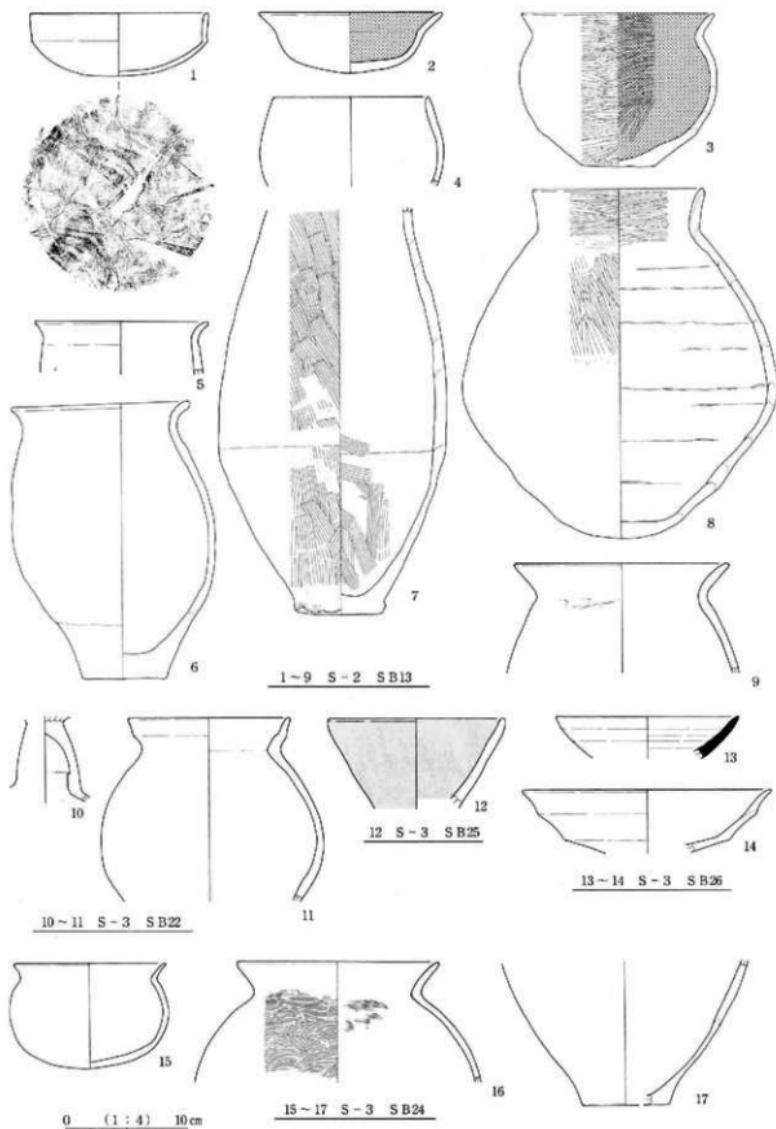


图185 VII区1次面出土土器实测图④ (S = 1 / 4)

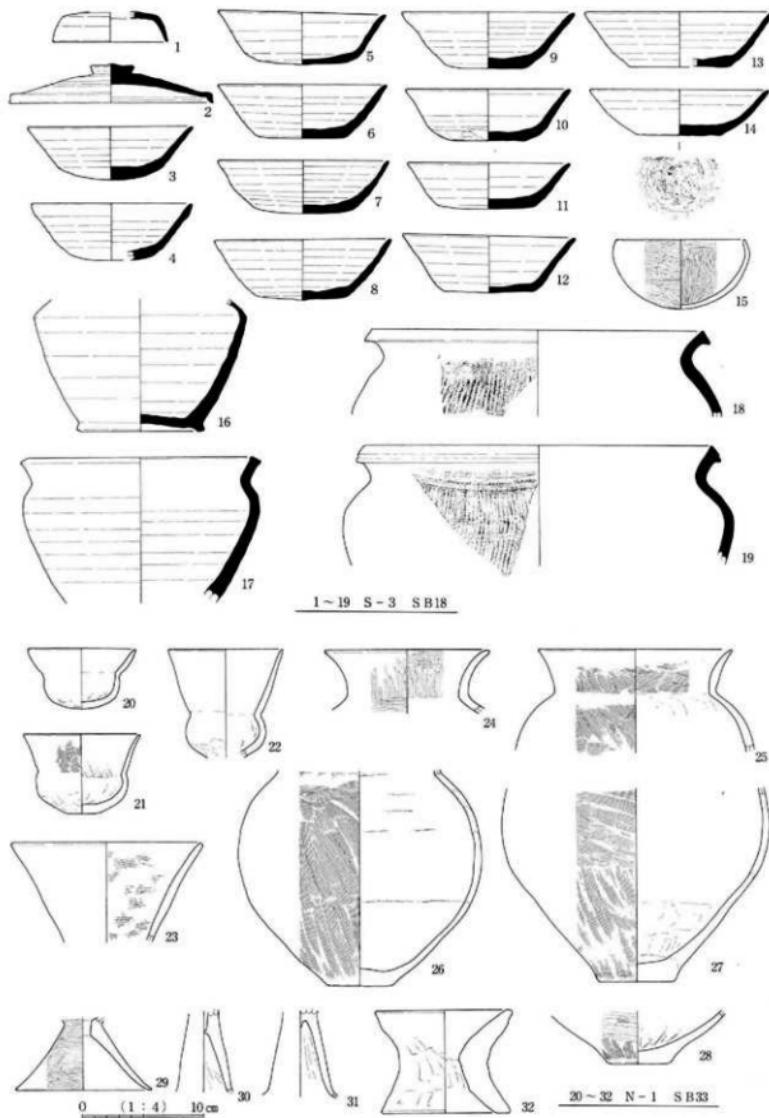


图186 VII区1次面出土土器实测图⑤ (S = 1 / 4)

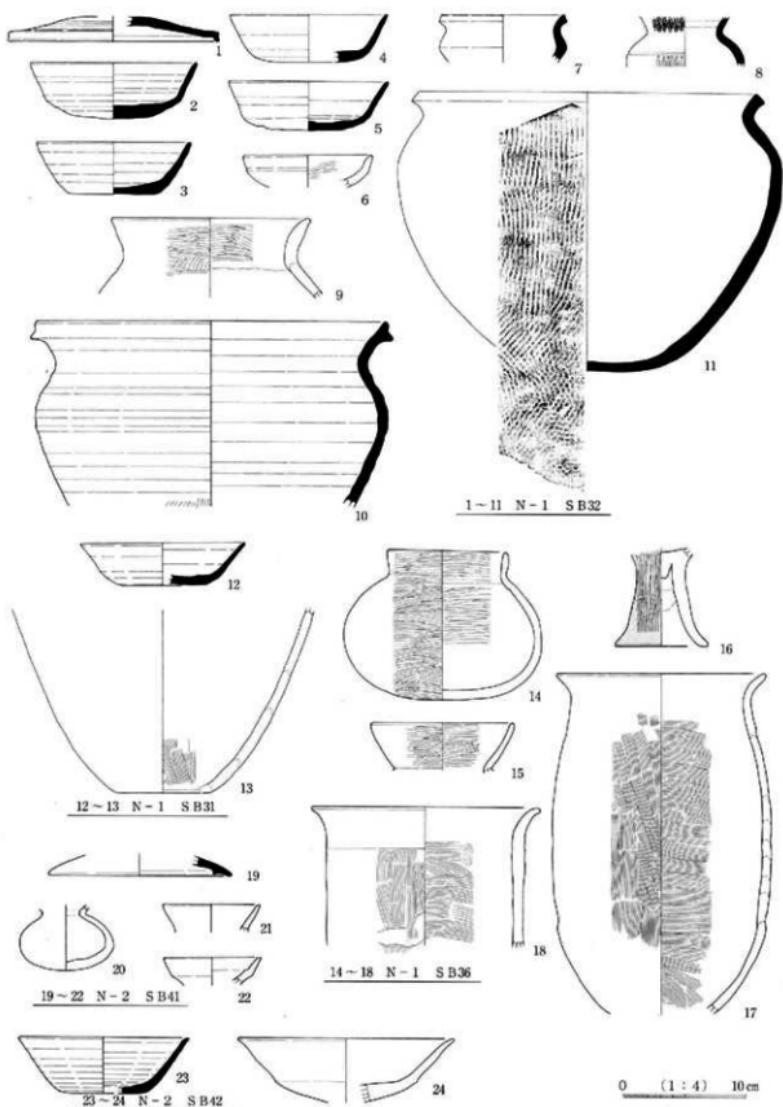


図187 VII区1次面出土土器実測図⑥ (S = 1 / 4)

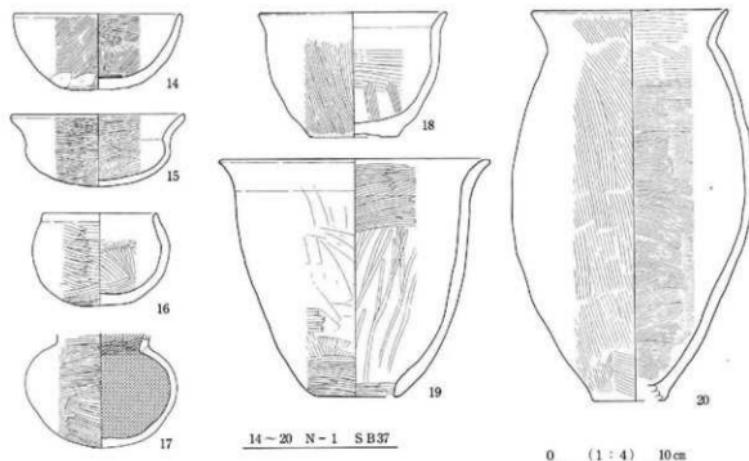
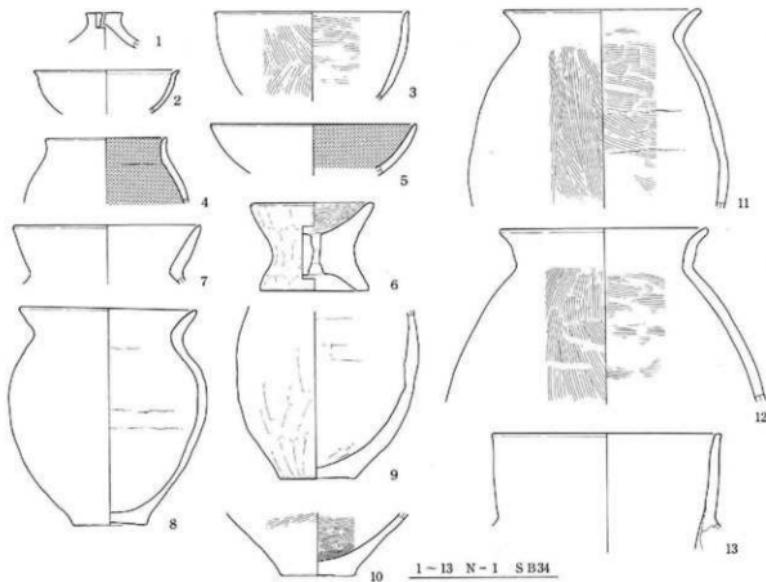


图188 VII区1次面出土器实测图⑦ (S = 1 / 4)

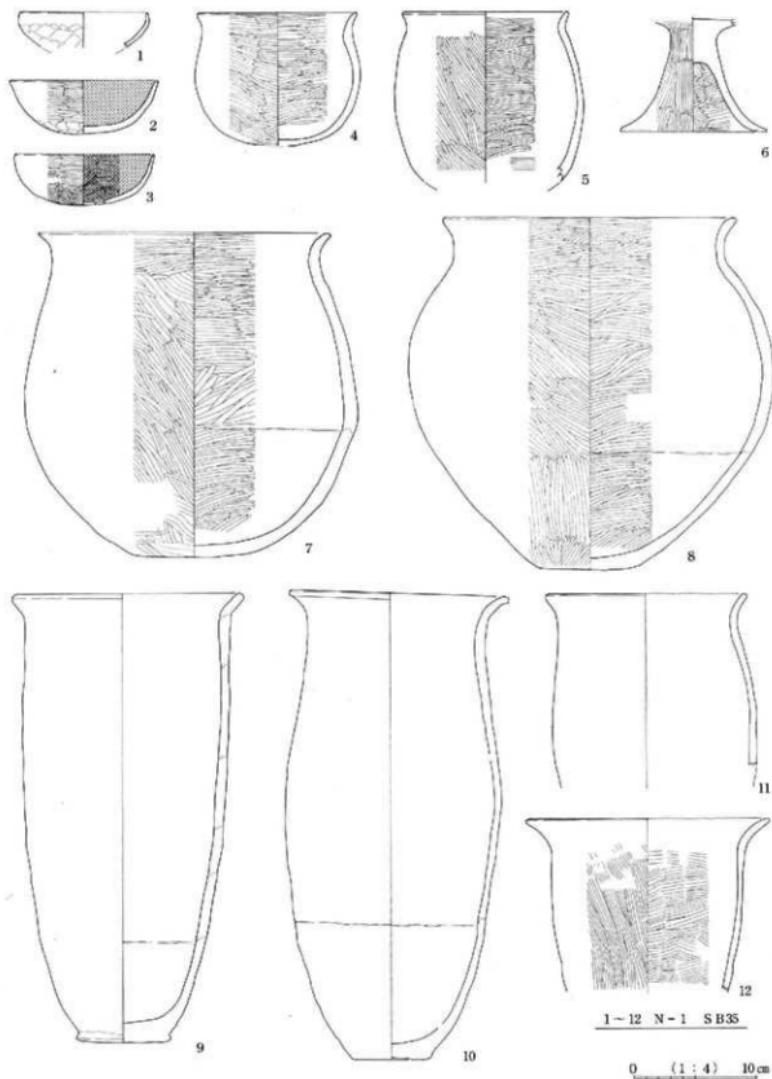


図189 VII区1次面出土土器実測図⑧ (S = 1 / 4)

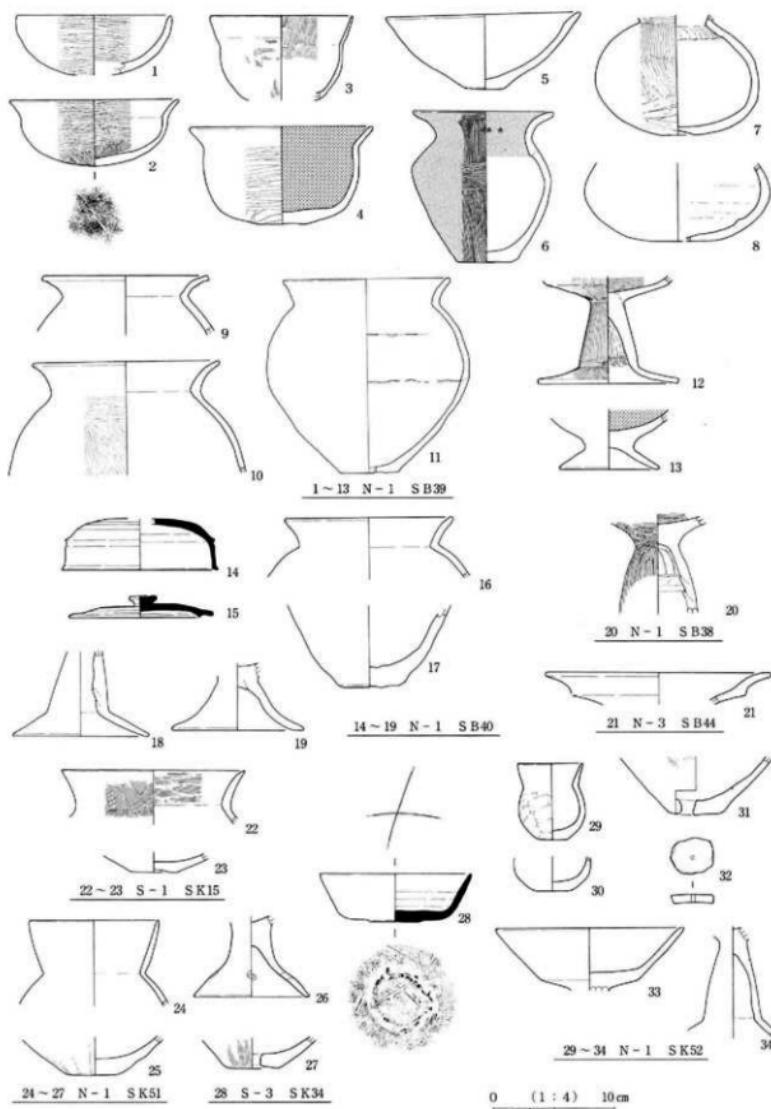


图190 VII区1次面出土土器実測図⑨ (S = 1 / 4)

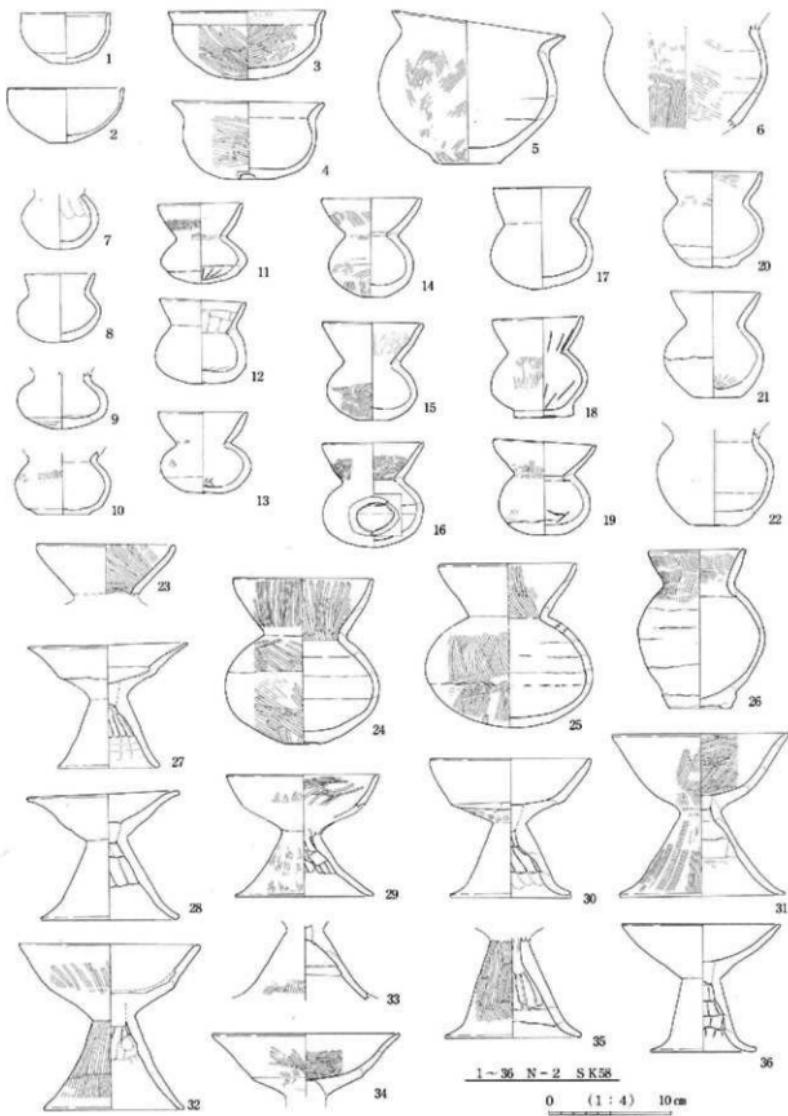


图191 VII区1次面出土土器实测图⑩ (S = 1 / 4)

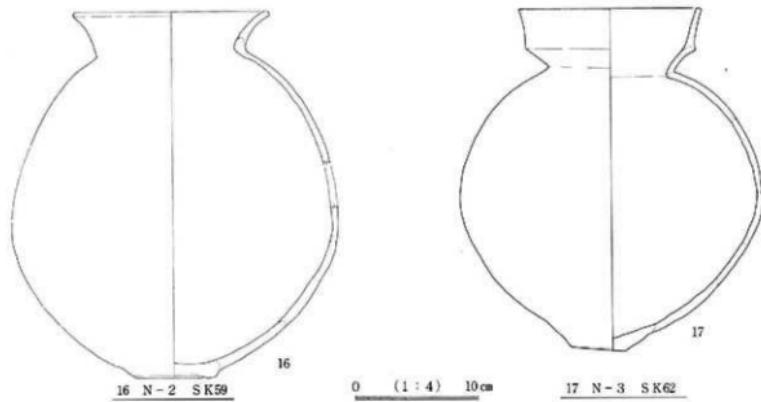
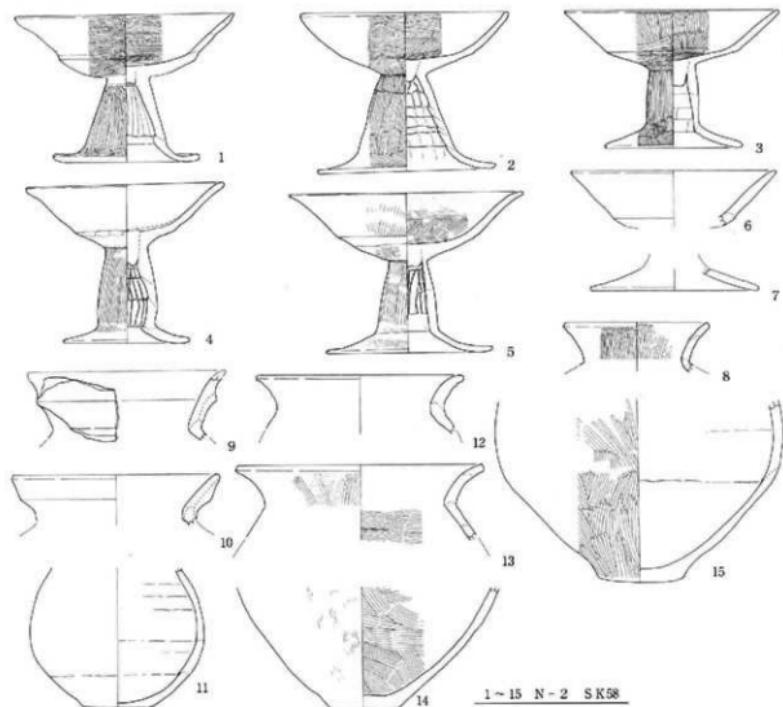


图192 VII区1次面出土土器实测图① (S = 1 / 4)

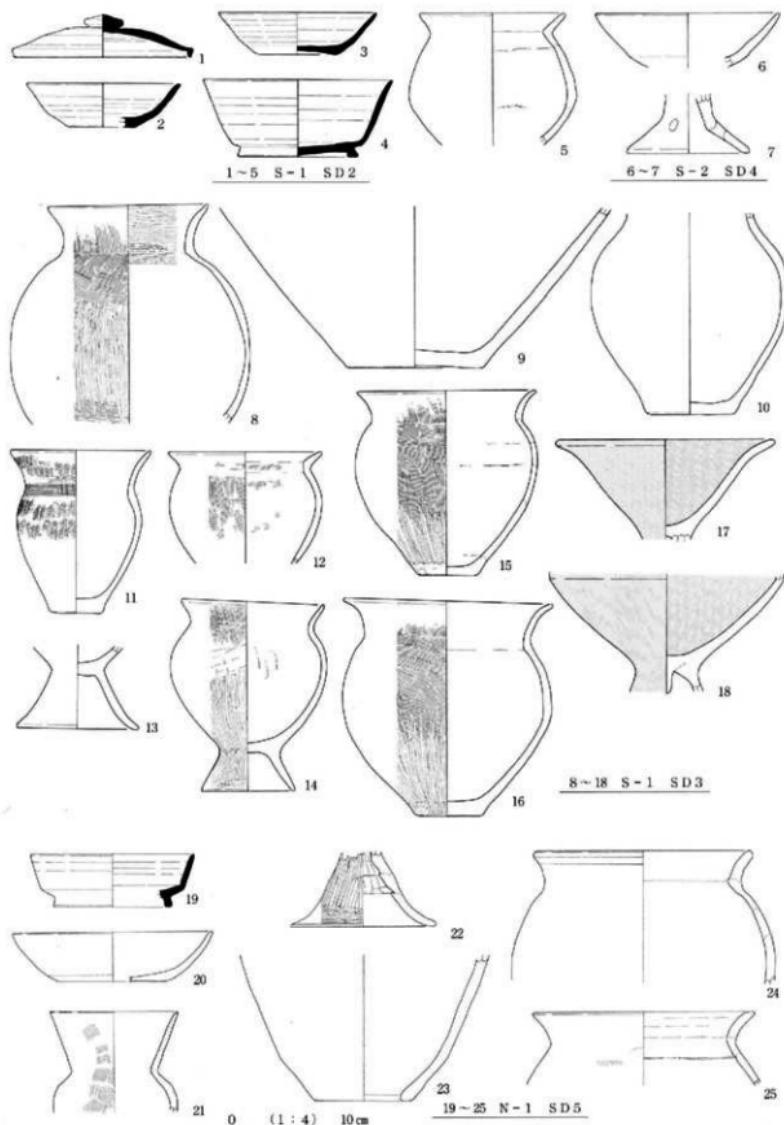


图193 VII区 1次面出土土器实测图⑫ (S = 1 / 4)

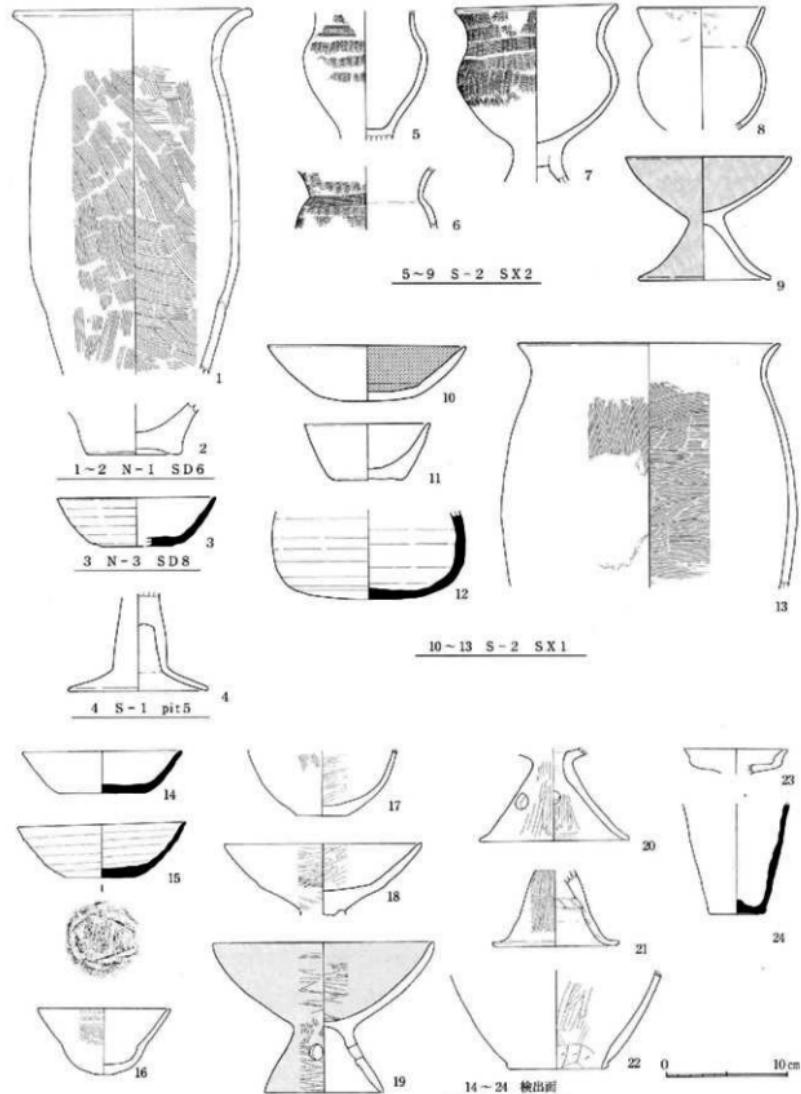


图194 VII区1次面出土土器実測図13 (S = 1 / 4)

2 2次面の調査

弥生時代後期から古墳時代中期の遺構が主体をなす。また、1次面遺構下に存在する古墳時代後期から奈良時代遺構の調査も実施している。

古墳時代中期 N- 3区で竪穴住居が検出された。N- 1・2区1次面で検出された竪穴住居・土坑を含め集落を形成するとみられる。S区ではS- 2地点でN- 3地点SB36の一部が検出されたのみで、基本的に遺構の分布はみられない。また、N- 3地点SB38以東に該期遺構は存在せず、集落域の南東端部に該当する可能性が考えられる。なお、篠ノ井塙崎地区ではこれまで該期集落跡は未検出で、新出資料となる。N- 3区で検出されたSB36・38は炉を有し、N- 1区1次面SB34・36・37ではカマドが作り付けられ、VII区内では相対的に西側が新しい傾向が認められる。カマドは北西方向を向き、住居住主軸方向は後続する時期に合致し、注意される。N- 3区SB35では白玉の未製品・薄片が出土している。VI区を含め調査区内からは多量の白玉が出土しているが、未製品が確認されたのはSB35のみで注目される。

古墳時代前期 S- 2・S- 1・N- 1地点より竪穴住居が、1次面S- 1・S- 2地点より溝が検出されている。一部遺構の重複がみられるが、密集度は低く、散発的に各地区に分布している。本区以東ではVI区で土器集中や土坑・周溝墓が認められるが、確実な竪穴住居としてはS- 2地点SB14が東端に当たり、新たに形成された集落域であると把握される。



写真165 N- 2 地点 S B30



写真166 S- 1 地点 S H01



写真167 N- 2 地点全景 (西から)



写真168 S- 2 地点全景 (西から)



写真169 N- 3 地点全景 (西から)

弥生時代後期 各地区で堅穴住居・土坑・溝が検出されている。S-1 地点 SD01以西では畠区を含めて該期遺構はみられなくなる。また、S-2 地点 SD03以東（VI 区西側）では周溝墓群が検出されて住居群は希薄となり、この間の限定された範囲に営まれた集落域と考えられる。住居間の重複はほとんどみられず、N-2・S-3 地点を中心とした比較的狭い範囲にまとまって分布している。S-3 地点 SB18・S-1 地点 SB03は比較的規模が大きく、床面上に焼土・炭が顕著に認められた。遺物出土量は全体的に少ないが、S-2 地点 SB13からは大量の土器が出士している。

地名	遺跡名	時代	遺構開拓		付属施設	特記事項	備考	遺構面積(m ²)	土器面積率(%)	平均土器数	
			先	後							
N-1	SB23	弥生後 ～古墳			船塗	床面上に灰堆山		196	212	174	
N-1	SK43	古墳						196	212		
S-1	SB01	奈良か			遺構の割り込み点より 床穴 大型住居?	復元 1 次面 SD11側より 方の可能性あり	P 6.2 リ土器焼土 N 区では検出されなかつた	196	212	166	
S-1	Pw03	古墳						196	213		
N-1	SB28	弥生後期か		SB35	船塗	1 次面 SB34・39下で検出さ れ、ピットはそれらに伴う		197	212	175	
N-1	SB29	古墳か	SB38 SB37		底削 なし	底土中より白玉4点出 現28上に重複することを確 認		197	212		
N-1	SK46	古墳～奈良	SK55					197	213		
N-1	SK51	奈良以降	SK56		船塗	東側で燒土、床面上の 灰堆層で灰堆出	燒土灰堆ではないが、東側時 に焼村等を施した可能性	197	212		
S-1	SB01	古墳	SB02	SD02(1) 3(柱根なし)	船塗 南窓側で壁削	東側で燒土、床面上の 灰堆層で灰堆出	燒土灰堆ではないが、東側時 に焼村等を施した可能性	197	204	176	
S-1	SB02	弥生後期	SB03 SD01		船塗 なし			197	204		
S-1	SB04	古墳	SK09		船塗 なし		黑色無釉土器の周囲に は灰散布	197	204		
S-1	SD01	弥生	SB02	SD02(1)				N 区は 1 次面 SD02(1) により被 覆されたため、検出されず	197	213	
S-1	SK01	古墳		平垣 墓洞				197	212		
N-1	SB25	古墳	SB27		船塗 未検出	カマド 灰堆か(北壁)	床面上より白玉1点 出土	燒土に隣接して出土した土器 需要の上で灰を隠す	198	209	
N-1	SB27	古墳		SB25	船塗 なし		北壁に灰散布 白玉層 より白玉1点出土		198		
N-1	SK49	古墳		墓周			床面上に灰化材、ピット周辺に灰散布、灰より土 器出土		198	212	
S-1	SB03	弥生後期	SB04(1)		墓周 27				198	205	177
S-1	SK10	弥生～古墳							198	212	
S-3	SB19	弥生後期	SB21(?)	SB18(1) SE05	船塗 なし		床面立縁の西側は 1 次面 SB18(1) の重複によって船塗未検 出		198	209	
S-3	SK37	弥生					S-1 区 SD03 に伴う振り込みの可能性あり。また、東 側に隣接して灰の散布がみられ、これも SD03 に隣接 する可能性が考えられる。		198	212	
N-2	SB30	奈良	SK01		船塗 3	カマド(北壁)	S-3 地点 SB16 と同一 灰堆・土玉出土		199	209	165
S-3	SB16	奈良	SB18		船塗 1	東西壁は不明瞭でひとまとめられ大きく覗いた可能性が 高く、状況から S-3 地点 SB30 と同一と判断される。			199		

発見名	遺構名	時代	重複開発		柱穴 柱穴	付属施設	特記事項	備考	遺構回 数番号	土器回 数番号	写真 番号
			先	後							
N-2	SB33	古墳	SB06	現跡 なし				住居跡の可能性低い 大型土坑か	199	211	
N-2	SK52	古墳									
N-2	SB32	古墳～奈良	SB18	駄床 2			白玉1点出土		199	211	
S-3	SB17	奈良～古墳									
S-3	SB18	弥生	SB16・17	駄床 3以上	現跡 印		床面上に灰敷布 西周壁面で灰土塗出	西周部はSB18の廃金時に当 初検出よりも広がることを確 認	199	208	181
N-3	SB06	古墳	SK06-01 SD10	駄床 印 5			白玉1点出土 S-2 地点SD10と同一 遺構	大型土坑により西側を大き く侵食されるが、本来はS-2 地点SD10に警がる形態と考 えられる。	200	211	171
S-2	SB12	古墳	(SB15)	SB08・10 SE04	駄床 3	印	印周辺に灰敷布		200	205	170
S-2	SB08	古墳	SK17・21 SE04	駄床 なし	印	印	住居跡は満床になる	住居跡の可能性は低く、大型 方形土坑の可能性大	200	205	170
S-2	SB15	古墳	(SB12)	駄床 なし	印	印	SB12の調査後確認さ れたため、重複は不明		200	205	
S-2	SB04	弥生後 古墳									
S-2	SK17	奈良～平安	SB08 SB13	駄床状					200	212	
S-2	SB13	弥生後期									
S-2	P022	不明	SK17	駄床 なし	印	印	ガラス玉1点出土	覆土は土器片とともに焼土・ 瓦を含む	200	206～ 208	179
N-3	SK06	弥生									
N-3	SB35	古墳	SK38	駄床 1 剪札切り落	印	印	白玉製作に関わるビッ ト(P-3) 品出	白玉製作工場の可能性を考え られる	201	211	172
N-3	SB38	古墳									
S-2	SB07	弥生後期	SB14	駄床 なし	印	印	覆土上中層で土器出土		201	204	
S-2	SB11	古墳									
S-2	SB14	古墳	SB11 SB09	駄床 3	印	印	土器はSB14重複部分より出 土し、SB14との病害な前後 関係は不確定		201	205	
S-2	SB09	古墳後 期以降									
S-2	SK36	古墳	SB14	駄床 なし	印	印	SB14底部・柱穴を掘り込む		201	212	
N-3	SB34	古墳	SB06	駄床 1	印	印	白玉6点出土 S-2 SK06と同一遺構		202	212	176
S-2	SB05	古墳									
S-2	SB06	古墳	SK05	礎面 未検出	印	印	床面上より白玉3点出土 N-2 地点SK06と同一遺構		202	204	
S-2	SD03	弥生後期									

表18 VII区2次面主要検出遺構一覧表

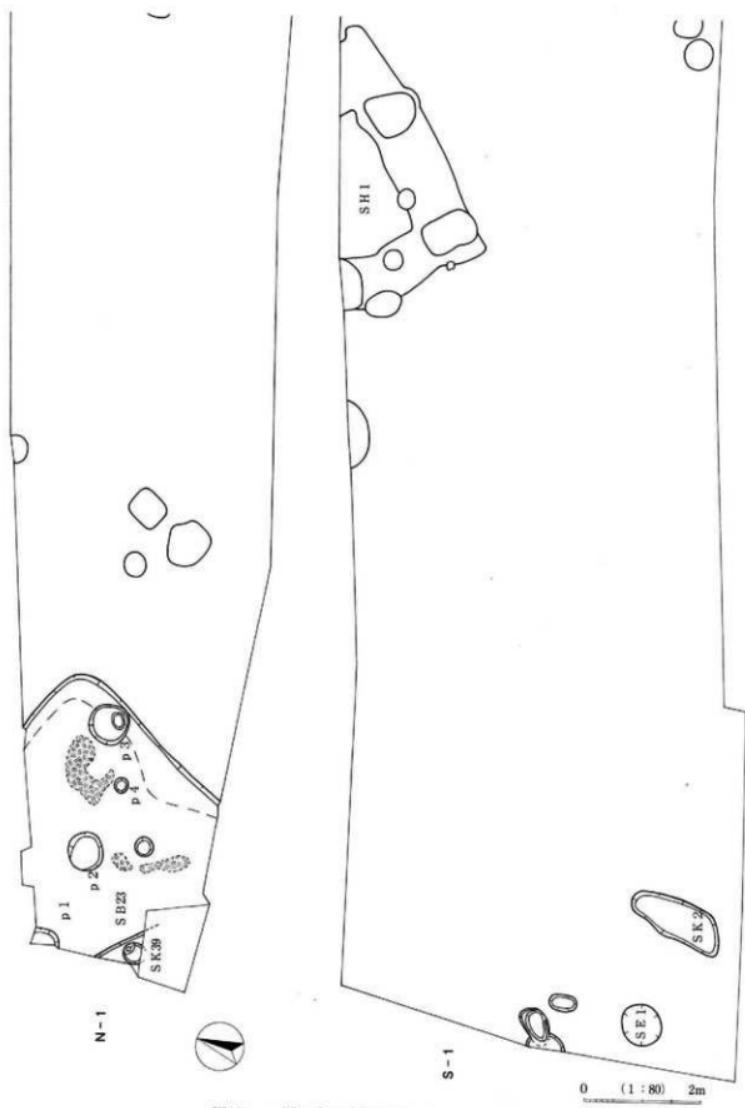


図195 VII区2次面遺構実測図① (S = 1/80)

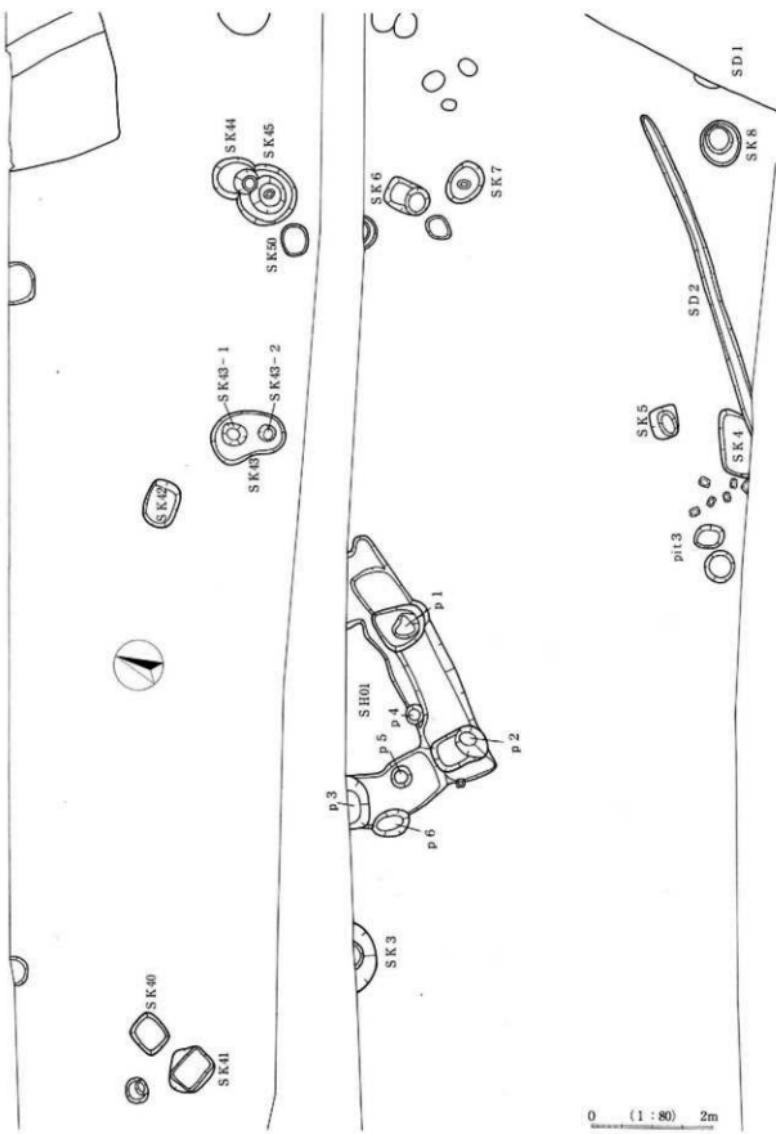


図196 VII区2次面造構実測図② (S = 1/80)

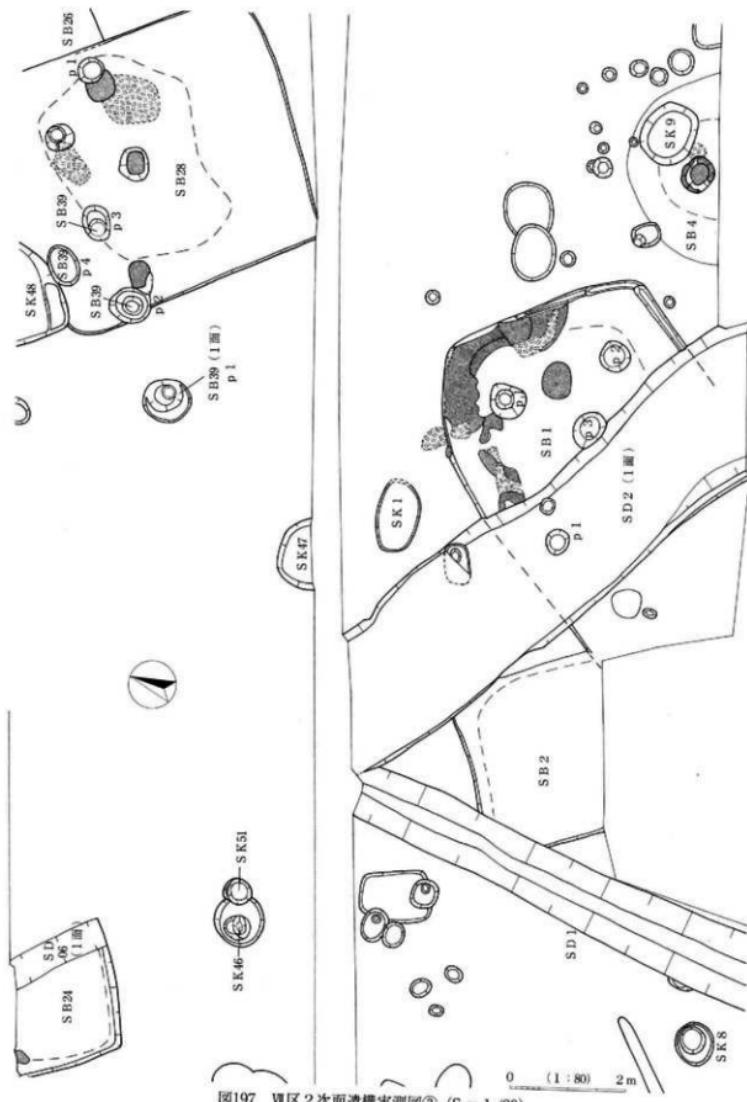


図197 VII区2次面遺構実測図③ (S = 1/80)

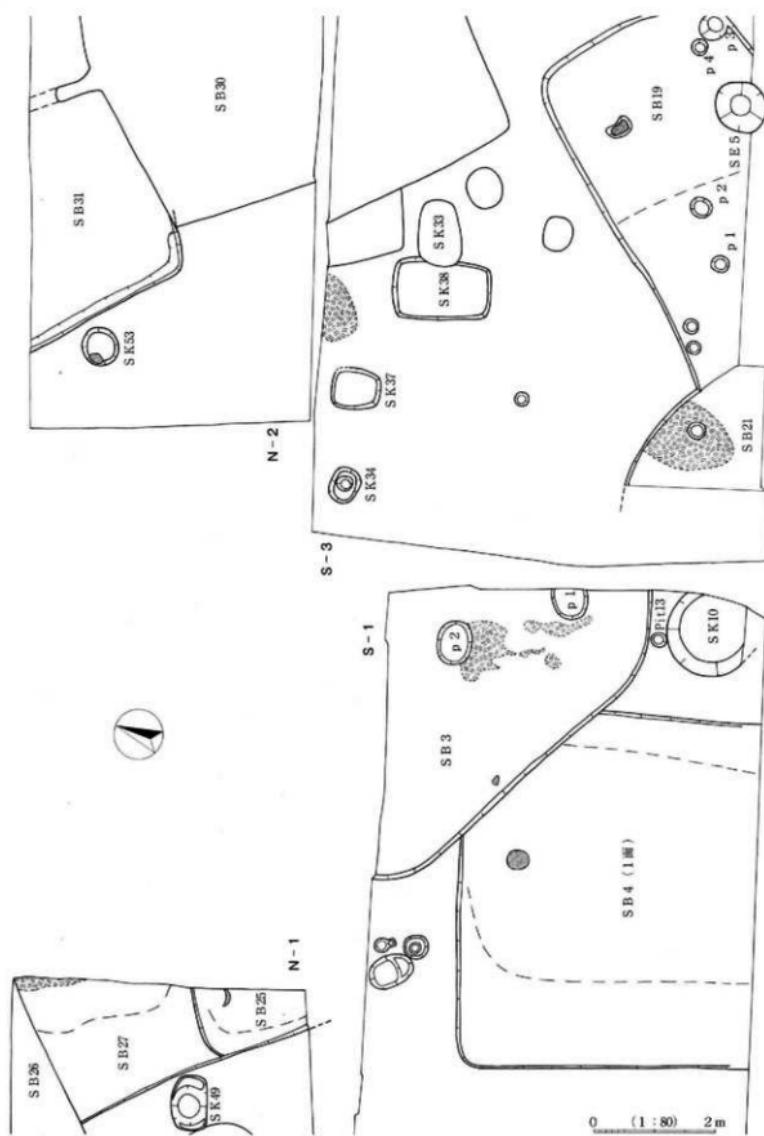


図198 VII区2次面造構実測図④ (S = 1/80)

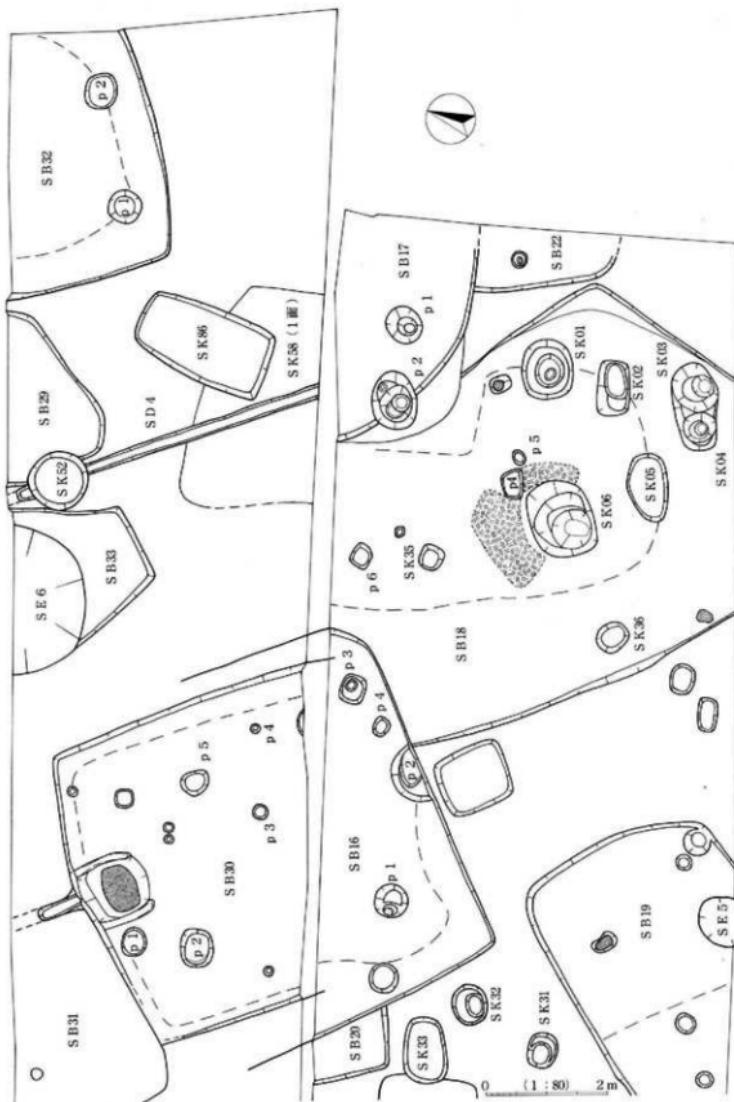


図199 VII区 2次面造構実測図⑤ ($S = 1/80$)

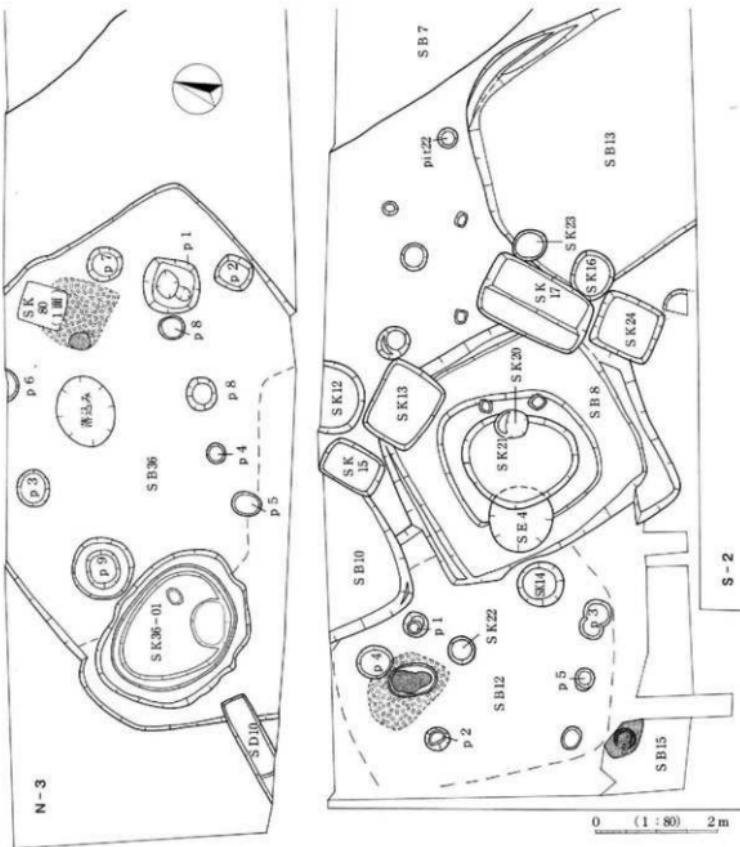


图200 VII区2次面遺構実測図⑥ (S = 1/80)



写真170 S-2地点SB12・SB08



写真171 N-3地点SB36

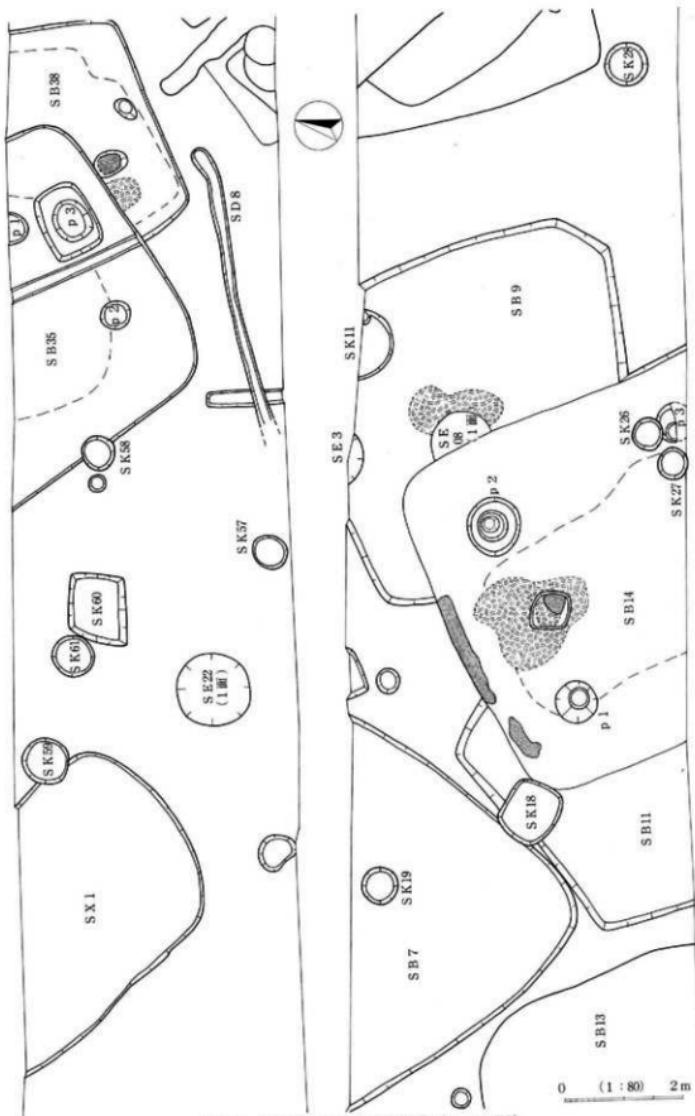


図201 VII区2次面造構実測図⑦ (S = 1/80)

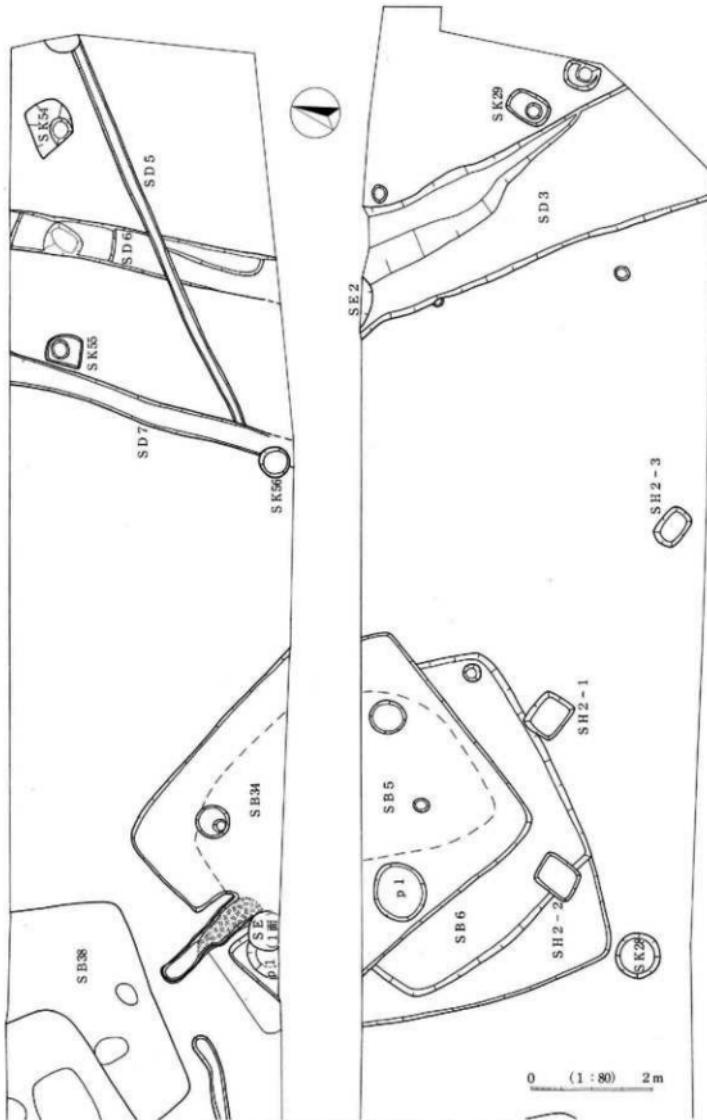


図202 VII区2次面遺構実測図⑧ (S = 1/80)

N-2地点 SB35・38 SB35は北側約15mが調査区外となるが、一辺約5.1mを測る方形の竪穴住居である。中央部に貼床が認められる。柱穴はP1のみでP2が柱穴になるかどうかは定かでない。ほぼ中央に間仕切り溝かと考えられる浅い溝が確認されている。

本住居からは白玉の未成品が出土している。P3上面を含む周辺の床面上（右図のトーン部）より出土している。P3はいわゆる工作用ピットの可能性を考慮して掘り下げたが、剥片などは全く出土しなかった。砥石や工具等の出土も認めらない。白玉製作工房とするには不十分であるが、本住居からのみ未製品が確認されていることは重要である。Ⅳ・Ⅴ区を中心に多量に出土した白玉の製作に本住居が関わったことは確実である。

SB38は一辺約3.7mを測る方形の竪穴住居である。北側で明らかにSB35に掘り込まれている。床面は貼床で炉が確認されている。床面上より良好な状態で土器群が出土している。甕などの残存がよいことは該期他住居出土土器群との違いが指摘でき、注意される点であろう。



写真172 SB35・38

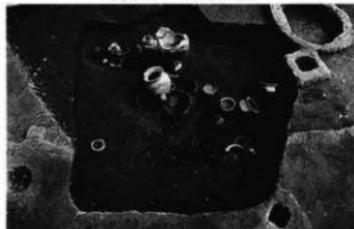


写真173 SB38遺物出土状況

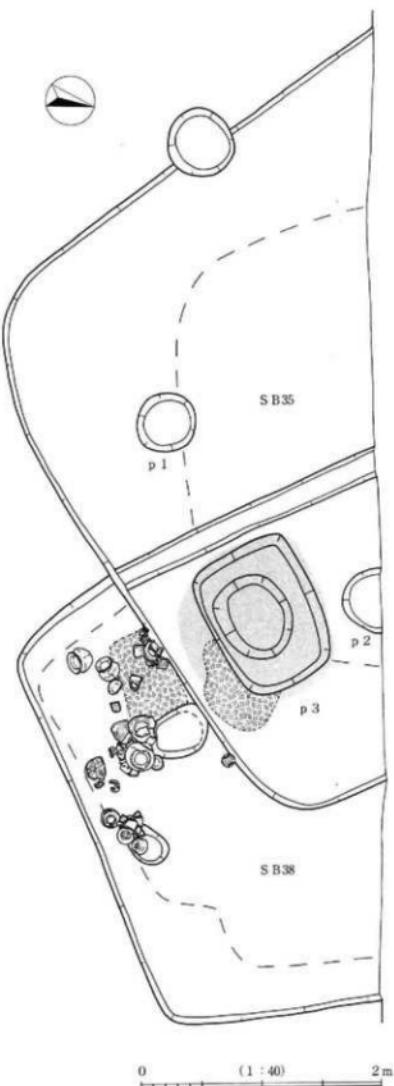


図203 SB35・38実測図 (S = 1/40)

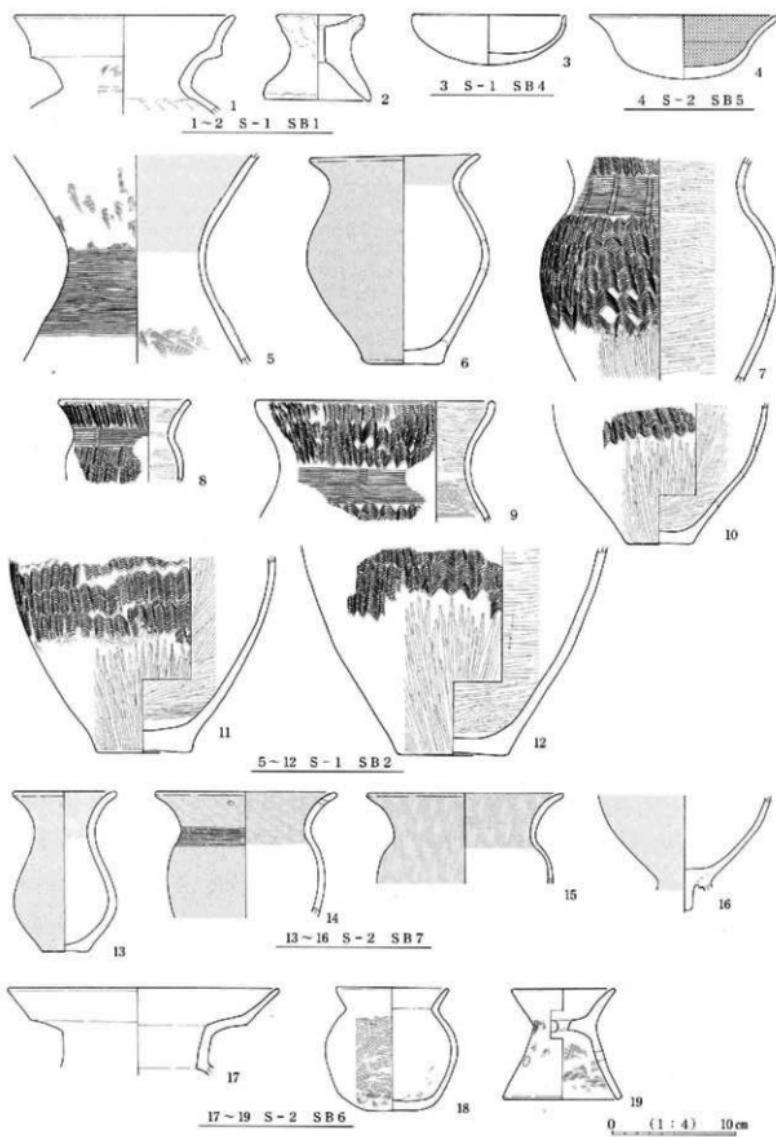


図204 VII区2次面出土土器実測図① ($S = 1/4$)

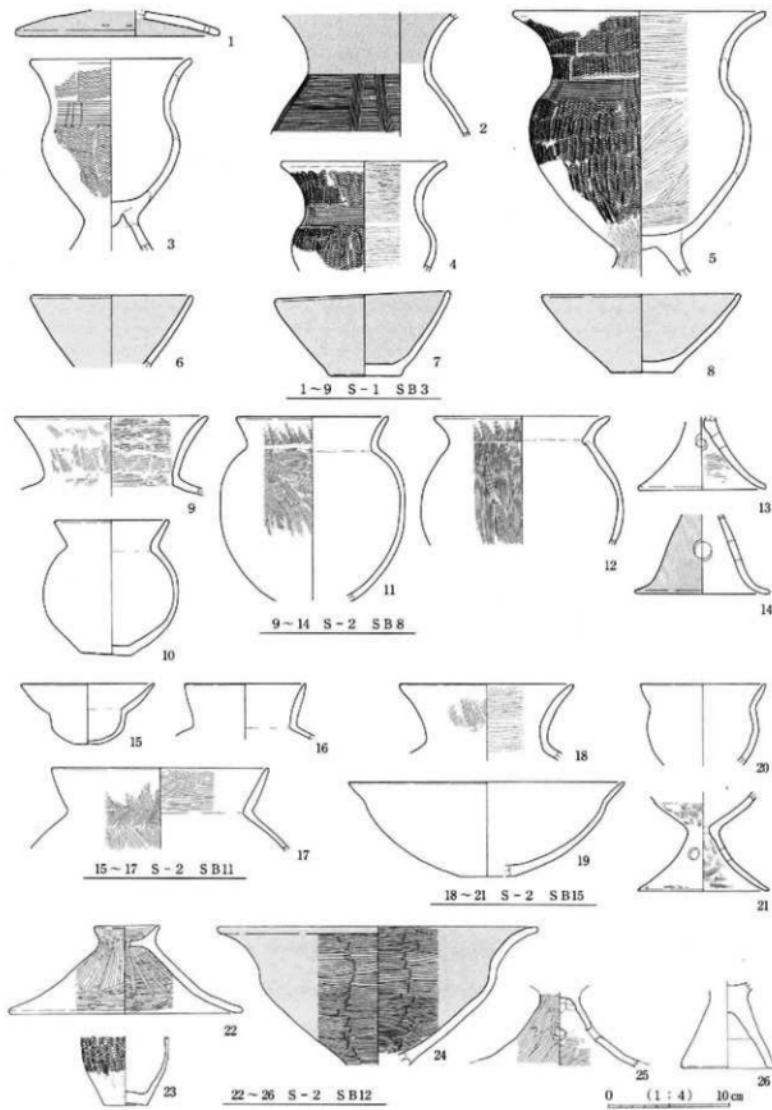


图205 VII区2次面出土器实测图② (S = 1 / 4)

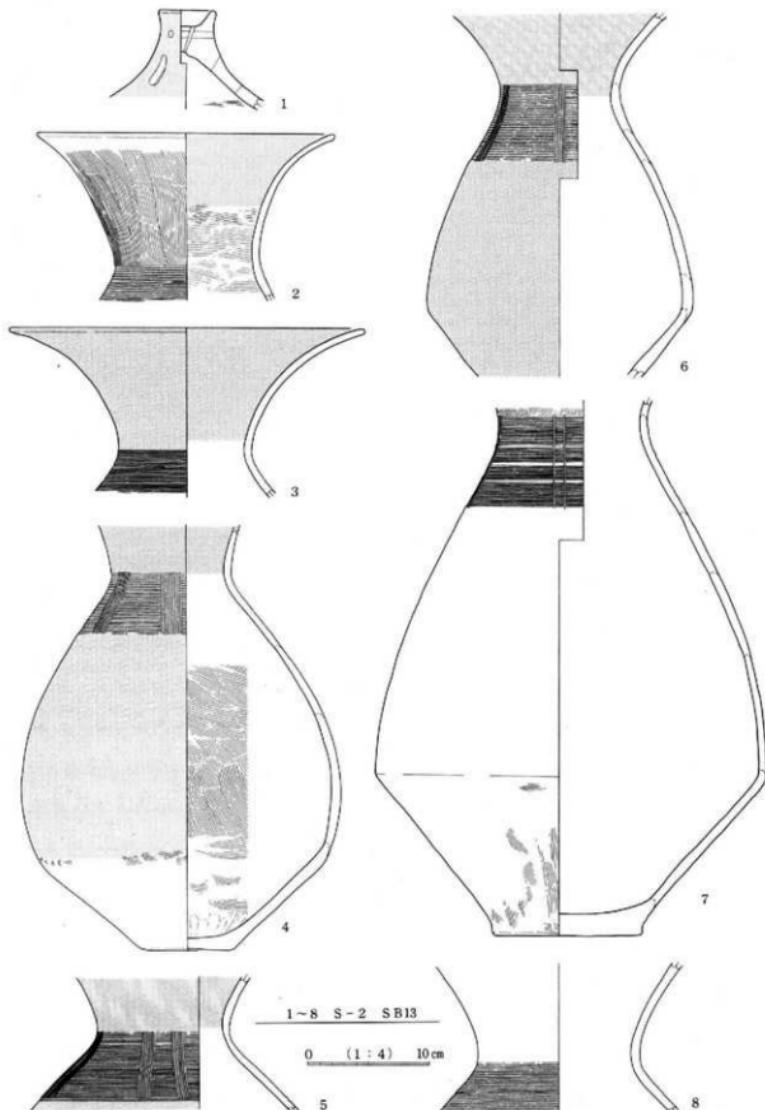


图206 VII区2次面出土土器実測図③ (S = 1 / 4)

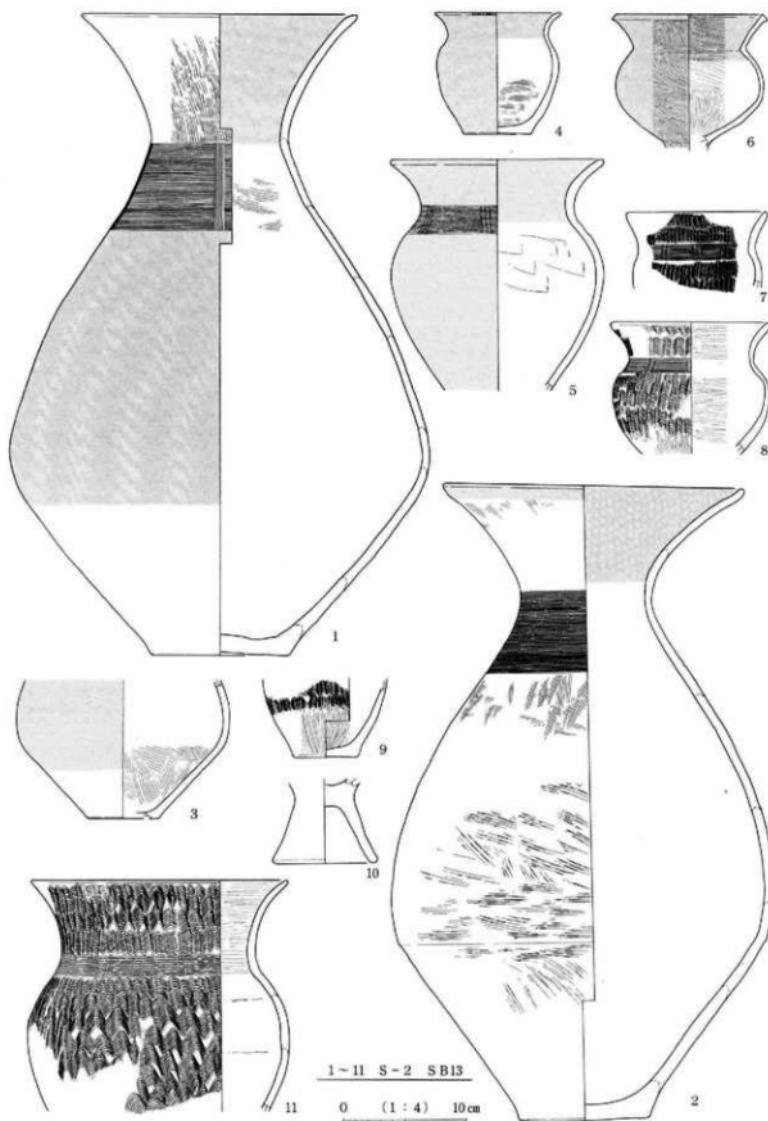


图207 VII区2次面出土土器実測図④ (S = 1 / 4)

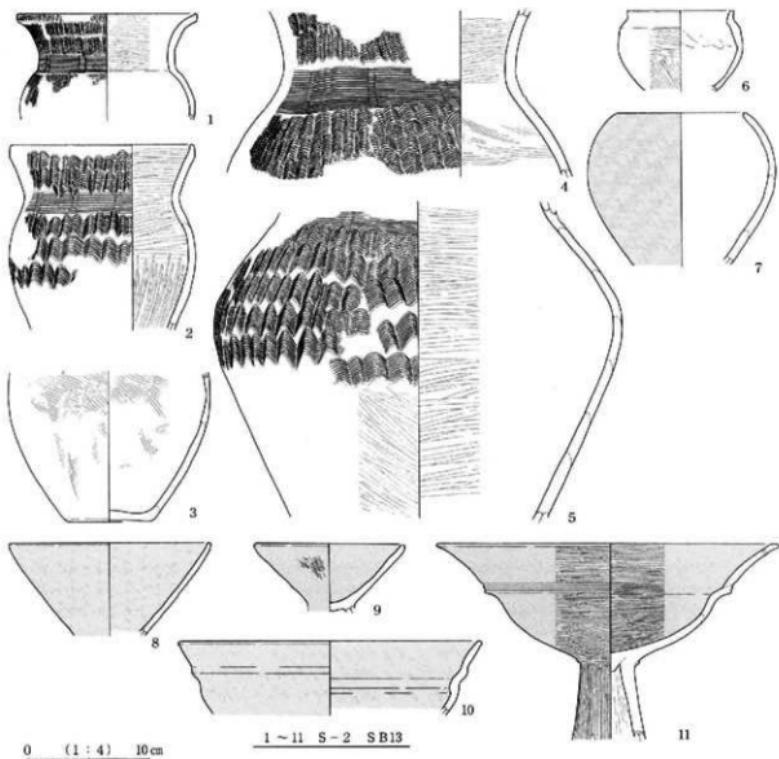


图208 VII区2次面出土土器实测图⑤ (S = 1 / 4)

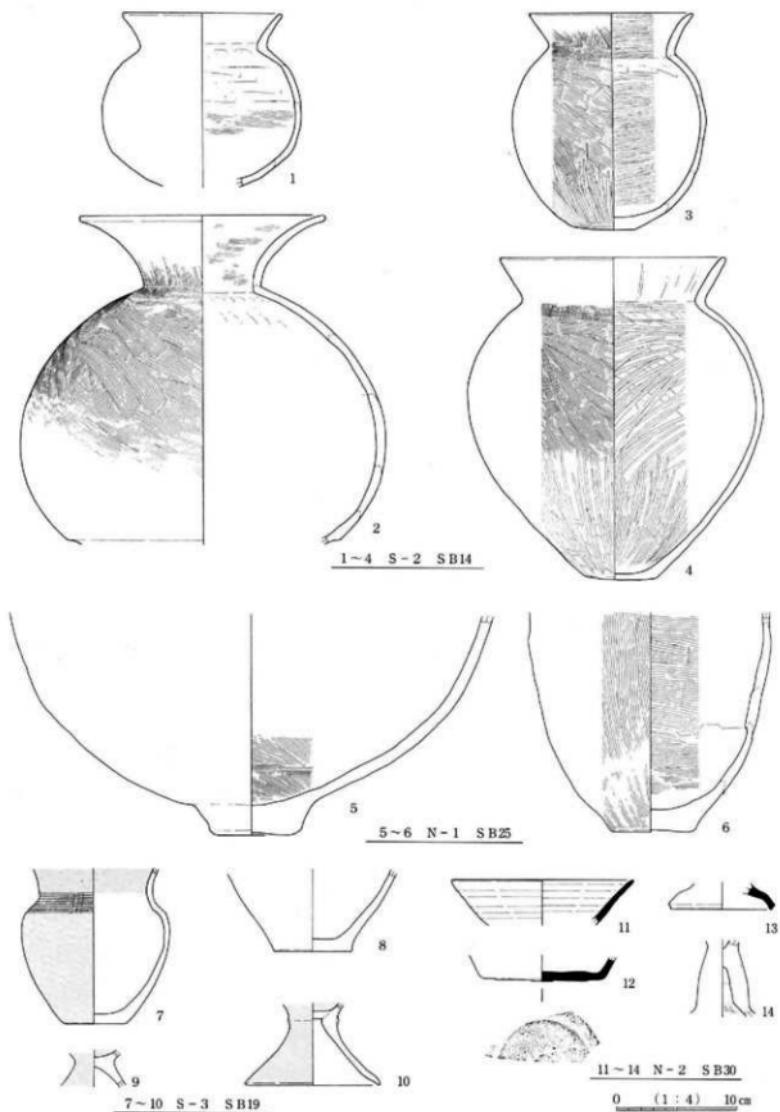


图209 VII区2次面出土土器实测图⑥ (S = 1 / 4)

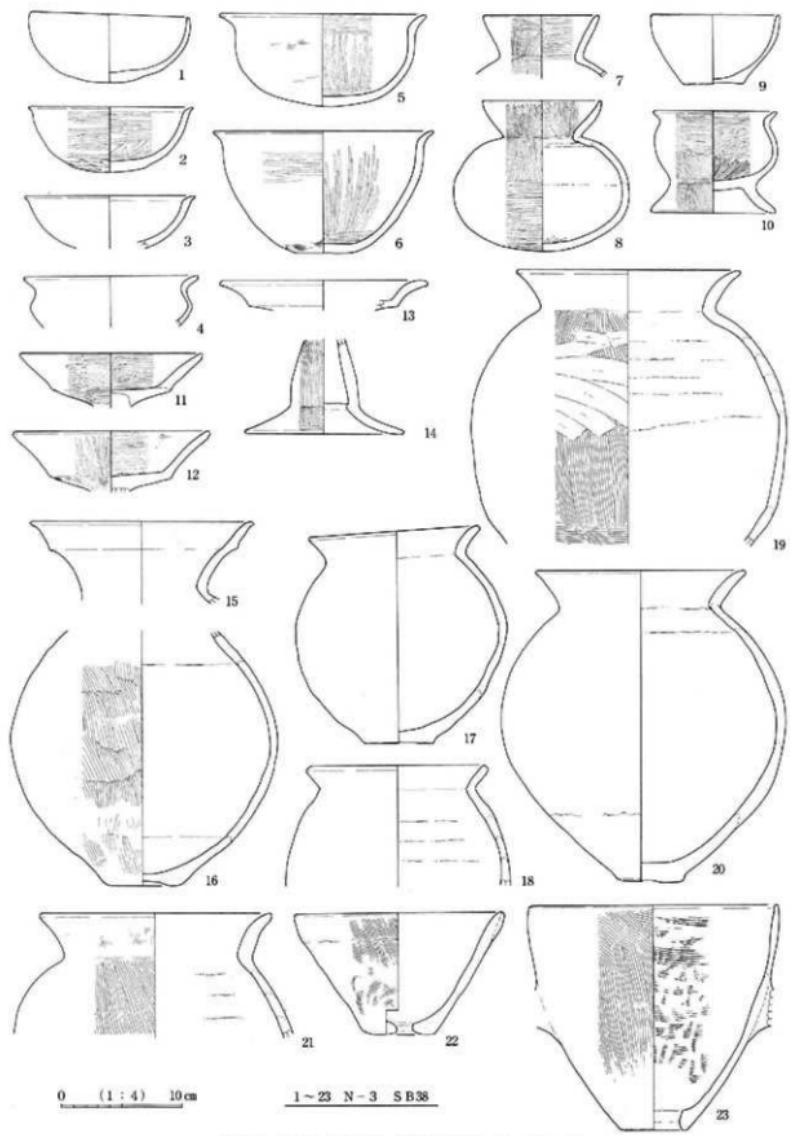
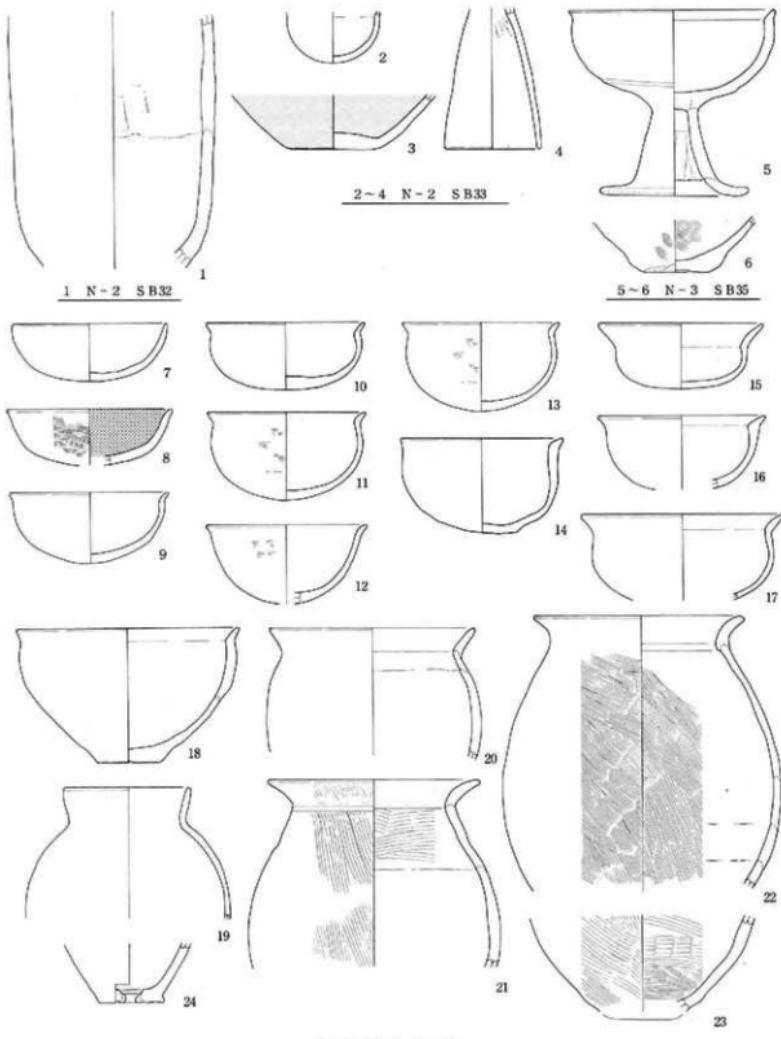


図210 VII区2次面出土土器実測図⑦ (S = 1 / 4)



7~24 N-3 SB36

0 (1:4) 10cm

図211 VII区2次面出土土器実測図⑧ (S = 1/4)

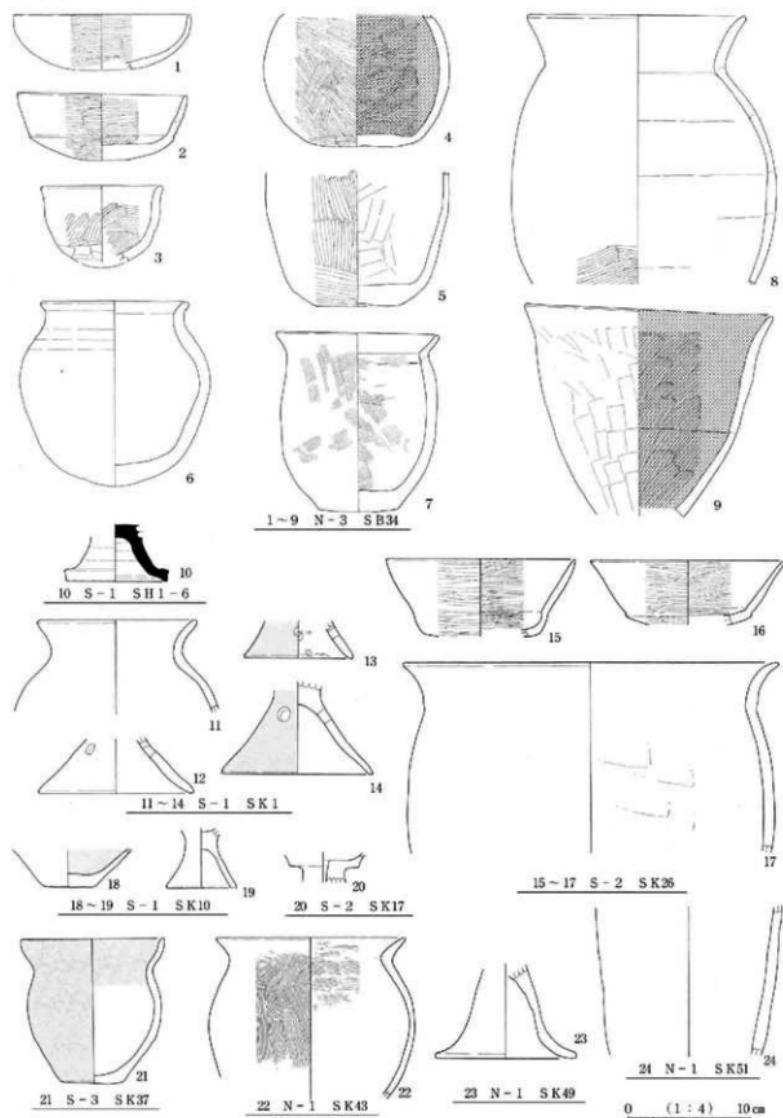


图212 VII区2次面出土土器实测图⑨ (S = 1 / 4)

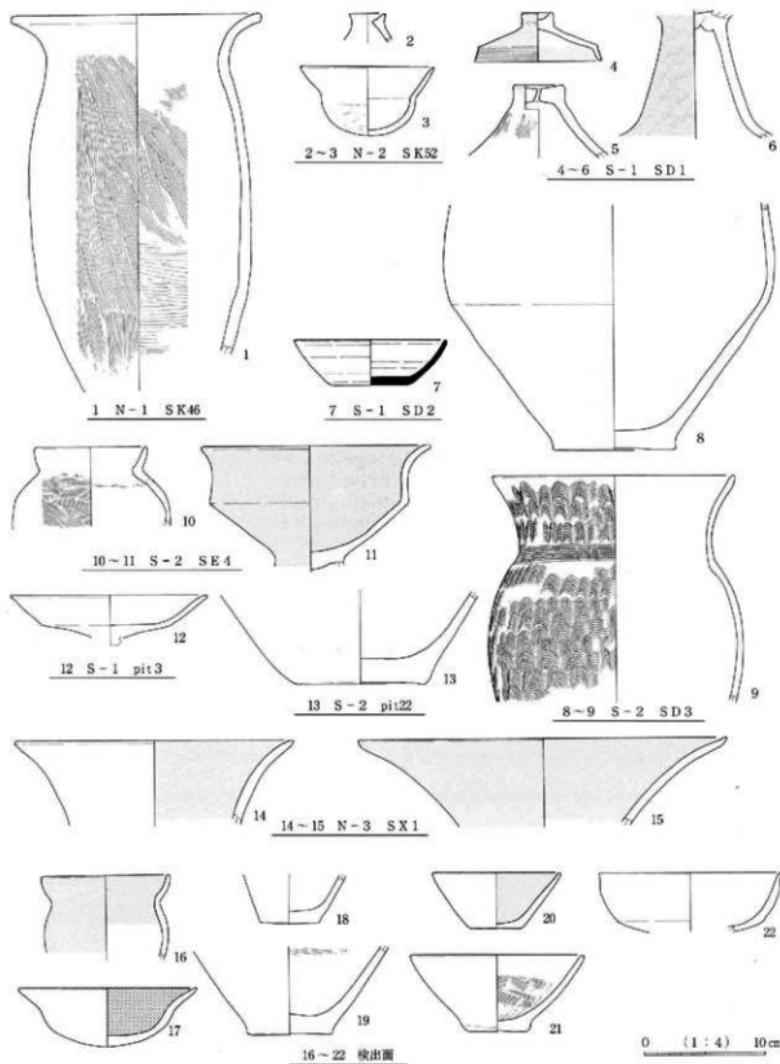


图213 VII区2次面出土器实测图⑩ (S = 1 / 4)



写真174 N- 1 地点 S B23



写真175 N- 1 地点 S B28



写真176 N- 3 地点 S B34



写真177 S- 1 地点 S B03



写真178 S- 1 地点 S B01

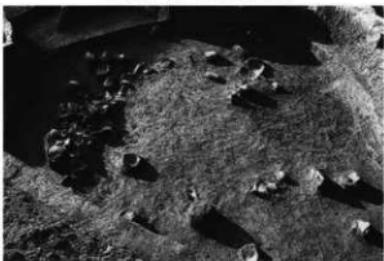


写真179 S- 2 地点 S B13 (土器出土状況)

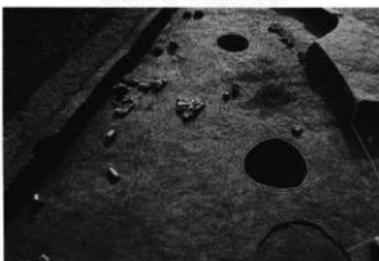


写真180 S- 2 地点 S B14



写真181 S- 3 地点 S B18

XI VIII区の調査

本区は北陸新幹線建設用の工事用道路によって南北に分割され、さらに近隣畠地への出入口の確保から北側（N区）を4分割、南側（S区）を3分割した都合7地点により発掘調査を実施している。地点名は南北ともに東より1・2・3・4地点とし、これに南北のN・Sを冠して呼称している。調査面はすべての地点で2次面調査を実施した。ただし、1・2次面間にほとんど間層はなく、遺構は垂直方向にはば連続して存在している。実際に2次面の検出遺構は1次面で検出された遺構と時期的に大きく異なることはなく、1次面調査時に遺構直下でその存在が確認できたものも少なくない。1・2次面は文化層として区分されるものではなく、上層遺構を除去して下層遺構を調査するための作業上の確認面である。

1 1次面の調査

方形ピット群 N-3・S-2・S-3地点では調査区全面より方形ピット群が検出された。列は南北方向に明確で、東西方向も列をなすとみられる。列状に検出されなかったN-1・N-2・S-1地点でも方形ピット群の存在は確認され、本来調査区全面に展開していたと考えられる。覆土は他地区同様に黄褐色砂で、確実に本ピット群に伴うと考えられる遺物の出土はなかった。重複状況は検出されたすべての遺構を掘り込んでおり、最も新しい時期の所産と考えられる。

畝状遺構 N-3地点の東側ならびにS-2地点のほぼ中央では、方形ピット群下より北西-南東方向に並列する畝状遺構が検出された。N-3地点9条、S-2地点20条の畝状遺構は位置関係からも一連であることが確実である。覆土は暗褐色粘質土で縛まりは弱く、遺物の出土はみられなかった。

平安時代 墓穴住居7軒ばかりが検出された。墓穴住居は調査区西端部のS-3地点で4軒、N-2・S-2地点で隣接して2軒とまとまる傾向が強く、広く展開はしない。ここで注意されるのは、前述した畝状遺構が住居に隣接した該期遺構空白域に存在する点である。出土遺物がなく決め手に欠けるが、遺構分布状況からは平安時代住居との組み合わせの蓋然性が最も高く、集落構造を復元する手がかりになると考えられる。

奈良時代 2次面S-1地点SB26を含め、各地区に散在する状況で墓穴住居11軒・土坑などが検出されている。古墳時代後期住居と重複する傾向が強く、継続して集落域を形成した可能性が考えられる。確認されるカマド方向は北西向きと北東向きに2分される。北西方向は古墳時代以来的一般的方向であるが、北東方向は本区に限ると該期にのみみられる。

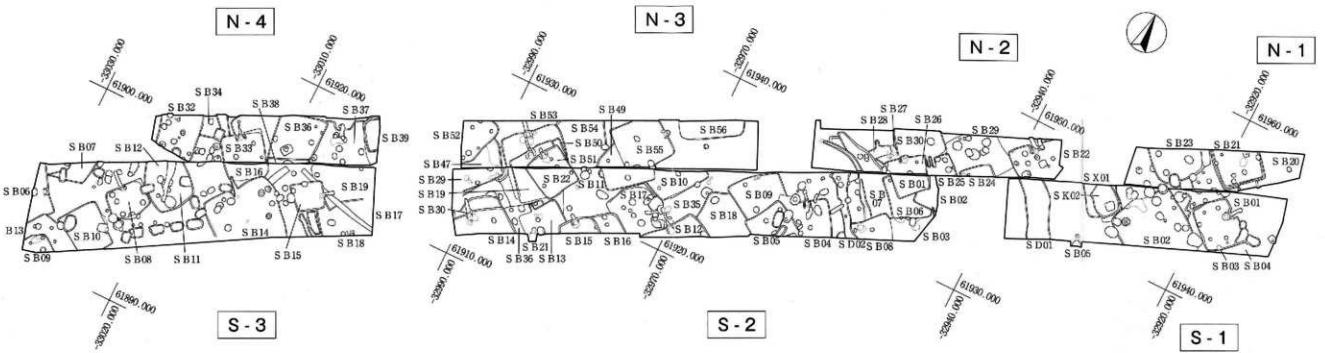
古墳時代 古墳時代後期は墓穴住居・土坑が1次面を主体として多数検出されている。墓穴住居は18軒ほどが各地区で検出されており、東側のⅦ



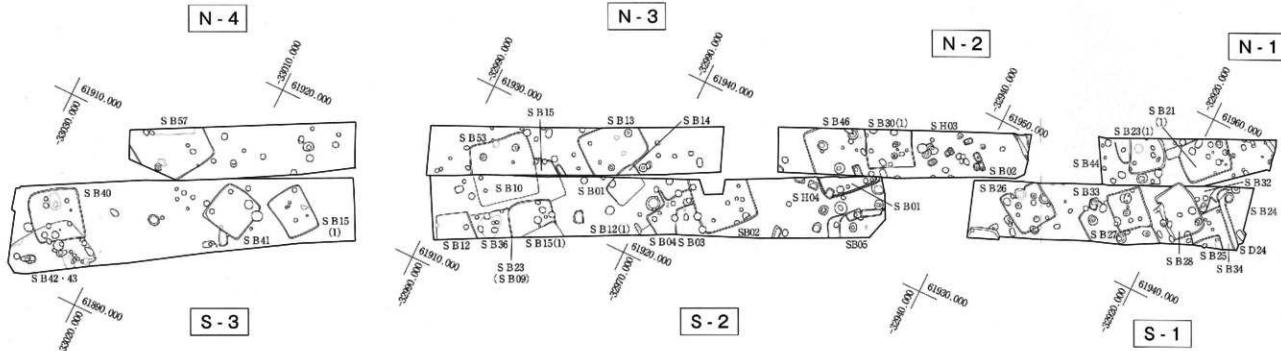
写真182 方形ピット群 (N-3地点)



写真183 畝状遺構 (S-2地点)



1次面



2次面

0
(S = 1 : 400)
20m

図214 VII区1次面・2次面造構分布図 (S = 1/400)

施設名	遺構名	時代	重複開基		材質	付属施設	背面事項	備考	遺構開 基番号	土器相 關番号	写真 番号
			先	後							
S-3	SB09	平安		SB13	粘土		表面に炭化布 白玉出土		215	241	
				1							
S-3	SB13	平安	SB06・10	SB09	陶器 なし		白玉出土		215	241	
S-3	SB06	平安	SB07	SB13	粘土 なし	カマド(東壁)	白玉出土		215	242	213
S-3	SB07	古墳		SB06	粘土 なし		上杭群の重複があり、東側を中心にブラン把握不充分		215	241	
S-3	SB10	平安		SB13	粘土 なし	カマド(東壁) (SK16により破壊)	墨書き土器出土		215	242	
S-3	SB08	奈良			粘土 3	カマド(北壁)	白玉出土	北東部柱穴確認できず	215	241	213
S-3	P625	古墳～奈良							215	246	
N-4	SB32	古墳	SB31・34		粘土(一部分)		白玉出土		216	234	
					なし						
N-4	SB34	古墳		SB32	陶器		白玉出土		216	235	
			SD06 SK35		なし						
N-4	SK55	古墳～奈良	SB33・34 SD09				白玉出土		216	235	
N-4	SB33	古墳	SK35		粘土 なし	カマド(北壁)	S-3 地点 SB16と同一遺構	白玉出土	216	234	203
S-3	SB16	古墳	SB14		粘土 なし		N-4 地点 SB33と同一遺構		216	246	
S-3	SB14	古墳		SB16		カマド(北壁)	土器集中2箇所、白玉 (多量)・骨玉・土玉・ 土錐出土	土器群の横浜段階で降雨面に より未満したため、出土状況 は作成できず	216	243	103
				4					226	244	104
									245	245	
S-3	SB11	古墳	(SB12)	SK30 SD02	粘土 なし		北窓床面上に炭化布		216	242	
S-3	SB12	古墳		(SB11)	粘土 なし		SB11の跡がない地点で掘り下げる可能であったため、 剥離焼として調査を実施したが、剥り込み量が 自然とせず、同一遺構の可能性も考えられる。		216	246	
S-3	SK24	古墳			平塗 なし		周辺の同層土器群が判別 なすが、柱椎は確認されず		216	246	
N-4	SB36	古墳		SB36	粘土 なし		便面より紙袋土 白玉出土		217	235	195
N-4	SB38	古墳	SB36		陶器 なし		S-3 区で検出されず、底 がることはない	住跡ではなく、溝洗の遺構 になら可能性が高い	217	235	204
N-4	SB37	古墳		SB36・39	粘土 なし	カマド(北壁)	S-3 地点 SB19と同一遺構 の可能性あり	勾玉・白玉出土	217	234	
S-3	SB19	古墳		SB35・37 SD04	粘土 なし		便面よりS-4 地点 SB37と同一位置の可能 性高い	西・南壁とともに住跡構の重 複により把握されず	217	246	
S-3	SB15	古墳～奈良	SB19		陶器 なし	カマド(東壁)	古墳時代中期上器は SB19か らの遺構か	古墳時代中期上器は SB19か らの遺構か	217	245	215
S-3	SB17	古墳	SB19	SB15・18	粘土 なし		白玉出土	時期は重複關係より確定	217		
S-3	SB18	古墳～奈良	SB17		粘土 未検出	カマド(北壁)	SB17の開口中にカマドのみ 検出		217	246	
N-3	SB52	古墳	SB47		粘土 1		白玉出土		218	231	
N-3	SB47	古墳		SB52	粘土 なし		便面上に薄い炭化布	S-2 地点 SB29と同一遺構	218	230	
S-2	SB29	古墳	SB31		陶器		コモチ石が便面と2箇 所より軸中心に出土。	N-3 地点 SB37と同一遺構	218	230	208
N-3	SB53	古墳	SB54	SB48・51	陶器面 2	カマド(北壁) 石材使用	白玉出土	2次面 SB53と同一で2次面 にて全面開査	218	231	202
S-2	SB30	古墳	SB31	SB14	陶器面 なし				218	240	208

地点名	遺構名	時代	重要関係		付箋発現	特記事項	備考	東側面 北向き	上部側 北向き	写真 番号	
			先	後							
N-3	SB48	古墳	SB53	SB51	貼床	カマド（北壁）	S-2 地点 SB19と同一遺構	白玉出土	218	230	202
S-2	SB19	古墳		SB22	貼床 なし		S-2 地点 SB48と同一遺構		218	238	
N-3	SB51	春良	SB48・53		貼床 1?	カマド（北壁）	S-2 地点 SB51と同一遺構		218	230	202
S-2	SB22	春良	SB19		貼床 2		N-3 地点 SB51と同一遺構	お墳時代土器は捉入品としてSB19に帰属するか	218	239	
S-2	SB14	古墳	SB30-31-36		貼床 1	カマド（北壁）	東晉期より埴上・炭化材焼出		218	237	
S-2	SB13	古墳	SB36	SB15 SB21-38	貼床 なし	カマド残火（北壁）			218	238	
S-2	SB21	古墳	SB13			カマド	カマドのみ検出		218	240	
N-3	SK69	中世以降					1次面方ピット群・瓦状遺構とともに検出した円形土坑で遺物は捉入と判断される			231	
N-3	SB54	古墳		SB49・53	地蔵 なし				219	230	
N-3	SB49	平安	SB54-55		地蔵 なし				219	230	
N-3	SB55	古墳～春良	SB37 SK78	SB49	貼床 なし	石芯カマド（東壁）	SB49下で確認 白玉出土	多層の古墳時代土器は2次而SB31に帰属か	219	233	
N-3	SK78	古墳か	SB37 (S-2)	SB55			南側壁面に焼け	焼けの焼けはS-2 SB37 カマドとの関連か SK76-77 と板張・埋土等が目撃	219	231	
S-2	SB15	春良	SB16		貼床 なし	カマド（北壁）			219	239	
S-2	SB16	古墳か	SB17	SB15	貼床 なし				219		
S-2	SB17	古墳		SB12-16 SB35	地蔵 なし				219	239	
S-2	SB35	古墳	SB17	SB12	貼床 未検出	カマド（東壁）	カマドおよび貼床の一部を確認		219	239	192
S-2	SB12	古墳	SB17-35 SB18		貼床 未検出	カマド（北壁）	カマド東側にもう1基 カマドがあり、造り替えたとみられる		219	240	212
S-2	SB11	古墳以降	SB16		貼床 なし		N区では検出されず		219	238	
S-2	SB10	古墳以降	SB11 SK11		貼床 なし		N区では検出されず		219	238	
S-2	SB37	古墳		SB11 SB55		カマド	測量区域中でカマドの み確認	カマド構築材とみられる円柱状の石材出土	219	240	209
S-2	SK11	古墳	SB17	SB10	平紐		方形土坑		219	241	
N-3	SB56	古墳			地蔵 なし		管玉・白玉出土		220	230	
S-2	SB18	古墳		SB05-09 SB12	貼床 なし				220	238	
S-2	SB09	平安	SB05-18		地蔵 なし	カマド残火（北壁）			220	238	
S-2	SB05	古墳	SB04-18 SH01 SK01		地蔵 2		歯骨が表面より若干浮いて出土		220	238	
S-2	SB04	古墳	SB05-09 SH01		貼床 なし	カマド（北壁）			220	238	210 211
S-2	SK01	春良～平安	SB05						220	241	
N-2	SB27	古墳	SB28	SB26-30 SD08	地蔵 未検出	カマド残火（北壁）	S-2 地点 SB07と同一遺構の可能性あり	白玉出土	221	239	
S-2	SB07	古墳		SD01 (SB08)	礎面 なし		N-2 地点 SB27と同一遺構の可能性あり	礎面の広がりにより住居跡と判断、プラン未確認	221	238	

施設名	遺構名	時代	調査階層		測定 径尺	付箋施設	特記事項	備考	遺構圖 番号	上部寸 法	下部寸 法
			先	後							
N-2	SB00	奈良	SB25・27 SB28・29	SB26	縦化面 なし	カマド？ (北壁に瓦敷布)	石製模造品(有孔円板) 出土	南壁は不明瞭	221	229	
N-2	SB25	古墳		SB26・30		粘土床 1	カマド(北壁)	白玉出土	遺造先端部がSB30により破壊	221	229
N-2	SB24	古墳	SB29		縦化面 なし	西側際に地上分布 (カマドに関連?)			221	228	
N-2	SB29	古墳	SB22・24 SB30			カマド？(北壁) 北壁に粘土・瓦敷布	管玉・土玉・羽子玉出土		221	229	
N-2	Ph37	古墳以降	SB29		平底				221	229	
N-2	Ph38	古墳		SB29	平底			SB29カマド床底の焼土が廻上間に載る	221	229	
N-2	SB26	奈良	SB25・27 SB30		粘土床 1	カマド(北壁)	S-2地点SB01と同一遺構	白玉出土	221	228	
S-2	SB01	奈良	SB02・06			粘土床 なし		N-2地点SB26と同一遺構	221	238	
S-2	SB03	平安	SB02・06 SB08		縦化面 なし	カマド(北壁) 建造のみ残存	北壁に瓦敷布 白玉出土		221	238	
S-2	SB08	古墳小	(SB07)	SB03 SB02		粘土床 2	カマド(北壁)	管玉出土		221	
S-2	SD02	奈良小	SB08						221	241	
N-2	SB22	古墳	SB29		粘土床 2	カマド(北壁) 石材使用	カマド東側に割りカマドが残存し、造り替えたか		222	228	200
S-1	SD05	古墳				カマド(北壁)		カマドのみ地出 遺構本体は廻上区外	222	237	
S-1	SB02	古墳	SK08・10 SK11		粘土床 2	カマド(北壁)	子持勾玉・有孔円板 白玉・カ・ラス玉出土		222	236	206
S-1	SK03	平安小	SB02			平底	SB02カマド東側に位置する土坑	田中掲載なし	222	237	
N-1	SB23	古墳		SK47	粘土床 3	跡跡西下で白玉が集中的に出土	石製模造品(有孔円板)・ 白玉出土		223	228	198
N-1	SB21	奈良		SK46		粘土床 3	廻上に瓦敷布 白玉出土		223	228	199
N-1	SB20	奈良		(SB21)	粘土床 1		廻上区側で廻面の確認なし。また、SB21の調査後確認したため、SS21との密接な重複関係なし。	白玉出土	223	228	
N-1	SK46	平安小	SB21			平底	白玉出土		223	228	
N-1	SK47	古墳	SB23		平底				223	228	
S-1	SB01	奈良	SB03・04		粘土床 4	カマド(北壁) 床入口ピット(西壁)	有孔円板・白玉出土	古墳時代遺物はSB03・04からの廻人と考えられる	223	236	205
S-1	SB03	古墳	SB04	SB01		カマド(北壁) 天井部が残存		住居は南廻金鏡区外	223	235	190
S-1	SD04	古墳		SD01・05				廻上の分布と遺構プランの一部を確認	223	235	191
S-1	SK05	不明	SK06		平底				223	237	
S-1	SK06	不明	SD01-03 SK07	SK05	平底		裏面でSB03に伴う粘土床を確認	出土器はSB03に伴う可能性が考えられる	223	237	
S-1	SK07	古墳		SK01 SK06	平底				223	237	
S-1	SK08	奈良	SB02		平底				223	237	
S-1	SK11	古墳	SB02 SK10		平底		東壁で焼出された焼土 は2次廻SB28廻部	SB02の調査先行により、同作居重複部分不明	223	237	

表19 墓区1次面主要検出構造一覧表

区・西側のⅨ区を含めて、広く展開している。時期的疎密はあるものの6～7世紀を通じ継続して形成されたとみられる。古墳時代中期は1・2次面を通じて調査区のほぼ全面より竪穴住居・土坑が検出されている。1次面では後代の遺構分布がみられない部分のほとんどの箇所から検出され、遺構間重複も激しく、密集した遺構分布を示す。隣接するⅧ区・Ⅸ区の該期遺構の分布状況と対比しても本区の密集度は群を抜き、該期集落域の中心をなす可能性が考えられる。確実に炉が確認された住居ではなく、ほとんどが北西向きのカマドを有すると考えられる。この北西向きカマドは後代にも継続して認められ、集落構造の基本が該期に遡る可能性が考えられるが、住居密集状況は他にはみられない時期的特徴となり、集住形態の懸隔は大きい。出土遺物では滑石製白玉が調査区全面より多量に検出されており、各遺構覆土中より出土している。古墳時代後期～平安時代遺構覆土からも出土しているが、該期遺構との重複部分にはば限られることから古墳時代中期に帰属すると捉えられる。出土状況は図226にドットとして示したように、遺構覆土中より単独で出土するものがほとんどで、集中しての出土などは認められない。こうした状況が調査区全面で確認され、帰属遺構を特定することも難しい。住居廃絶などに伴って撒くような状況で使用された印象が強い。なお、滑石製白玉に混じて石製模造品有孔円板も出土している。



写真184 N-2地点全景（東から）



写真185 N-3地点全景（西から）



写真186 N-4地点全景（東から）



写真187 S-1地点全景（西から）



写真188 S-2地点全景（東から）



写真189 S-3地点全景（西から）

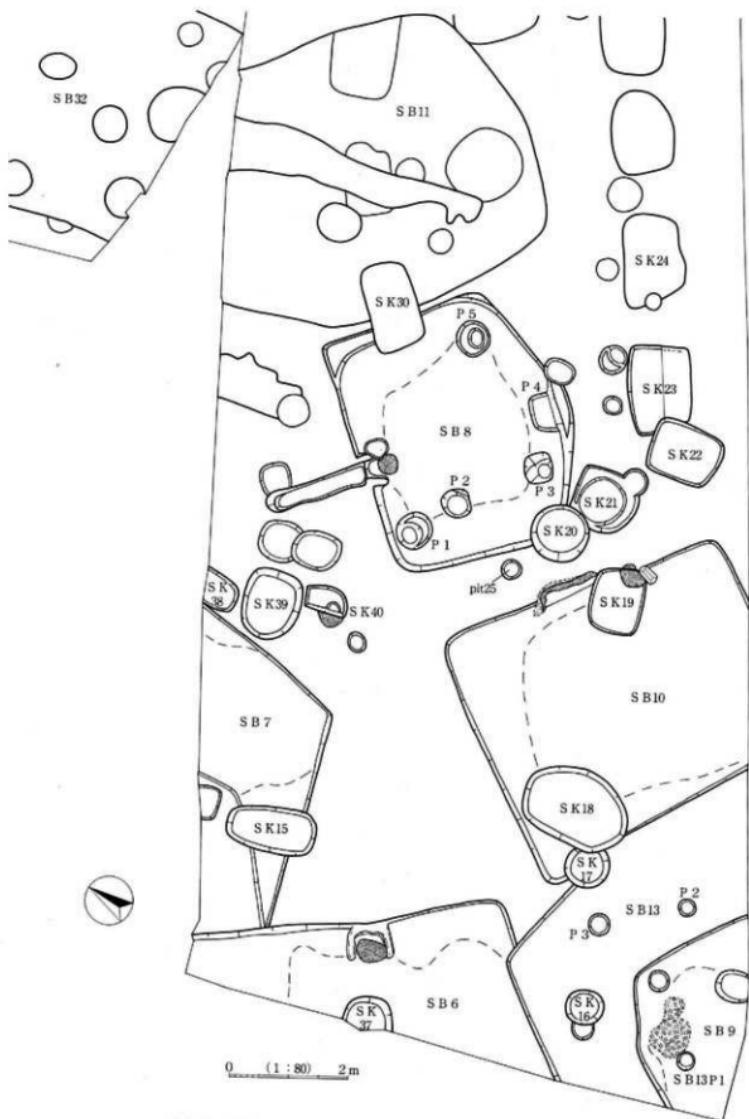


图215 V区1次面遺構実測図① ($S = 1/80$) S-3地点

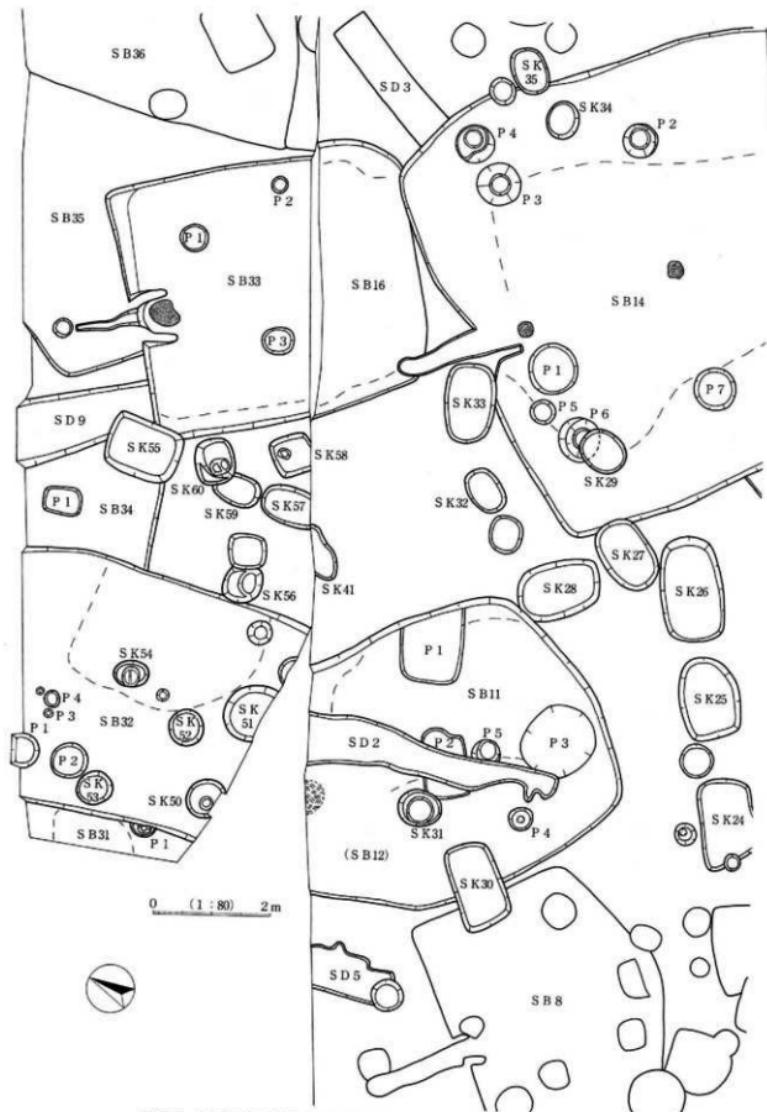


图216 隋区1次面遗構実測図② ($S = 1/80$) N-4 · S-3地点

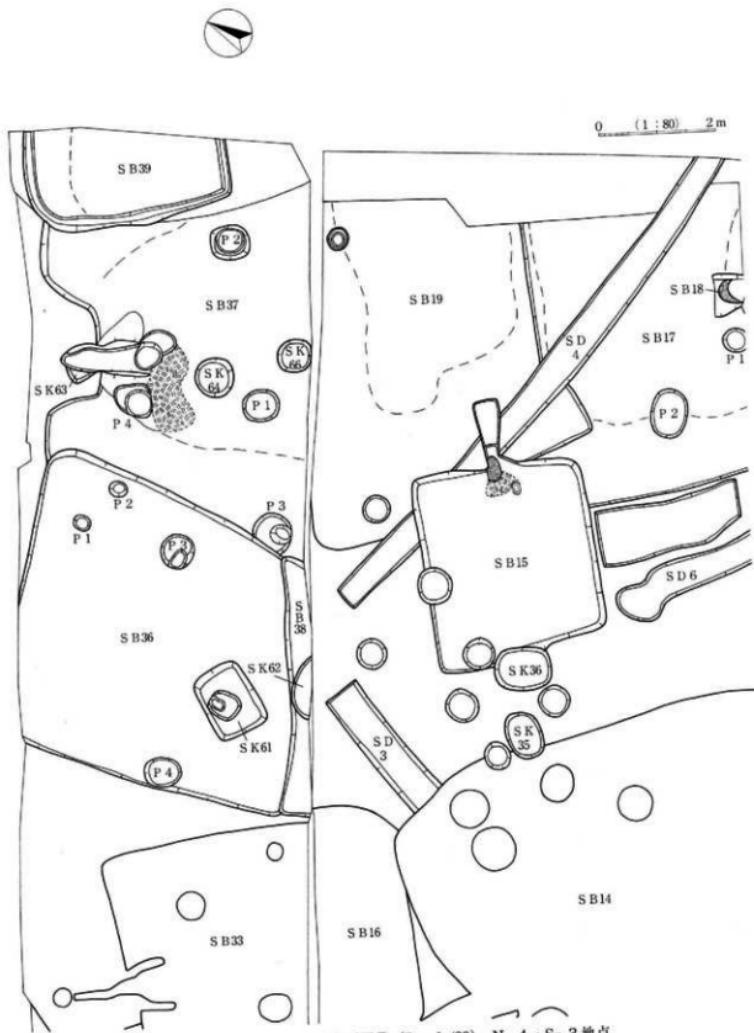


图217 Ⅷ区1次面構造実測図③ ($S = 1/80$) N-4・S-3地点

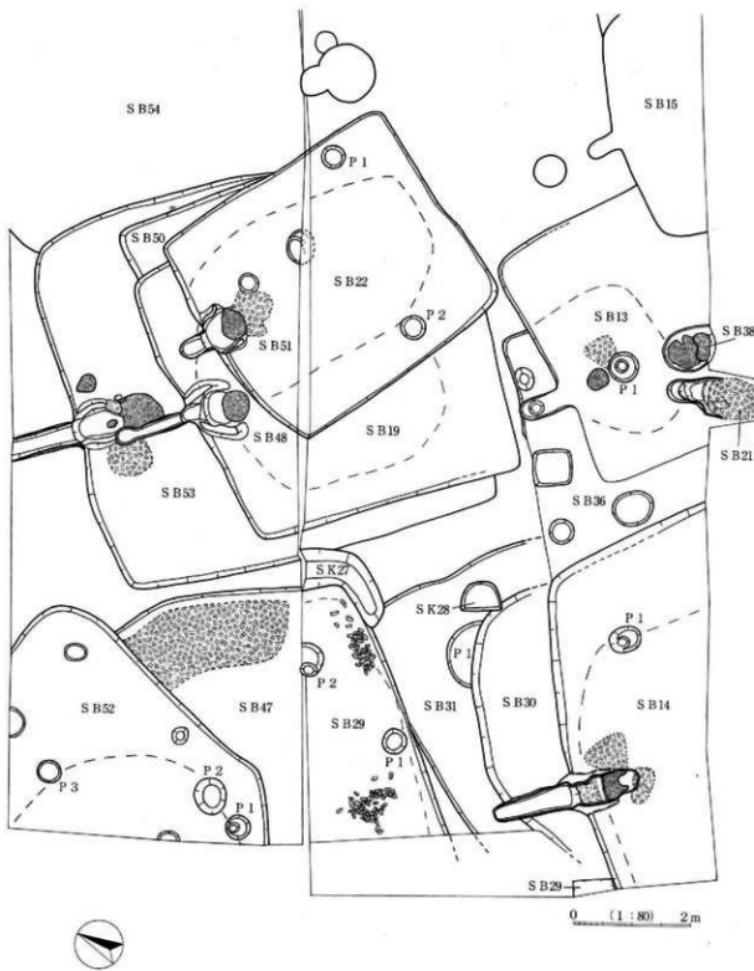
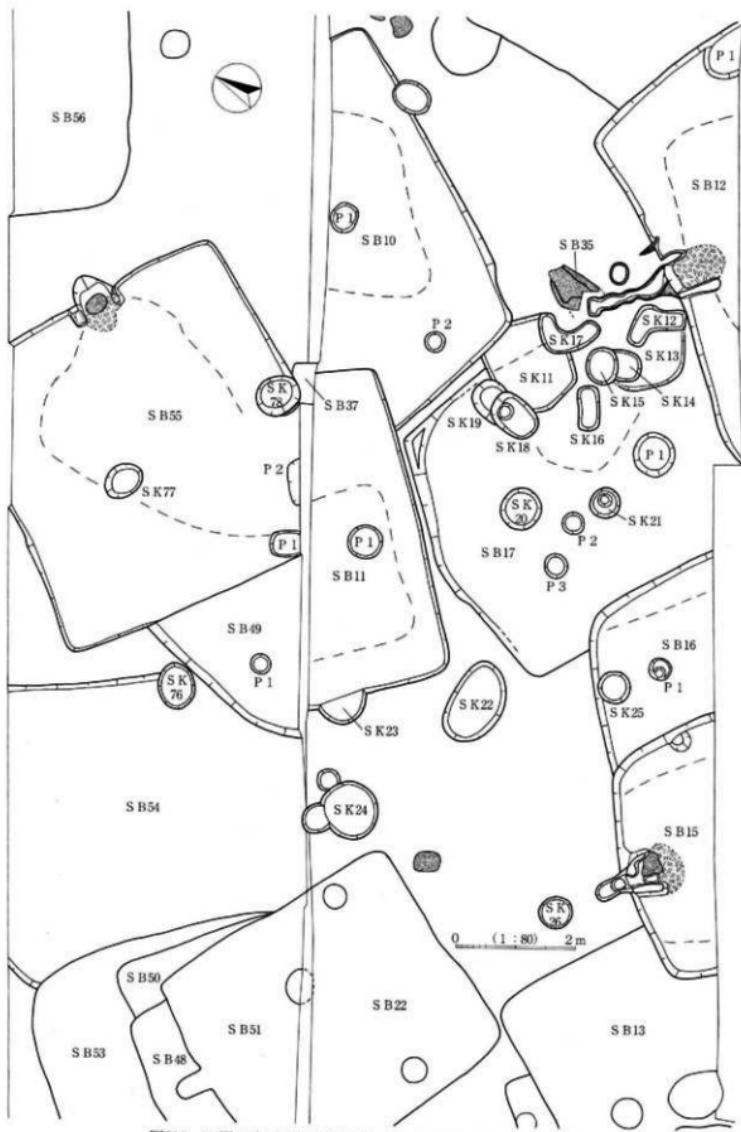


図218 雜区1次面遺構実測図④ ($S = 1/80$) N-3・S-2地点



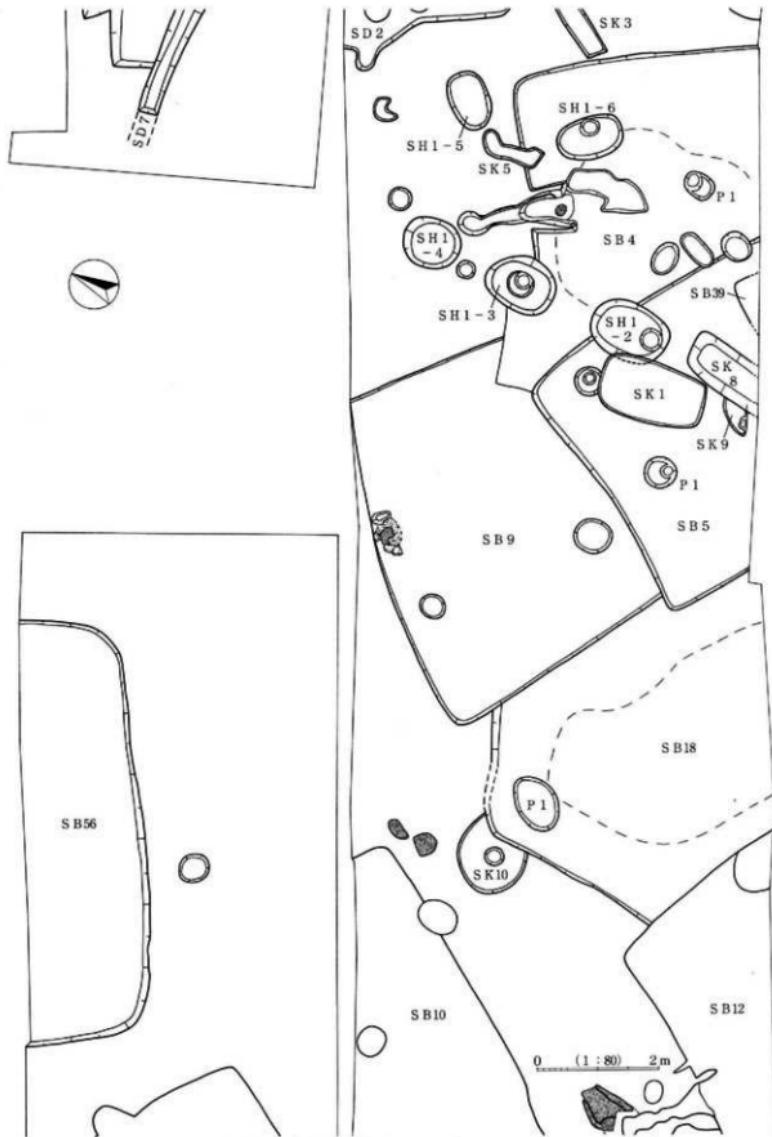


図220 墓区1次面構造実測図⑥ (S = 1/80) N-3・N-2・S-2地点

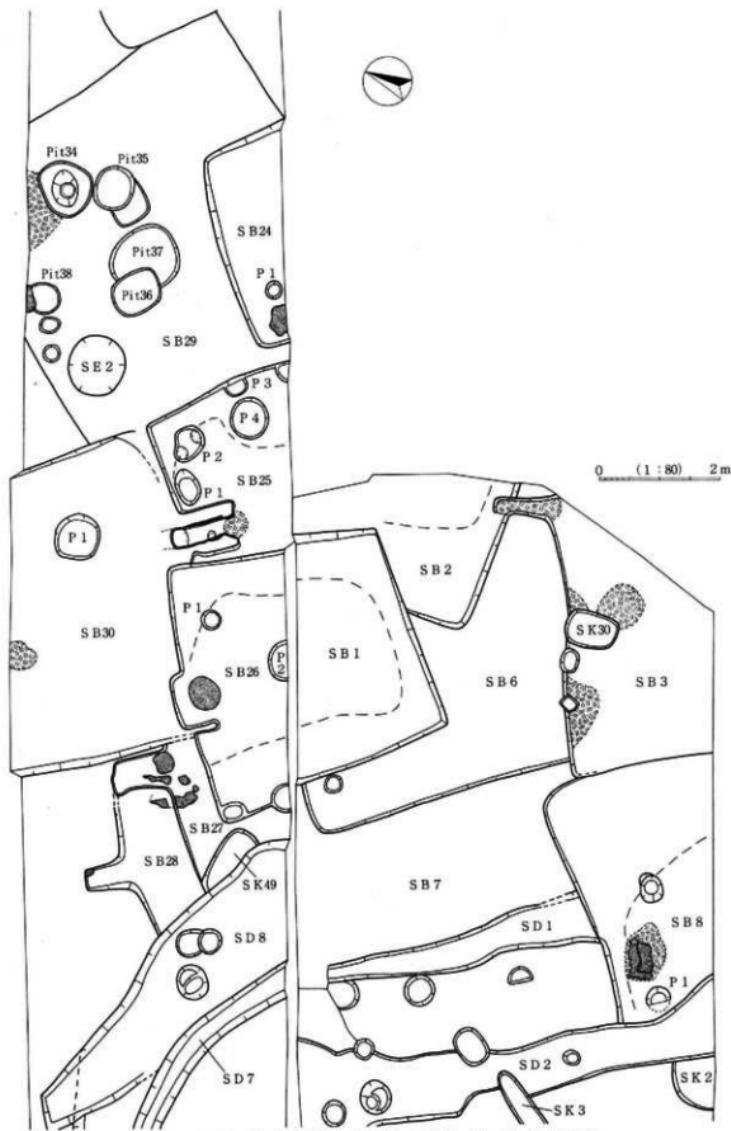


図221 雜区1次面遺構実測図⑦ (S = 1/80) N-2・S-2地点

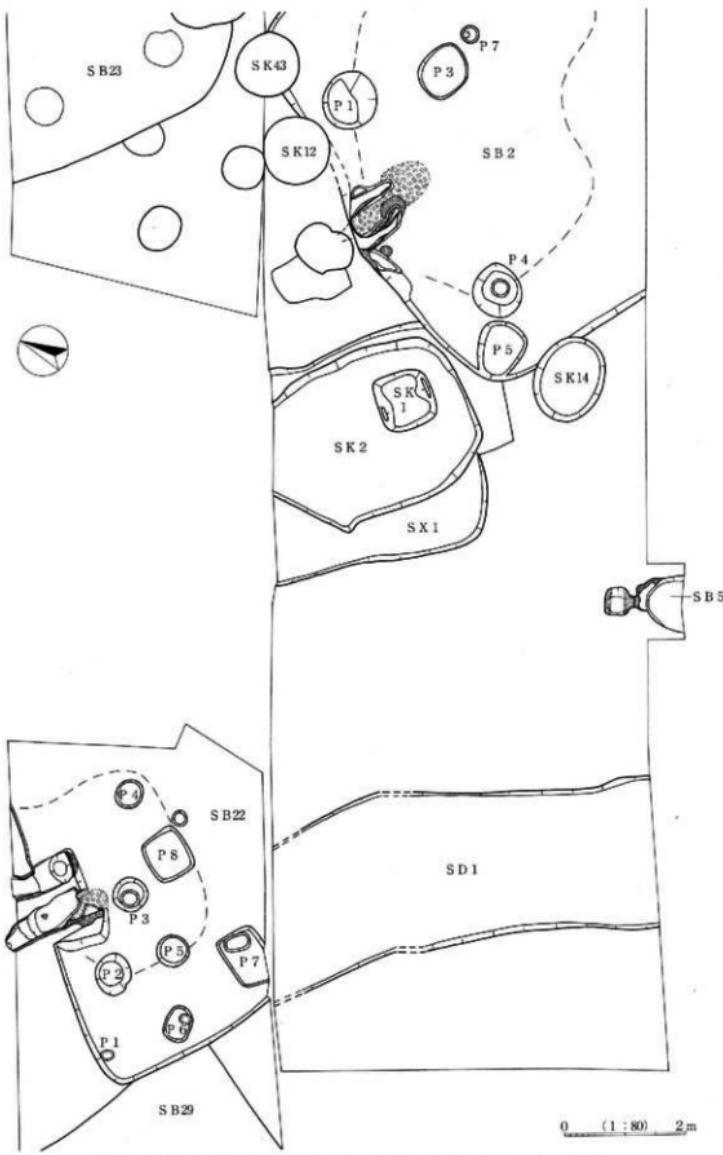


図222 VIII区1次面造構実測図⑧ (S = 1/80) N-2・N-1・S-1地点

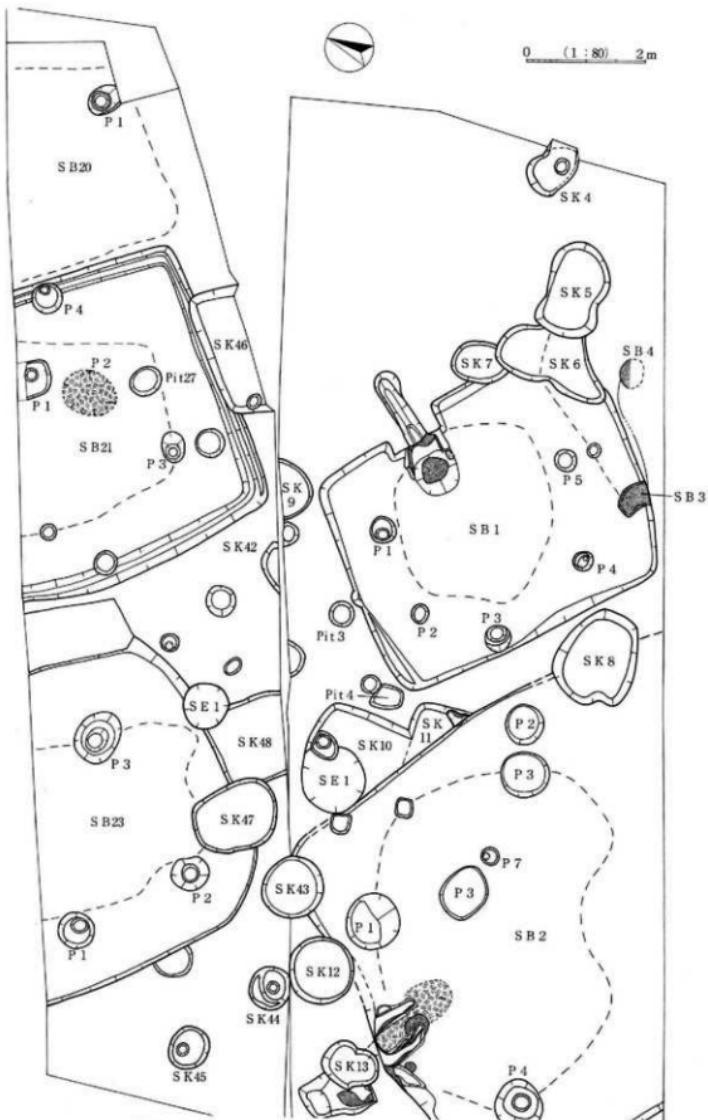


図223 VII区1次面遺構実測図⑨ ($S = 1/80$) N-1・S-1地点

S-1 地点 SB03 調査区南壁際で検出されたため、カマドおよび貼床の一部が確認されたにすぎない。カマドの残存状況は良好で、天井が残る。石などの構築材は使用されておらず、粘土のみによって作られている。天井部は平坦で、断面形態は方形を呈する。被熱部分は側壁から天井にかけて顯著で、床はほとんど焼けていない。煙道先端部には焼土も天井も確認されなかった。袖部は両側へ開くと想定されるが、部分的な確認でしかなく、特に右袖部はほとんど残っていない。対照的に土器の残りはよく、燃焼部より土師器壺・碗が正置の状態で検出された。特異な形態ではあるが、南壁際で確認された貼床より住居布設のカマドと評価しておく。

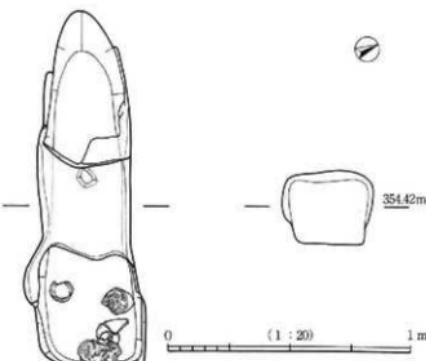


図224 S B03カマド実測図 (S=1/20)



写真190 S B03検出状況（東から）



写真191 S B03検出状況（南から）

S-2 地点 SB35 他遺構の重複により規模等不明の竪穴住居で、北壁に構築されたカマドのみが検出された。天井は内部に崩落していたが被熱を受けた側壁がよく残る。袖部はすでになく、火床が確認されたにすぎない。

遺物は煙道部との境をなす段部の右壁際より甕の出土がある。また、左壁側で石材が検出され、構築には石材が使用されたとみられる。



写真192 S B35カマド検出状況（西から）

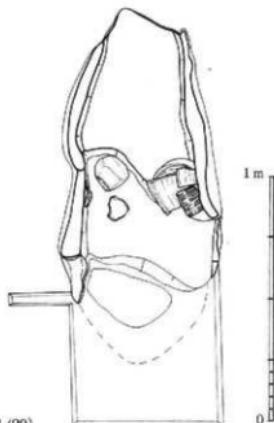


図225 S B35カマド実測図 (S=1/20)

S-3地点 SB14

一辺約7mを測る方形の堅穴住居である。

SB16に掘り込まれるが、重複下でプランが確認できた。北壁中央でカマドが検出されたが、既に破壊されており、火床のみが確認されたにすぎない。床面は明確な貼床である。

土器は右図のトーン部2ヵ所より集中的に出土している。南集中では焼土が確認されたが、この焼土上には図244-25の甕が伏せた状態で検出されている。南集中・北集中とともに須恵器を1点ずつ含み、TK23型式併行期の良好な一括資料と把握できる。

白玉は床面上～覆土下層より多量に出土している。このほか管玉2点、土玉1点、土鍬1点が出土している。

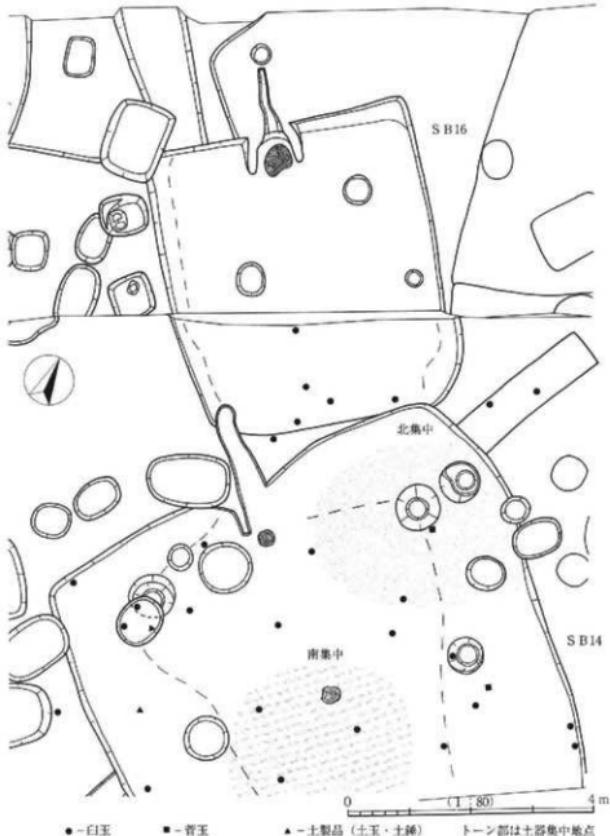


図226 SB14遺物出土状況実測図 (S = 1/80)



写真193 SB14遺物出土状況



写真194 SB14(完掘)

N-4地点 SB36 SB38との重複より南壁を失うが、一辺5.2mを測る方形の竪穴住居である。貼床直上より土器片・石材が出土しているが、これらに混じって獣骨が検出されている。獣骨は牛かとみられ、住居中央から西側にかけて3ヵ所にまとまるように出土している。歯は他の骨とは離れて検出され、骨のまとまりがみられることからも遺骸をそのまま埋葬したとは考えがたい。また、獣骨や土器・石材を大きく取り巻くように滑石製白玉が18点ほど出土しているが、IV区SB01のように石製模造品は伴っていない。この他、砥石・紡錘車が出土している。なお、床は貼床が確認されたが、カマドや炉・柱穴等は検出されなかった。



写真195 S B36遺物・獣骨検出状況

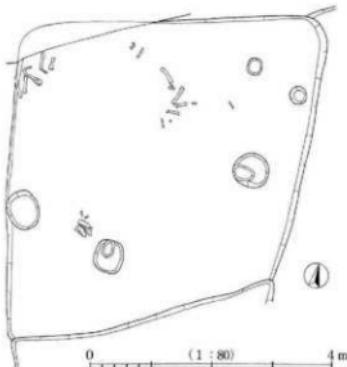


図227 S B36獣骨出土状況実測図 ($S = 1/80$)



写真196 S B36獣骨検出状況①



写真197 S B36獣骨検出状況②



写真198 N-1地点 S B23



写真199 N-1地点 S B21



写真200 N- 2 地点 S B22



写真201 N- 2 地点 S B25



写真202 N- 3 地点 S B48・50・51・53



写真203 N- 4 地点 S B33



写真204 N- 4 地点 S B37



写真205 S- 1 地点 S B01



写真206 S- 1 地点 S B02

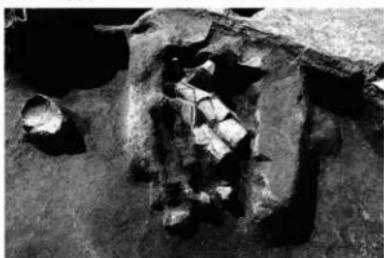


写真207 S- 1 地点 S B02カマド内遺物出土状況



写真208 S-2地点SB29・30・31



写真209 S-2地点SB37

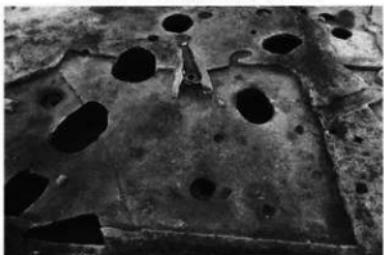


写真210 S-2地点SB04



写真211 S-2地点SB04カマド内土器出土状況



写真212 S-2地点SB12



写真213 S-3地点SB06

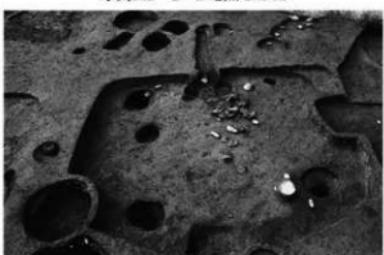
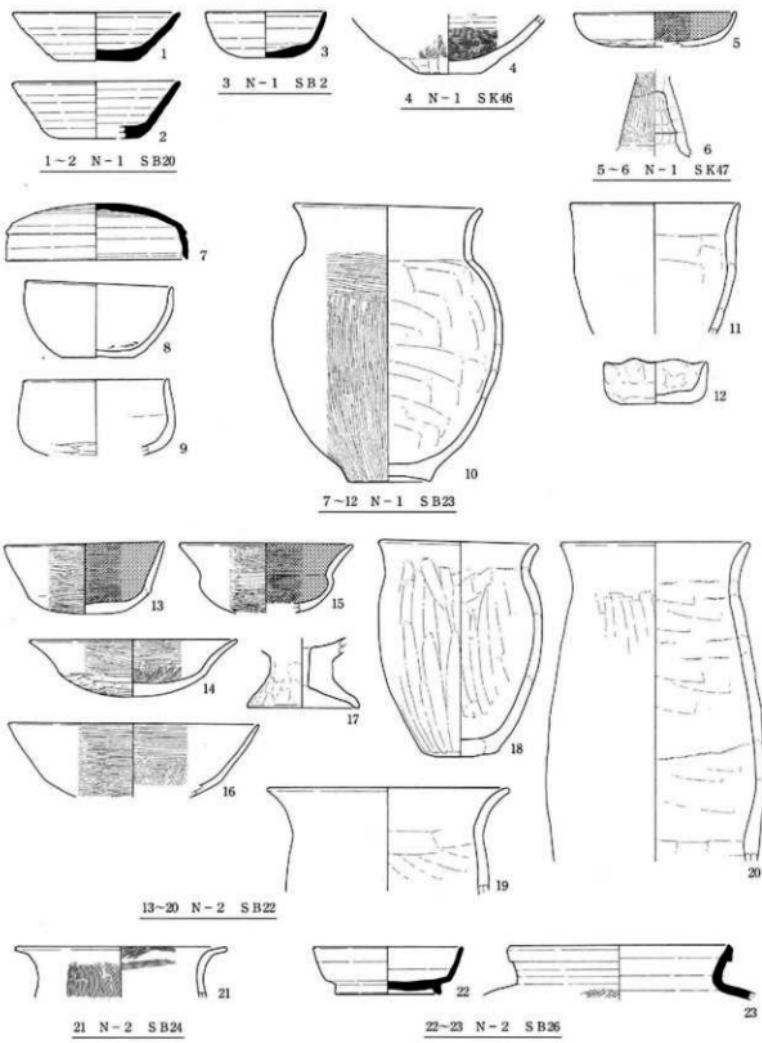


写真214 S-3地点SB08



写真215 S-3地点SB15



0 (1 : 4) 10 cm

図228 N区1次面出土土器実測図① (S = 1 / 4) N-1・N-2地点

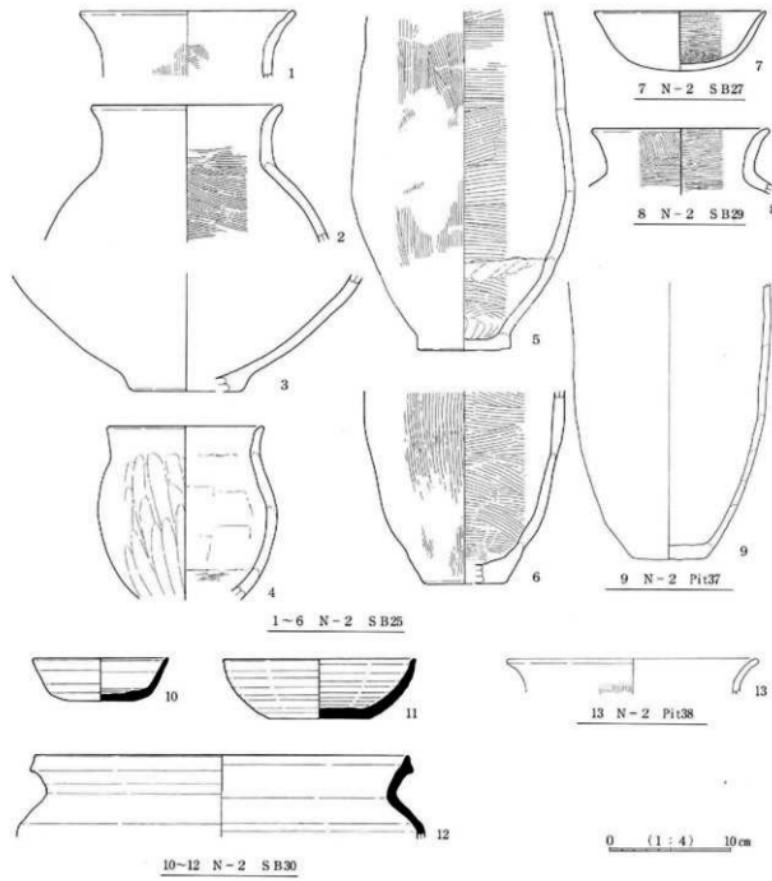


图229 VII区1次面出土土器实测图② (S = 1 / 4) N-2地点

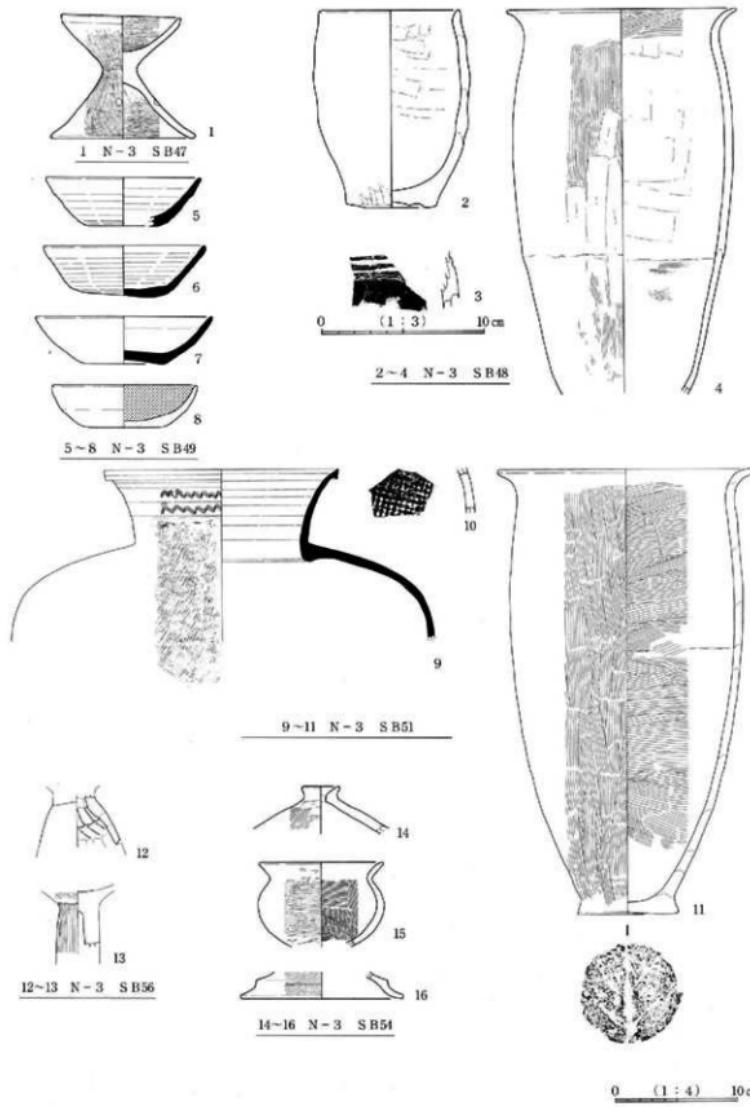


图230 VII区1次面出土土器实测图③ (S = 1 / 4) N-3地点

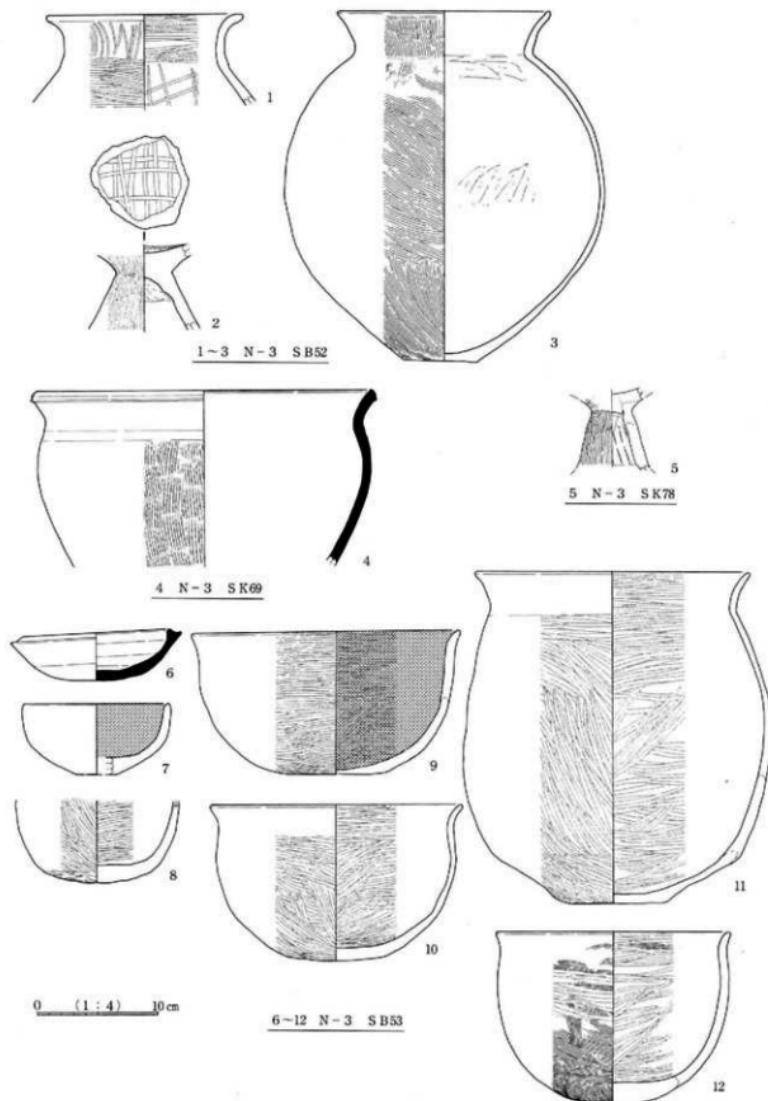


图231 VII区1次面出土土器実測図④ (S = 1 / 4) N-3地点



1~7 N-3 SB53

0 (1 : 4) 10cm

图232 VII区1次面出土土器实测图⑤ (S = 1 / 4) N- 3地点

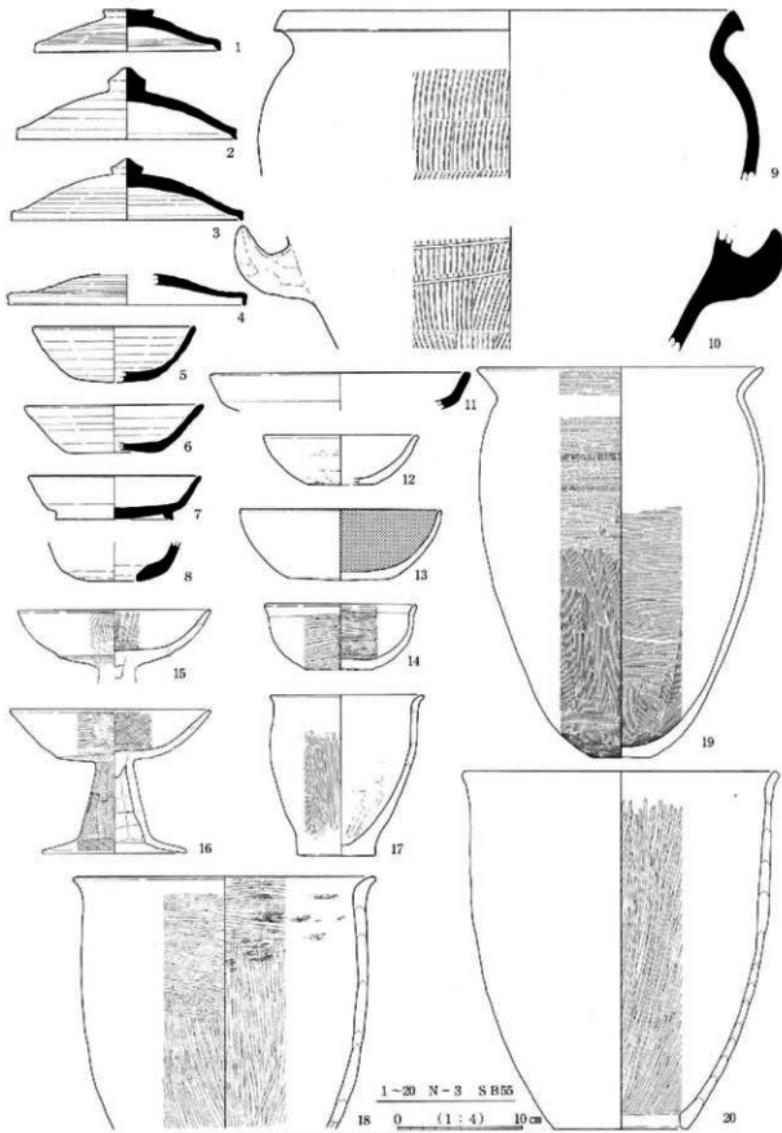
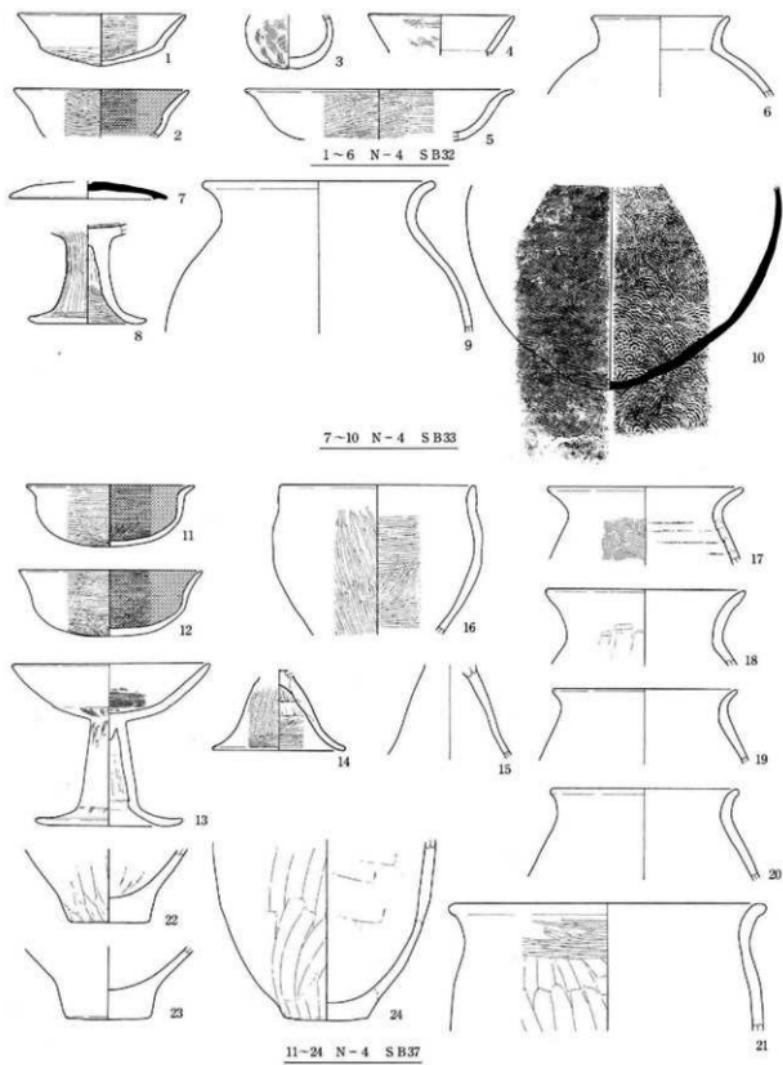


图233 Ⅲ区1次面出土土器实测图⑥ (S = 1 / 4) N-3地点



0 (1 : 4) 10 cm

图234 ■区1次面出土土器実測図⑦ (S = 1 / 4) N-4 地点

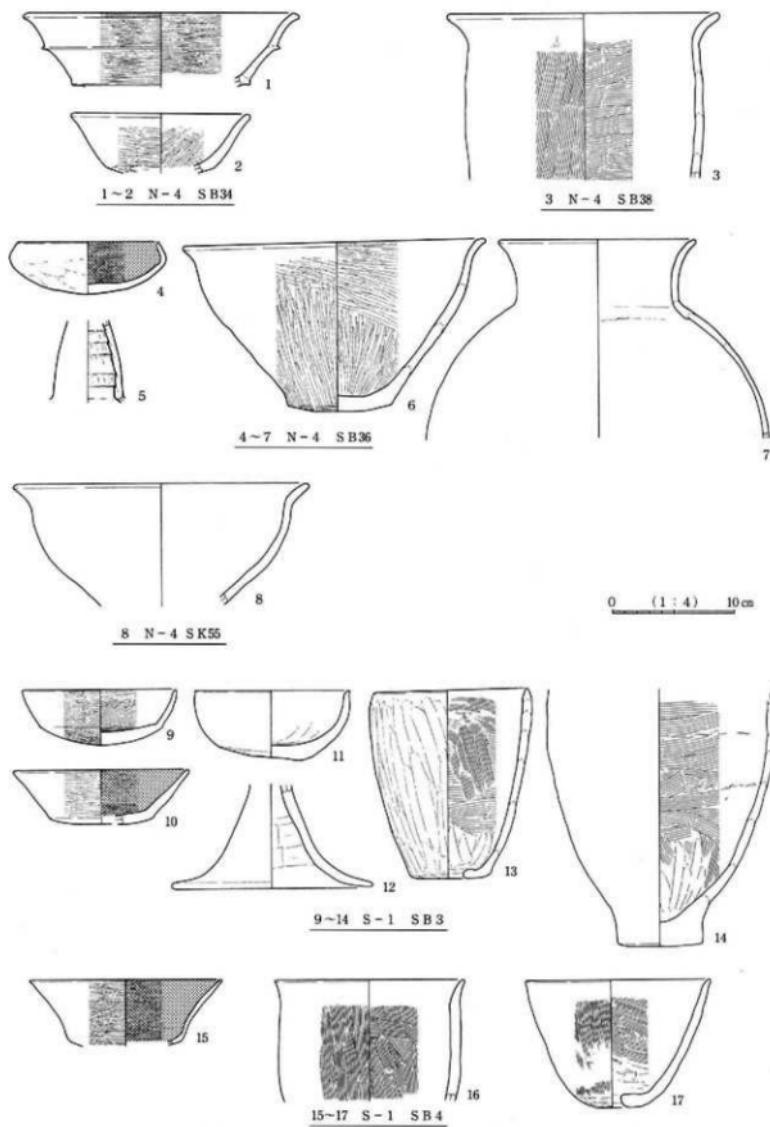


図235 V区1次面出土土器実測図⑧ (S = 1 / 4) N- 4 · S- 1 地点

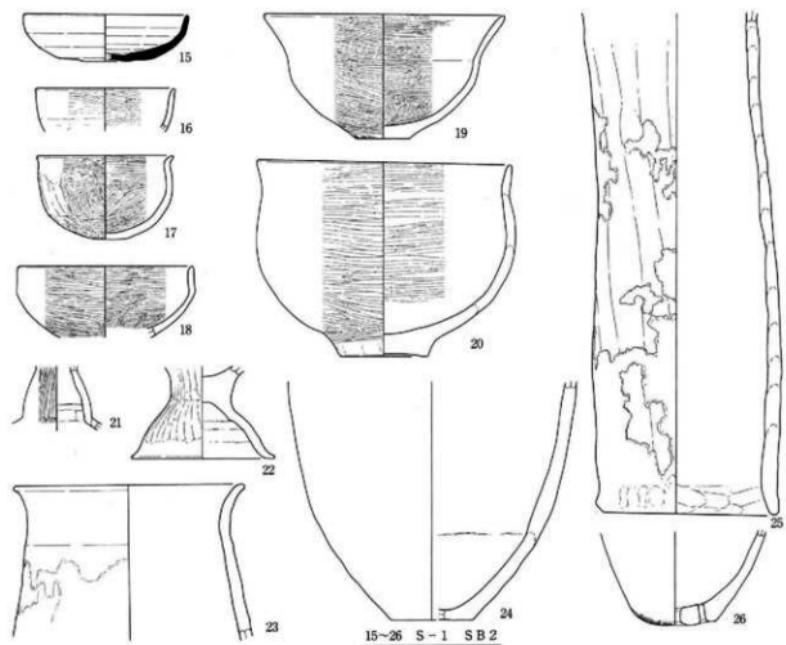
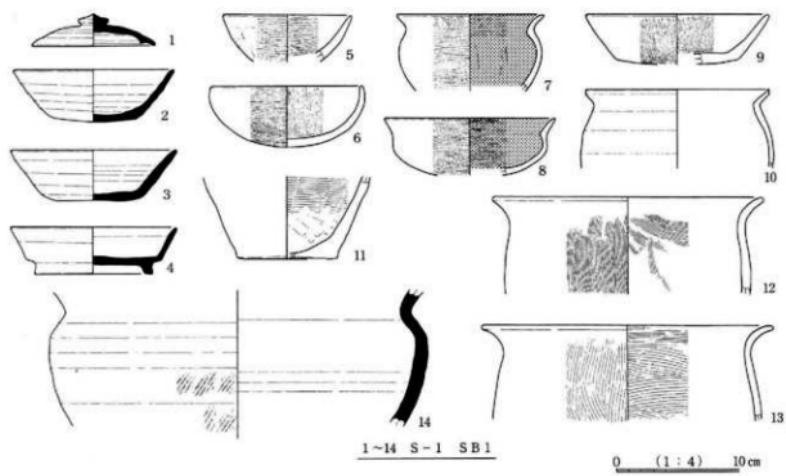


図236 VIII区1次面出土土器実測図⑨ (S = 1 / 4) S-1地点

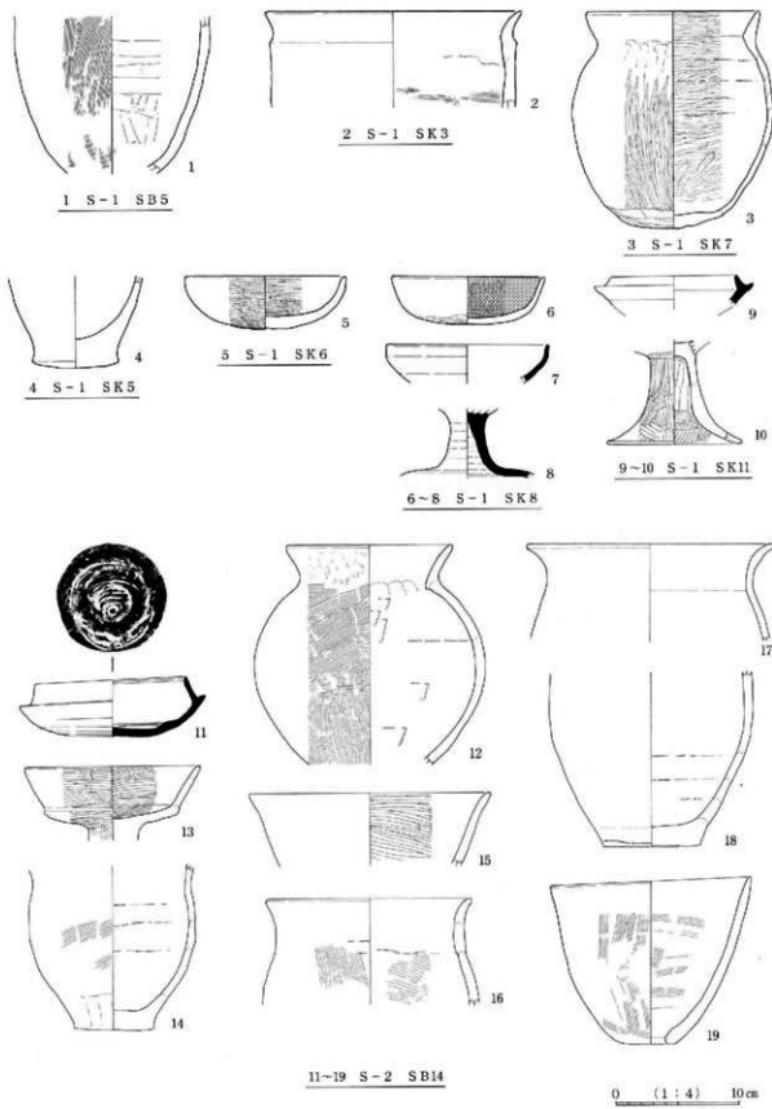


图237 VII区1次而出土土器実測図⑩ (S = 1/4) S-1・S-2地点

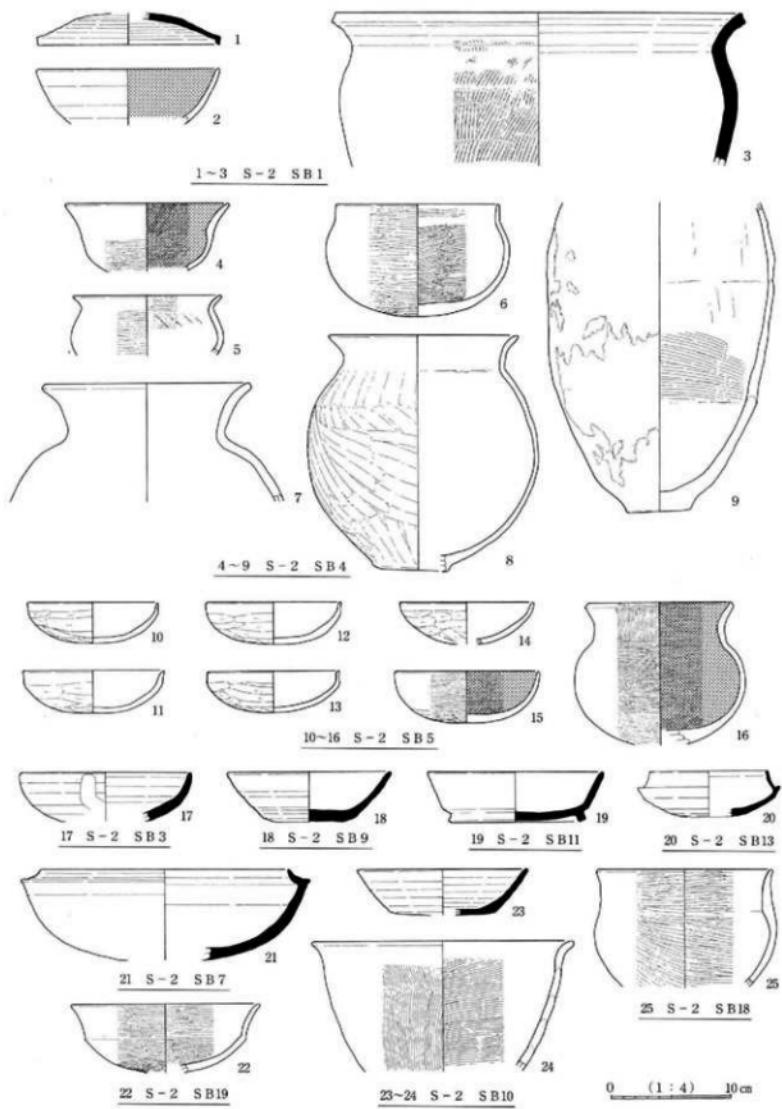


图238 墓区1次面出土土器实测图① (S = 1/4) S-2地点

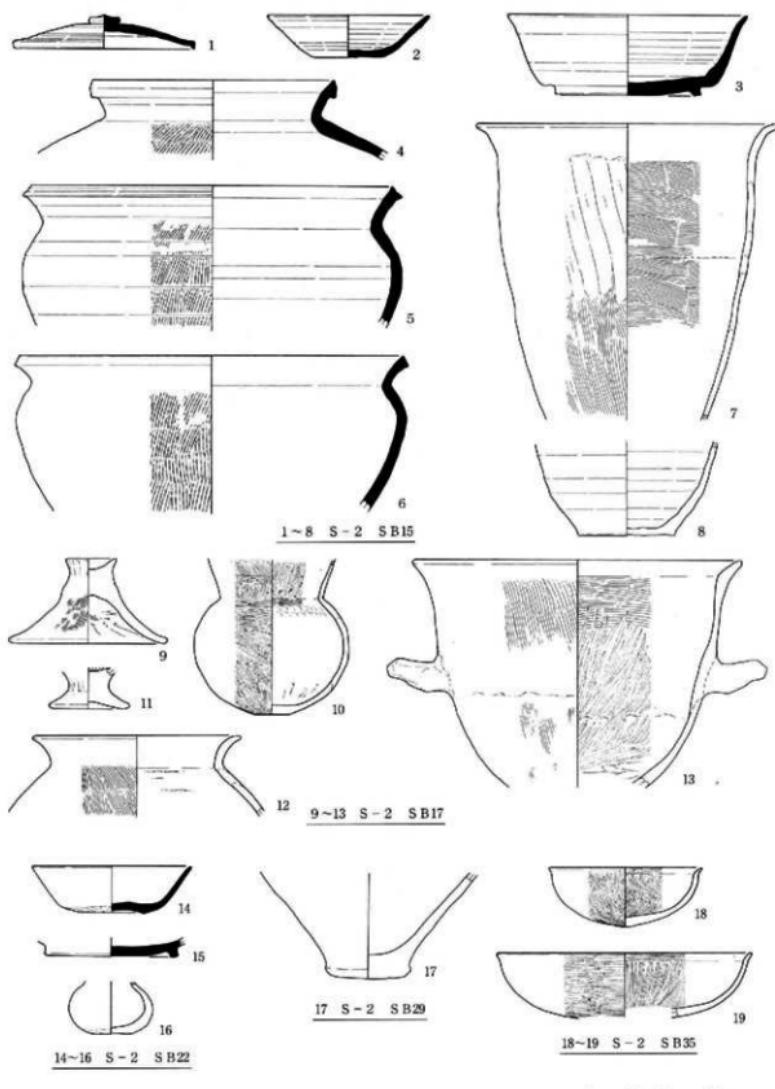


图239 VII区1次面出土土器実測図⑩ (S = 1 / 4) S-2地点

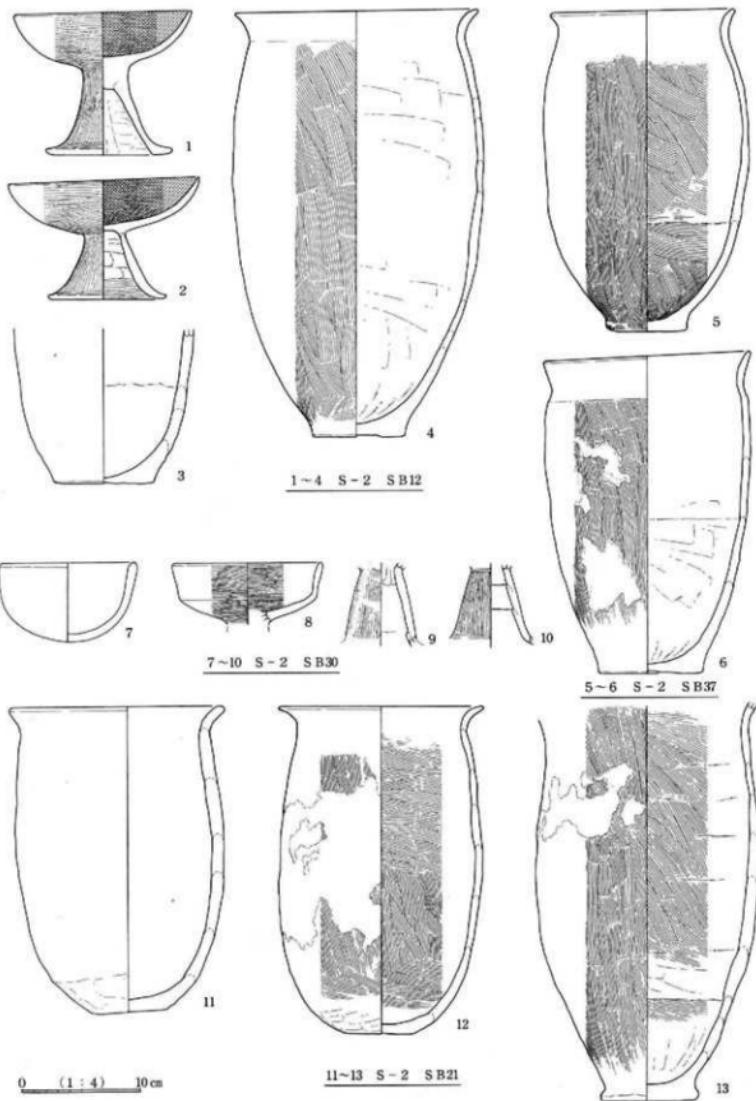


图240 VII区1次出土土器实测图③ (S = 1 / 4) S-2地点

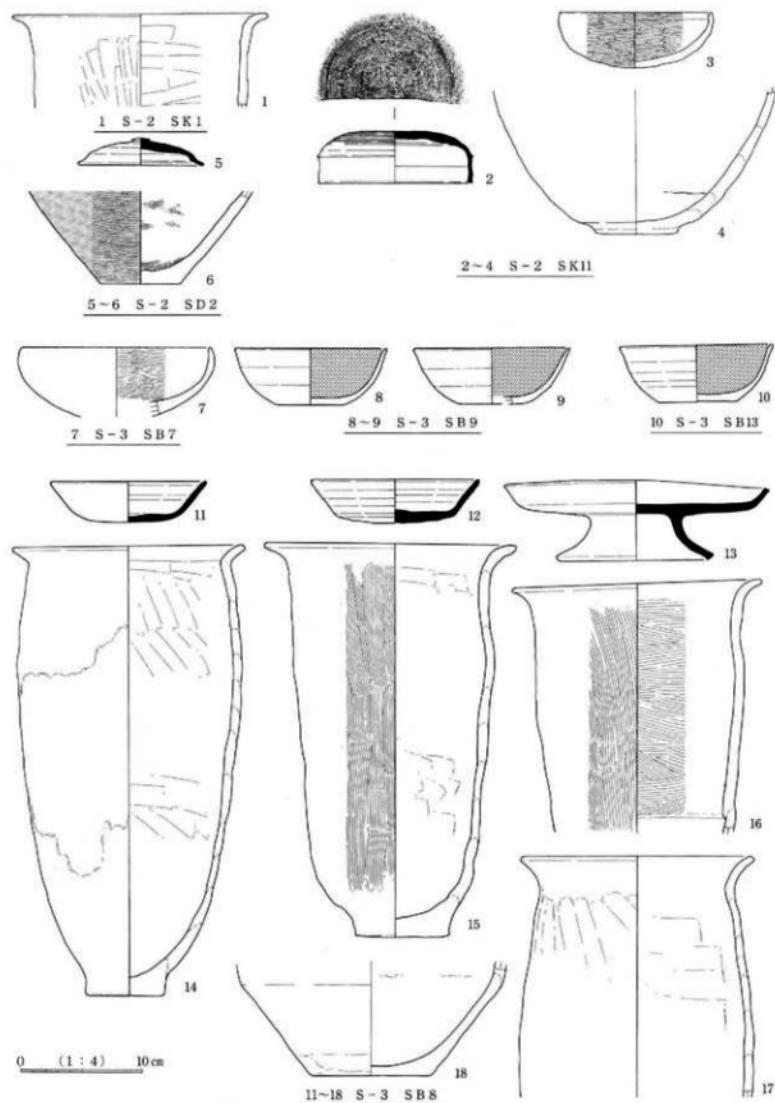


图241 VII区1次面出土土器实测图(1 : 4) S-2・S-3地点

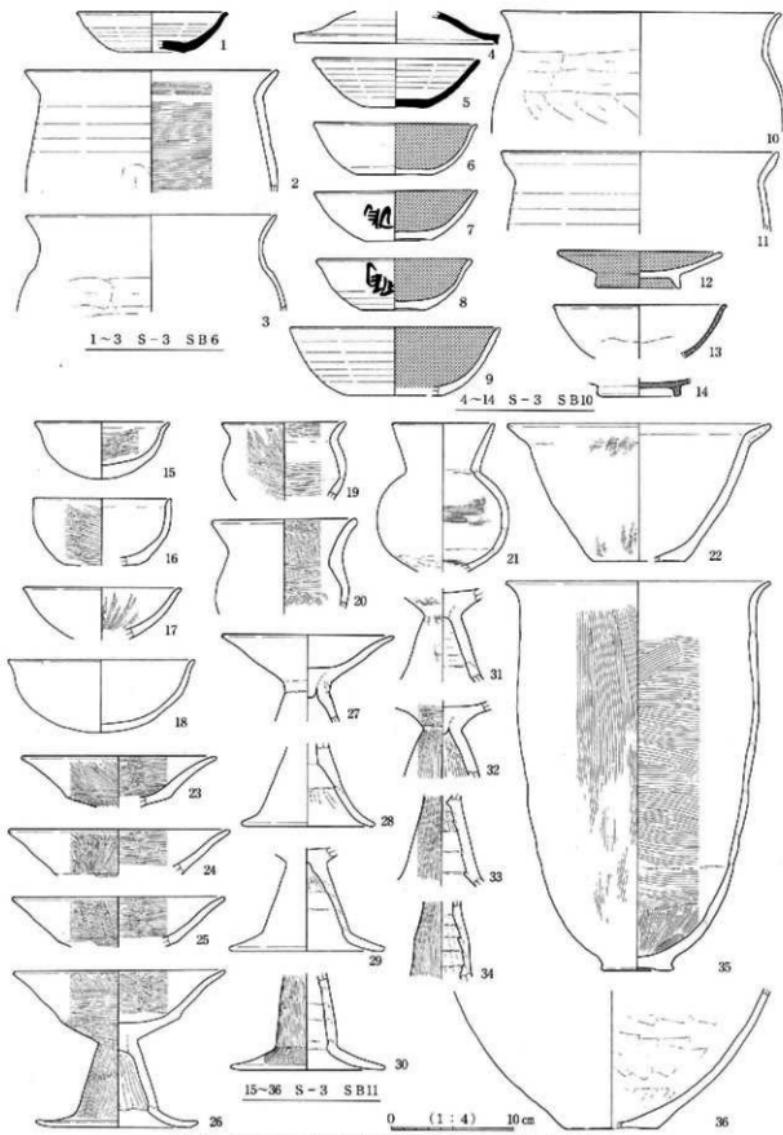


图242 VII区1次面出土土器实测图(5 (S = 1 / 4) S- 3地点

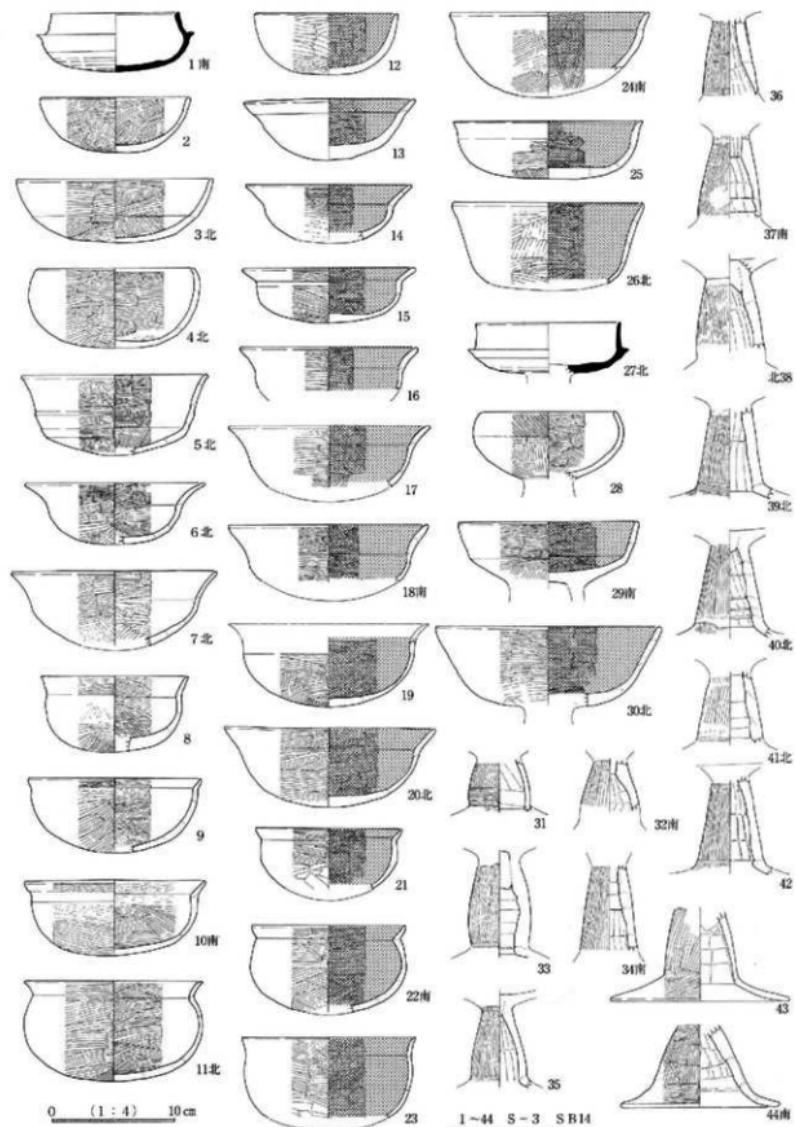


图243 墓区1次面出土土器实测图(S=1/4) S-3地点

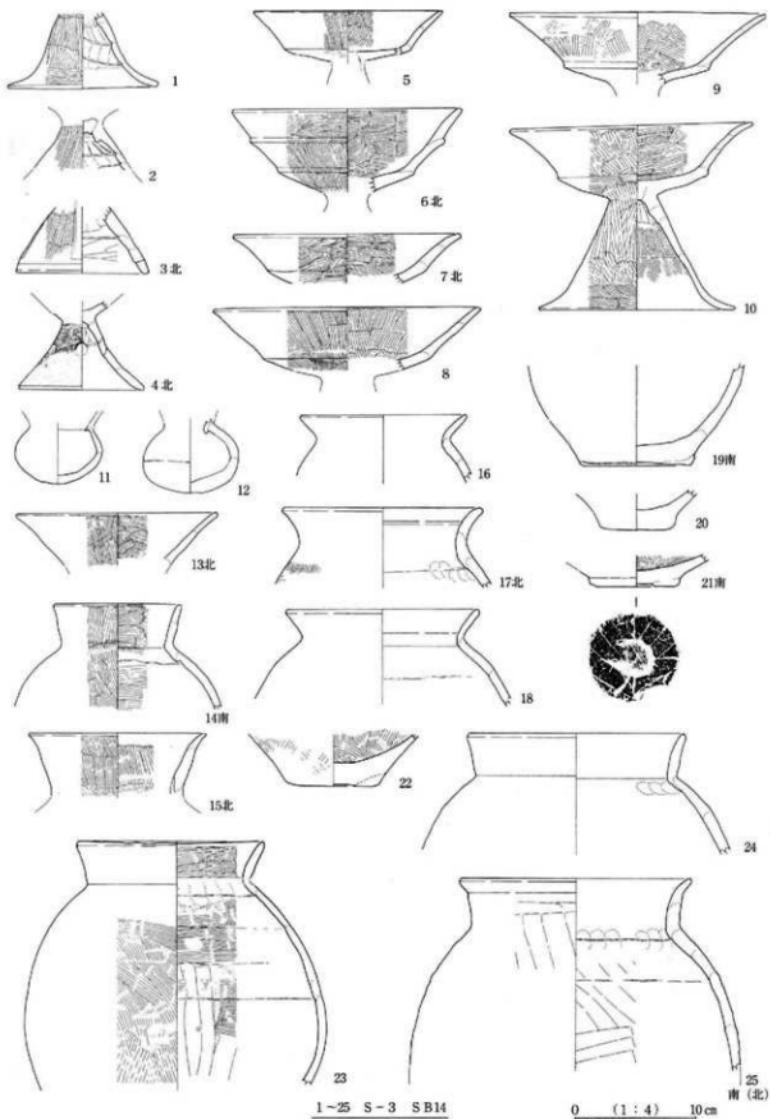


图244 VII区1次面出土土器实测图⑦ (S = 1 / 4) S-3地点

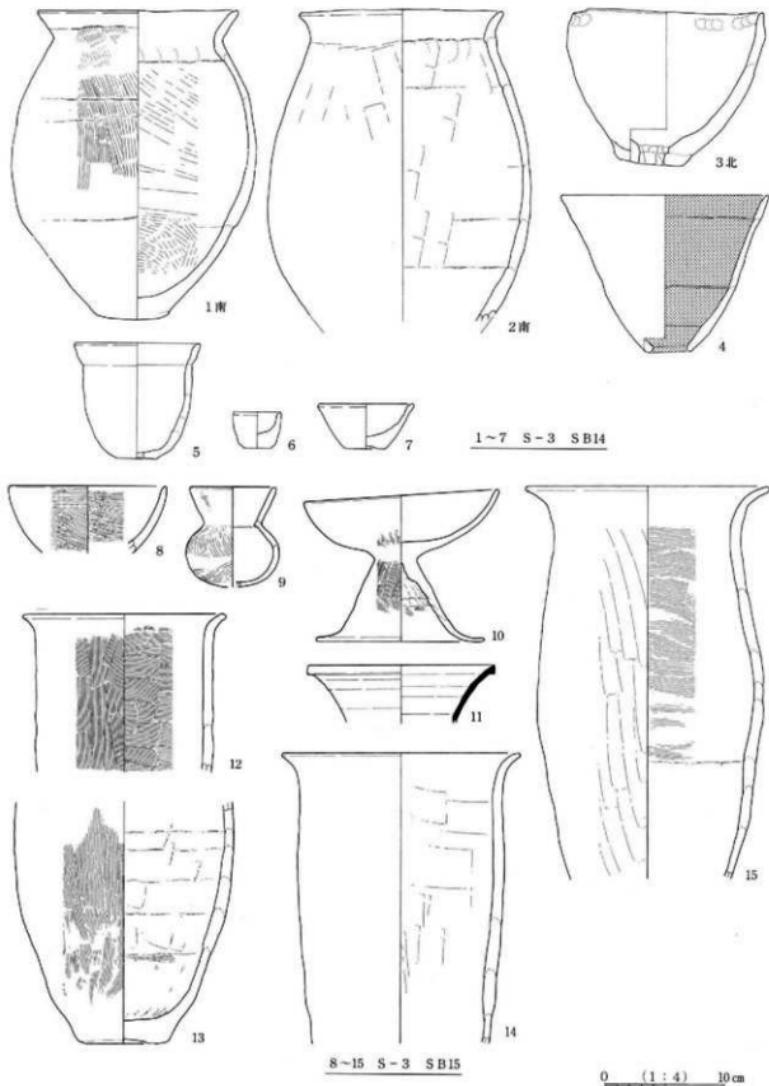


图245 VII区1次面出土器实测图⑩ (S = 1 / 4) S-3地点

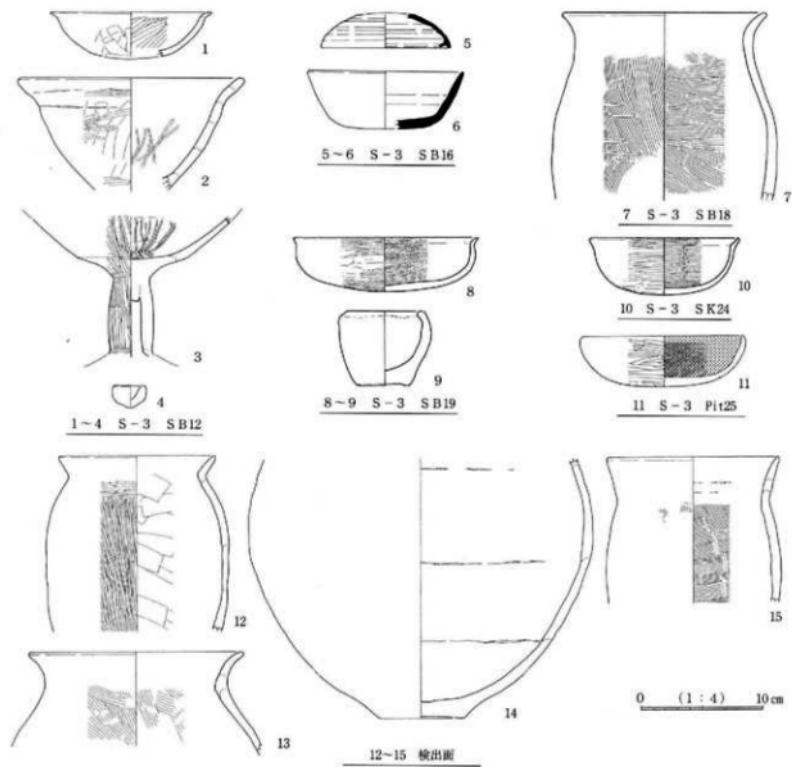


图246 VII区1次面出土土器实测图⑨ (S = 1 / 4) S-3地点

2 2次面の調査

2次面は1次面遺構直下に存在する遺構の確認面で、垂直方向に1次面と連続している。古墳時代中期を主体とするが、1次面調査遺構下に存在する古墳時代後期ならびに奈良時代遺構の調査も実施している。

古墳時代 古墳時代中期の堅穴住居・土坑などが検出されている。1次面調査遺構と合わせると、調査区のほぼ全面に該期住居が展開している。住居主軸は北西・南東方向が大半で、北東・南西方向をとるもののが一部みられる。カマド布設住居もみられるが、炉を持つものが比較的多く確認され、炉からカマドへの転換期に位置付けられる。この点、カマド布設住居のみが確認された1次面検出遺構との重複関係にも矛盾しない。

N-4地点SB57では炉周辺より高杯脚部の転用羽口と鉄滓小片が出土し、鍛冶工房の可能性が考えられる。石川条里遺跡高速道地点では古墳時代前期後半代にすでに鍛冶の存在が確認されているが、一般集落においても該期に鍛冶が導入されている点は注目される。

N-1地点SB23は1次面検出遺構であるが、SB44の調査に伴い貼床を外したところ、直下より滑石製白玉の集中的出土が確認された。40cm四方の範囲内より白玉が50点ほど出土し、他に例をみない出土状況であった。SB44床面高とは同じであるが、貼床は確認されず、SB23掘り方内に存在する。また、掘り方内よりも個々単独ながら少なからぬ白玉の出土がみ



写真216 N-1地点全景（西から）



写真217 N-2地点全景（東から）



写真218 S-1地点全景（東から）



写真219 S-2地点全景（東から）



写真220 S-3地点全景（西から）

られ、床面構築以前に多量の玉類が使用されたことが確実視される。

S-1 地点 SB24 では SD24 との重複部分の床面直上 (SD24 覆土最上層直上) から 10 点の石製模造品有孔円板が白玉とともに出土している。相互に組状のもので縛繋された、あるいは何かに釣り下げられた状況ではなく、いずれもが表裏面を上に向けた状態で、一定範囲内より点在して単独で出土している。周辺よりは白玉が出土しているが、同様に個々に単独出土である。また、SD24 の北側延長部付近でも白玉がまとめて出土しているが、こちらには石製模造品は伴っていない。なお、白玉は 1 次面同様に各遺構覆土内より出土している。N-1 地点 SB23・S-1 地点 SB24 を除き、多くは 1 次面同様に広く多量に出土している。

地名	遺構名	時代	重複関係		床面	付箋施設	特記事項	遺存	測量用 記番号	土層用 記番号	台帳 番号
			先	後							
S-3	SB10	古墳	SB42・43		貼床	卯(北側柱穴間)	白玉出土	SB12・43と同一住居の可能性が想定され、卯からカマドへの転換期に位置付けられる可能性が高い	247	267	240
S-3	SB42	古墳	SB43		貼床	カマド(車室)	白玉出土 カマド構造不詳	247	267	241	
S-3	SB43	古墳	SB42		貼床か?	卯 P 1～P 5・P 7	通風構造は SB42貼床下で検出	247	266	242	
S-3	Pt 36	奈良	SB42・43		貼床	卯 卯側面より鉄滓出土	鉄滓および高杯脚部板 卯洞口出土	東面上に大量の火敷布 東面上に大量的灰敷布	248 257 261	260 253 234 256	248
N-4	SB57	古墳			貼床	卯 卯側面より鉄滓出土	北西面に地土分布	勾玉・白玉出土	248 256	255 256	231 235 236
S-3	SB41	古墳			貼床	北西面に地土分布	勾玉・白玉出土	248	265	231	
S-3	Pt 25	古墳			貼床	カマド残火 (調査区間で火床)	1 次面 SB14と合致し、 同一遺構(掘り方)の 可能性あり	白玉出土 末摘芋より土器と柱状の石 材が出土	249 255	260 263	229 230
S-2	SB12	古墳	SB06		貼床	カマド残火 (調査区間で火床)	S-2 地点 SB10 と同一遺構	1 次面 SB53 と同一住居	250	231 232	221
N-3	SB53	古墳	SB15		縄化面	カマド(北壁)	N-3 地点 SB53 と同一遺構	縄化深度は極めて浅い	250	263	222
S-2	SB10	古墳			縄化面	N-3 地点 SB53 と同一遺構	縄化深度は極めて浅い	250	263	222	
N-3	SB15	古墳	SB53		縄化面	北側土器群	出土確認資料は古墳時代が主を占め、隕石と利利用される。陶載物等は 1 次面 SB55 に属し、SB55H 土器として埋蔵した土器のうち、古墳時代土器が当住居に伴う可能性が高いと考えられる	SB13 上面で検出	250	259	227
N-3	SB13	古墳	SB13		縄化面	北側土器群が卯、南側は 地土分布	1 次面で開発を実施したが、 遺構跡は 2 次面に残る	250	264	239	
S-2	SB06	古墳	SB12	SB23	縄化面	卯	床面土被覆面に次敷布 床面土被覆面に次敷布	2 次面調査後で、SB30 面 りに該当する	250	263	233
S-2	SB11	古墳			縄化面	卯	1 次面で確認されたが、ブランク確定で 2 次面 SB09 と して確認	250	263	233	
S-2	SB23	古墳	SB06		縄化面	卯	S-2 地点 SK01 と同一遺構	1 次面で確認されたが、ブランク確定で 2 次面 SB09 と して確認	250	263	233
S-2	SB09	古墳			縄化面	卯	SB23 と同一住居	250	263	233	
S-2	SK26	奈良	SB23		縄化面	卯	1 次面で確認	250	264	234	
S-2	SK29	古墳			縄化面	卯	S-2 地点 SK01 と同一遺構	1 次面で確認	250	264	234
N-3	SB14	古墳			縄化面	卯	S-2 地点 SK01 と同一遺構	1 次面で確認したが、方型土坑と利明	251		
S-2	SK01	古墳			縄化面	卯	1 次面 SB10-11 によって破壊 された。遺構プランは不明瞭	251	264		

地点名	基準名	時代	重複關係		柱穴	付属地盤	新記事項	備考	遺構番号	土器番号	写真番号
			先	後							
N-3	SK32	古墳			SK33			不雙方形土坑		251	260
N-3	SK42	古墳								251	260
S-2	SB04	古墳か		SB02・03	なし 2	北壁付近に焼土分布 縦造状部分は不明瞭	掘り方のみ確認 臼玉出土			251	
S-2	SB03	古墳か	SB04	SB02	なし なし	北壁に焼土分布				251	
S-2	SB02	古墳か	SB03・04		3 粘床		衝突面に焼土あり			251	
N-2	SB46	古墳		SB30(1)	3 (北東面に焼土)	S-2 地点 SB01と同一遺構			252	259	225
S-2	SB05	古墳			1 粘土(一部)	SB-2 地点 SB46と同一遺構			252	263	
S-2	SB06	古墳か		SB06	既弱 1	既小?	燒土塊・底の敷布あり	臼玉出土		252	
S-2	SB04	古墳か	SB01			SB07-10の4基の土坑配列により想定されるが、 SK06S外では柱穴は確認されず			252		
S-2	SK11	古墳			平組 なし		格円形土坑	SB04とは別遺構	252	241	
N-2	SB02	古墳後期 以後		SB03		柱穴4より構成	遺物の出土はないが、SB29下で検出されたことにより時期が推定される		253		226
N-2	SB03	古墳後期 以後	SB02			柱穴2まで全体不規則	SB02同様、SB29下で検出		253		226
S-1	SB26	奈良			3 カマド(北壁)	南側柱穴は検出されず	古墳時代土器の混入あり		253	262	228
S-1	SB27	古墳		SB33	既弱 なし			確認深度は浅く、詳細不明	253	262	
N-1	SB44	古墳		SB23 (1次面)	既弱 なし	北壁は調査区外、西壁 は不明瞭	臼玉出土		254	259	221
N-1	SB23	古墳				床面直下より勾玉1と 臼玉が整中に出土	1次面 SB23の剥離調査		254		221 222
S-1	SB33	古墳	SB27		3 カマド(西壁) (柱頭のみ確認)	床面より多量の炭化 材・焼土焼成臼玉出土	中央部土坑は別遺構		254	262	237
S-1	SB28	古墳			3 なし	SB32との重複関係は明確に把握できなかっただけでなく、 臼玉出土	臼玉出土		254	262	238
S-1	SB32	古墳			既弱 なし	SB28との重複関係は明確に把握できなかっただけでなく、 臼玉出土	N-1 地点で確認され たが、住居跡である可能性あり		254	263	
S-1	SB25	古墳か	SB04		粘床 1 カマド残欠? (東側)	上部 SB04と同一遺構の 可能性が高い			254	262	
S-1	SB34	古墳		SB25	既弱 なし		SB34開発後に確認。検査状況は殆ど不明瞭で SB24と 同一居住の可能性もあり		254	263	
S-1	SB24	古墳	(SB34)		3 なし	石質構造品(有孔円板)・ 臼玉が多量に出土	西側壁が中間に確認されず、 プランは不明瞭。床面高は SB 34とはほぼ同じで、同一遺構 か		254	262	223 224
S-1	SD24	古墳か		SB24	平頭 平組 なし	覆土上面の SB24床面～直上レベルで多量の有孔円 板・臼玉が窓内に落ち込む様に出土。SD24に帰属。			254		223
S-1	SK100	古墳				SB24に伴う可能性あり			254	263	

表20 Ⅴ区2次面主要検出遺構一覧表



写真221 N- 1 地点 SB44・SB23 (SB23の土中は玉類)

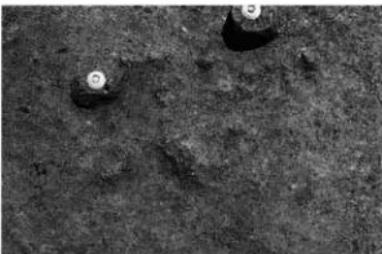


写真222 N- 1 地点 S B23白玉出土状況



写真223 S- 1 地点 S B24 (土柱は石製模造品・玉類)



写真224 S- 1 地点 S B24石製模造品出土状況



写真225 N- 2 地点 S B46

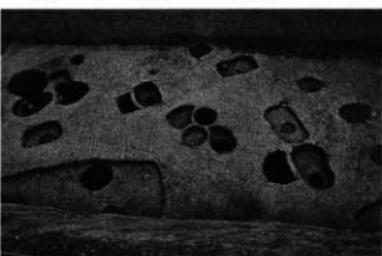


写真226 N- 2 地点 S H02

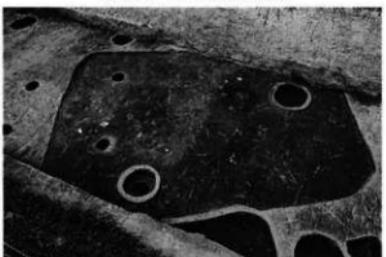


写真227 N- 3 地点 S B13



写真228 S- 1 地点 S B26

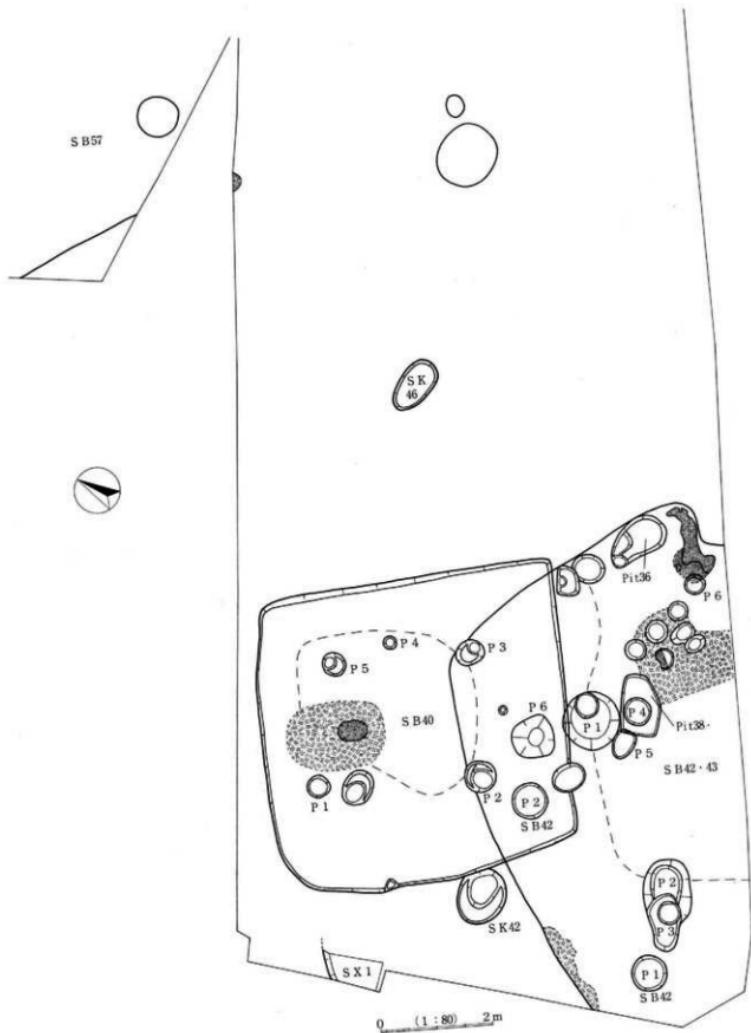


図247 墓区2次面遺構実測図① ($S = 1/80$) S-3区

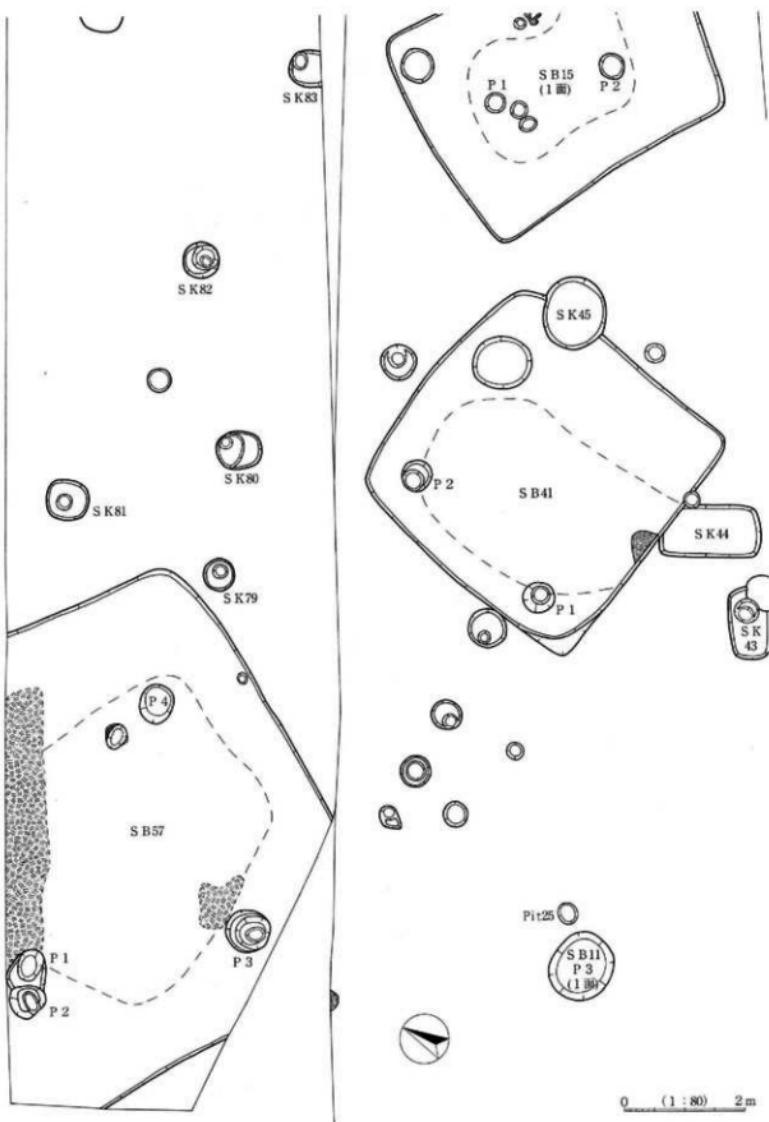


図248 N-4 · S-3区 2次面遺構実測図② (S = 1/80)

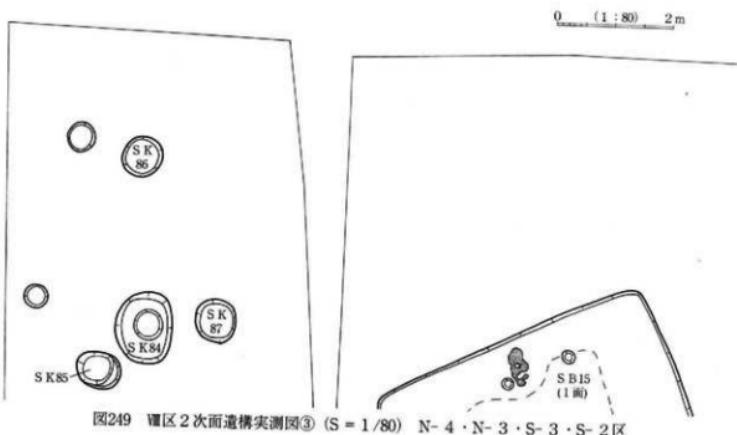
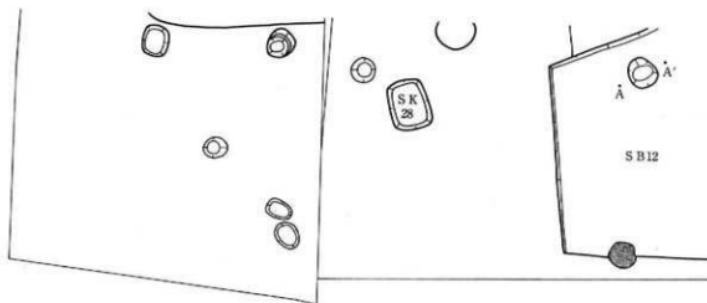


図249 Ⅷ区2次面遺構実測図③ ($S = 1/80$) N-4・N-3・S-3・S-2区

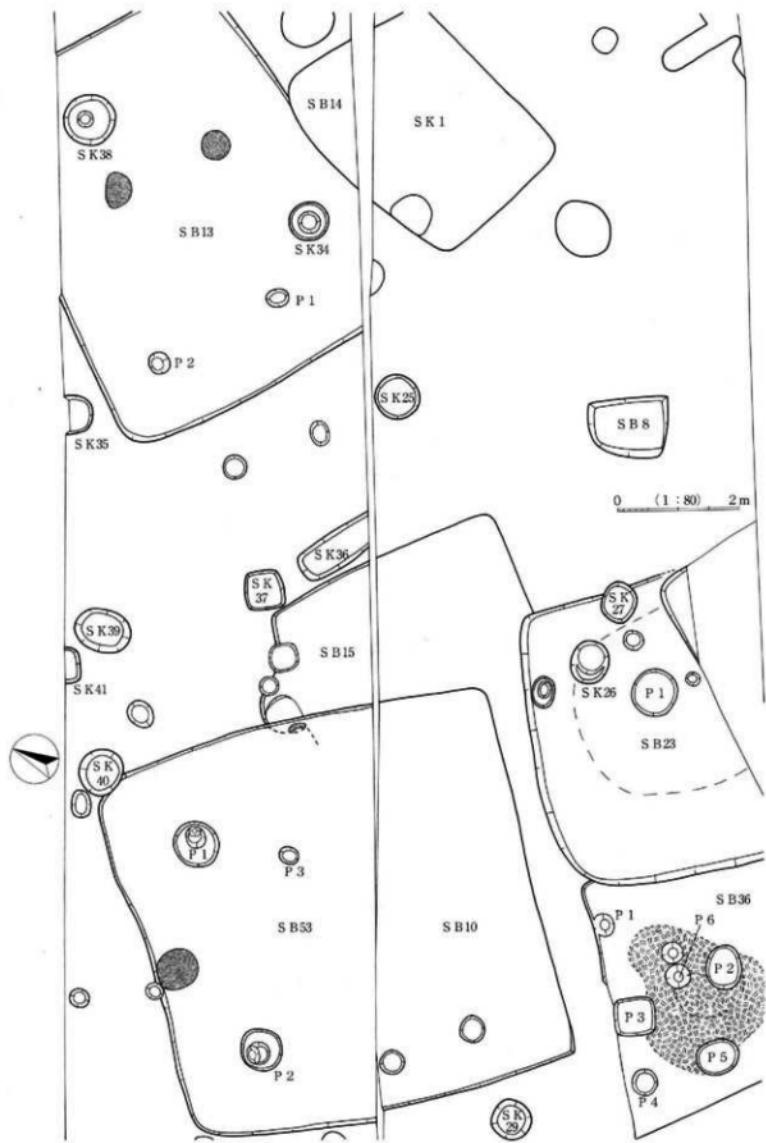


図250 Ⅷ区2次面遺構実測図④ (S = 1/80) N-3 · S-2区

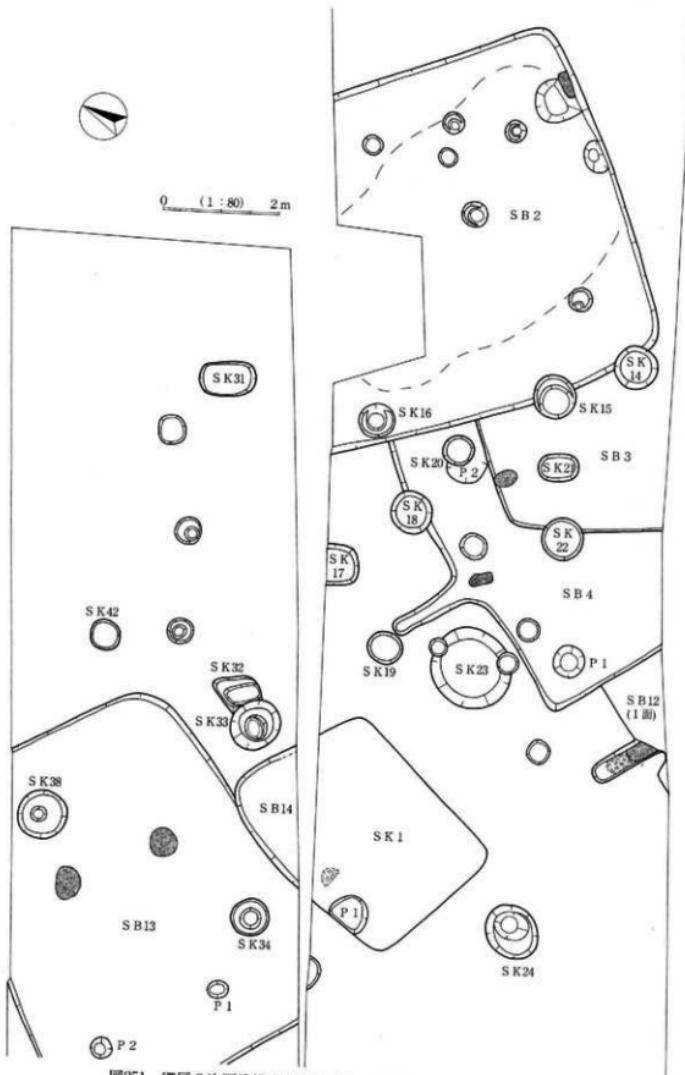


図251 場区2次面遺構実測図⑤ (S = 1/80) N-3・S-2区

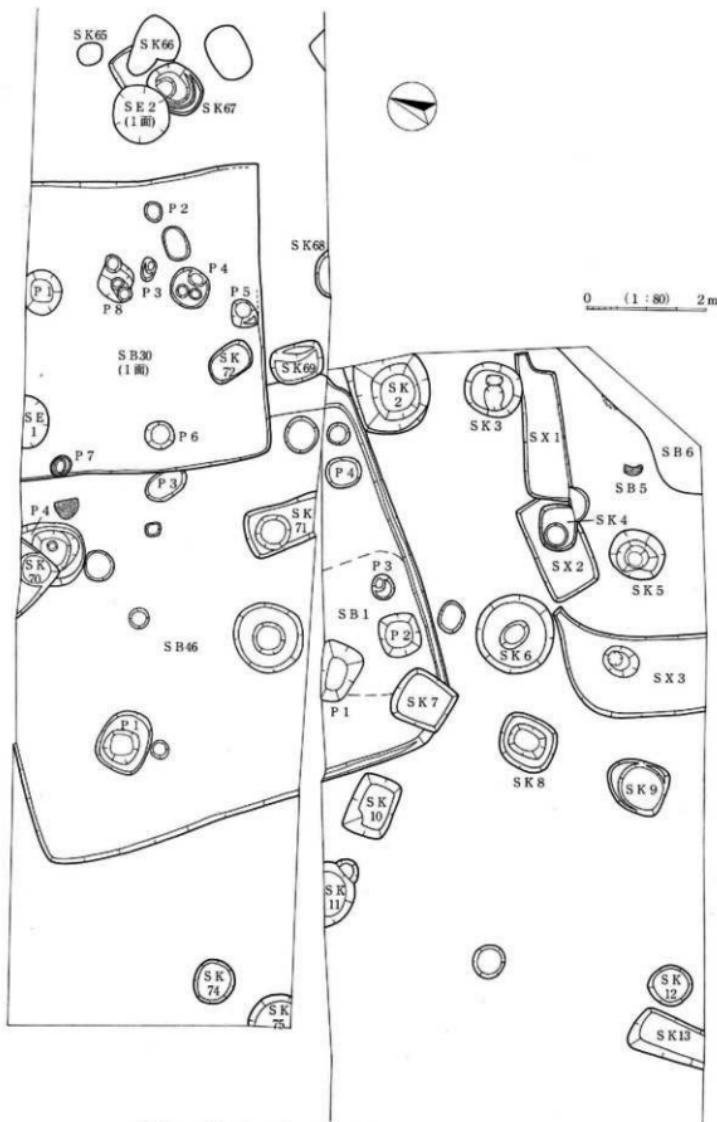


図252 Ⅷ区2次面造構実測図⑥ (S = 1/80) N-2・S-2区

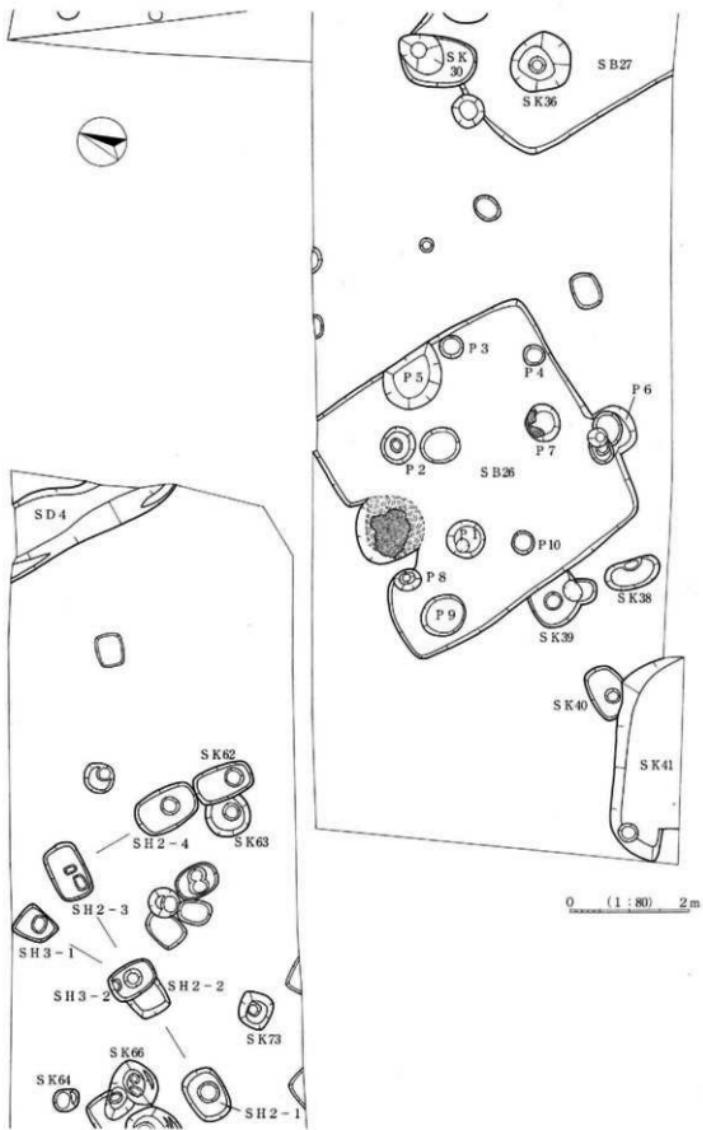


图253 翠区2次面遗构实测图⑦ ($S = 1/80$) N-2 · S-1区

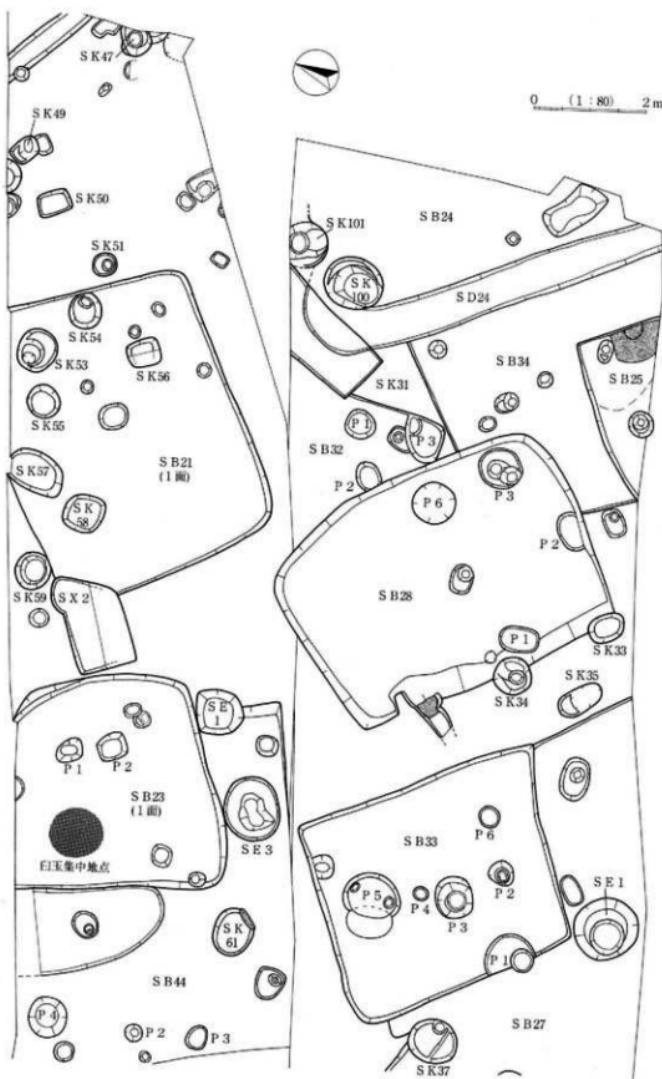


図254 畠区2次面遺構実測図⑧ (S = 1/80) N-1・S-1区

S-2地点 SB12 調査区南西際で検出された堅穴住居で、西ならびに南側が調査区外となる。西側隔壁で火床が検出され、カマドが付されていた可能性が考えられる。

火床東側対面の床面では、浅い掘り込み内より柱状の石材が土器とともに出土している。柱状石は長さ約40cm、幅約5cmを測り、二つに折れて出土した。柱状石材は支脚の事例が認められるが、他例に比して長く、確認されたカマド部分でも抜き取り痕跡等が認められないことから、カマド構築材の可能性も想起される。



写真229 S-2地点 SB12

S-3地点 SB41 一辺4.7mを測る方形の堅穴住居である。炉・カマドは検出されなかったが、北壁中央部に残存する焼土がこれに関わるものと考えられる。柱穴は主軸東側に二ヵ所検出されたに止まる。床面は住居中央部に貼床が確認された。この貼床上からは多量の土器が出土している。ほぼすべてが縞片で出土し、完形での出土個体は認められない。壺・壺・高杯・小型丸底土器より構成されるが、壺の比率が最も高く、他事例との相違点となる。須恵器共伴直前期の住居内出土土器群として把握することが可能な一括資料である。



写真231 S-3地点 SB41

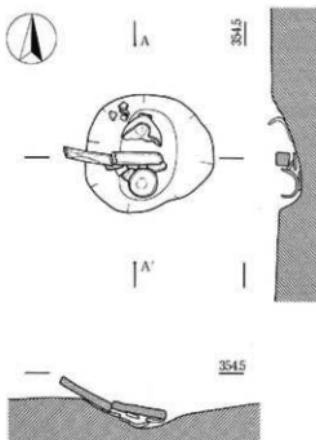


図255 S B 12柱状石出土状況 (S = 1 / 20)



写真230 S-2地点 SB12柱状石出土状況



写真232 S-3地点 SB41遺物出土状況

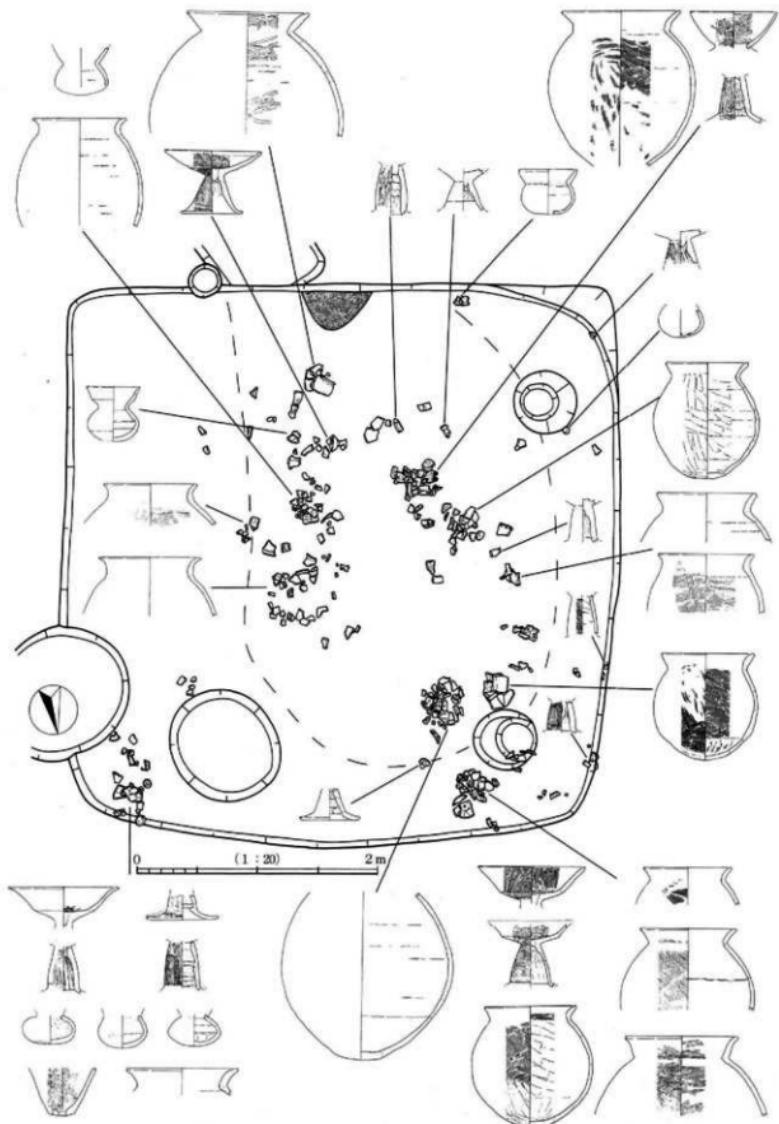


图256 S-3地点S B41土器出土状况实测图 (S = 1/40)

N-4 地点 SB57 東側および北西角部が調査区外となるが、一辺 7.3mと想定できる竪穴住居である。柱穴は3ヵ所確認される。床面は貼床で、床面上より多量の土器群と焼土混じりの炭層が検出されている。土器群は南北二カ所に集中して出土し、高杯と小型丸底土器を構成主体とする。甕等を含まないあり方は生活品の廃棄とは異なる背景が想定される。また、離れた破片が接合した例が1点あり、意図的な破砕行為の可能性も指摘される。

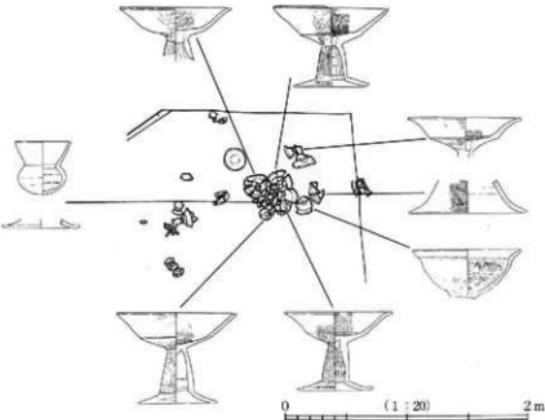


図257 N-4 地点SB57北側土器集中出土状況実測図 ($S = 1/40$)
1基確認されている。この炉周辺からは若干量はあるが鉄滓が検出された。さらに、炉周辺より出土した高杯脚部(右図▲付)には外面に高温で溶解した付着物が認められ、転用羽口とみられる。多量の炭も合わせ、小規模な鍛冶遺構と想定される。ただし、上層遺構の掘り込みが深いため、炉の上部構造は定かにはできなかった。

土器様相からは集落への鍛冶波及期と判断され、床面上出土土器群も良好な一括資料と把握される。



写真233 N-4 地点SB57



写真234 N-4 地点SB57遺物出土状況①



写真235 N-4 地点SB57遺物出土状況②



写真236 N-4 地点SB57遺物出土状況③

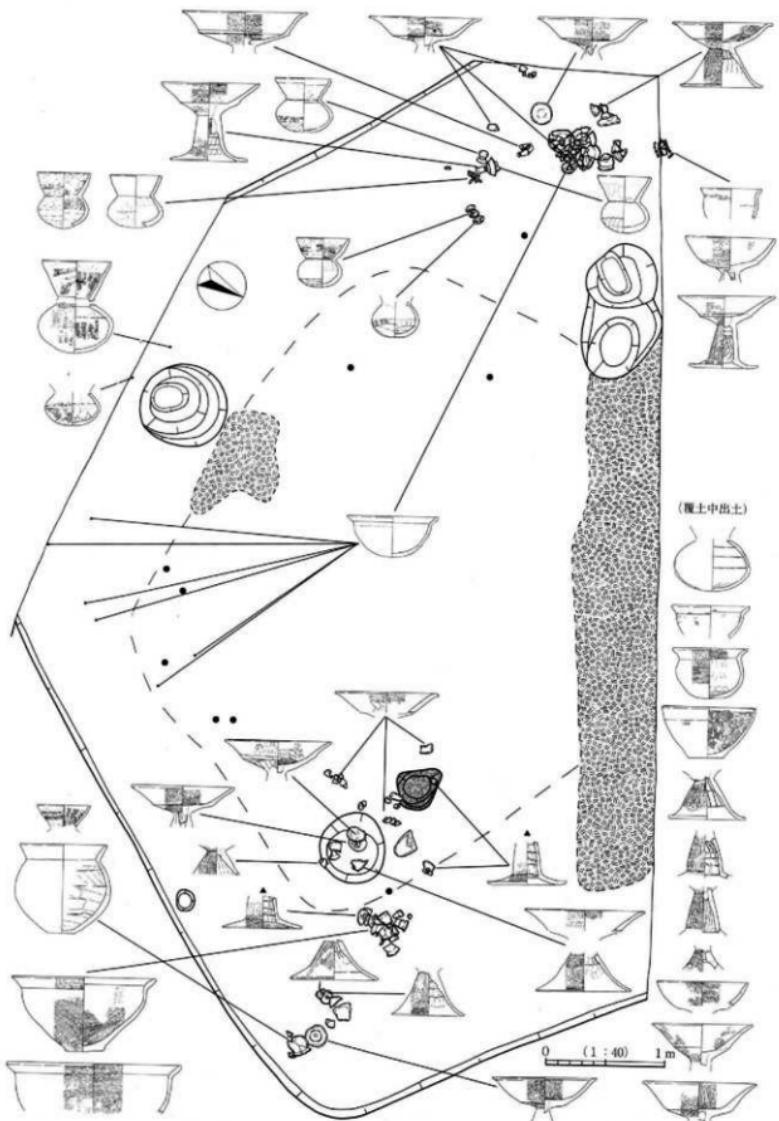


図258 N-4地点S B57遺物出土状況実測図 (S = 1/40)

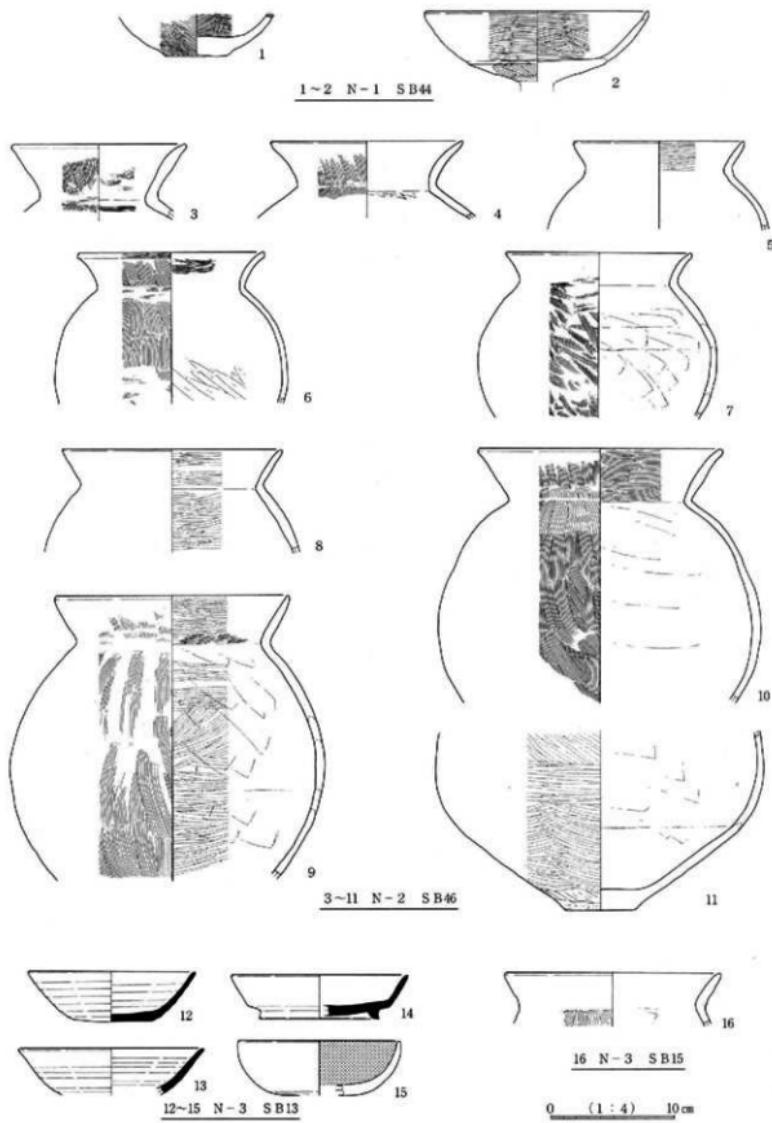


图259 魏区2次面出土土器实测图① ($S = 1/4$) N-1・N-2・N-3地点

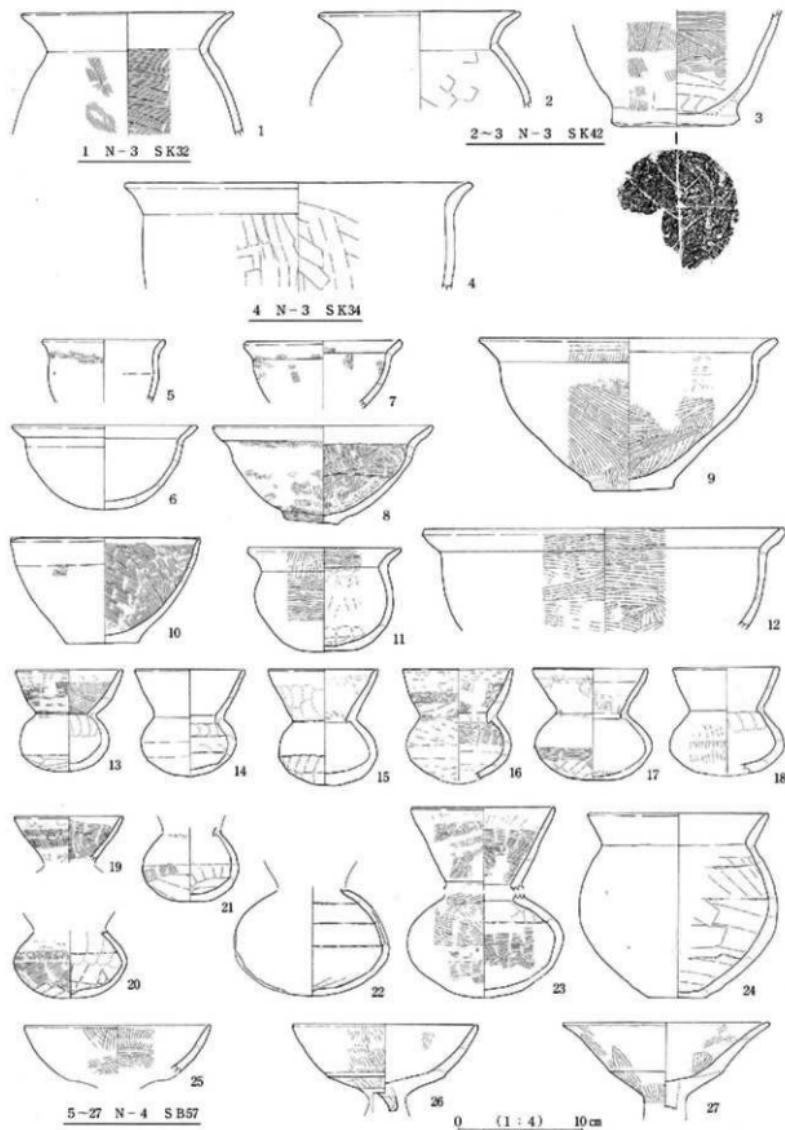


図260 VII区2次面出土土器実測図② (S = 1 / 4) N-3・N-4地点

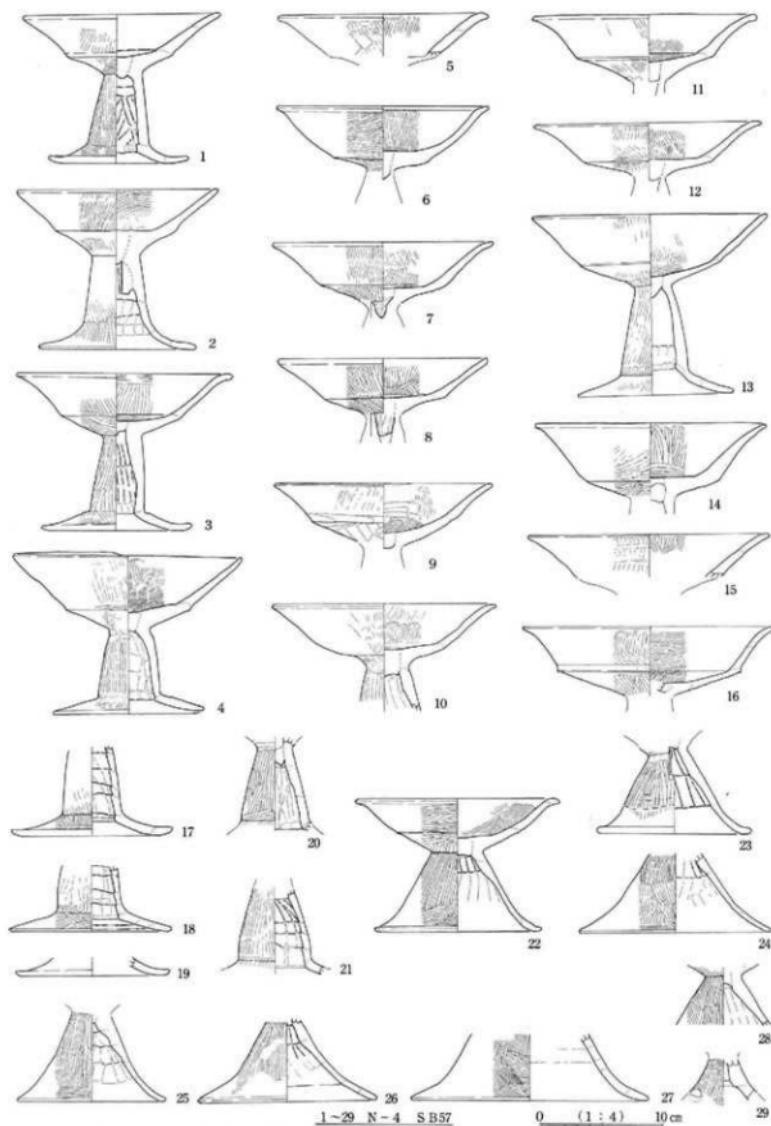


图261 VII区2次面出土器実測図③ (S = 1 / 4) N-4地点

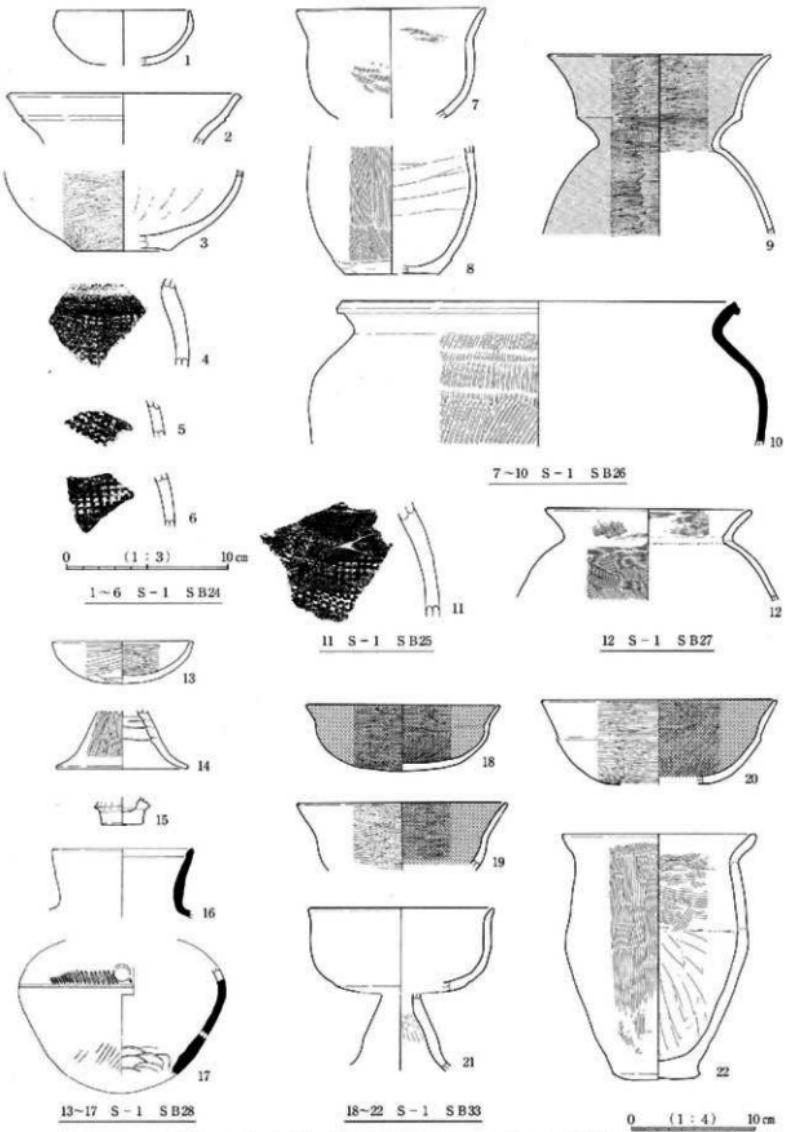


図262 雨区2次面出土土器実測図④ (S = 1 / 4) S-1 地点

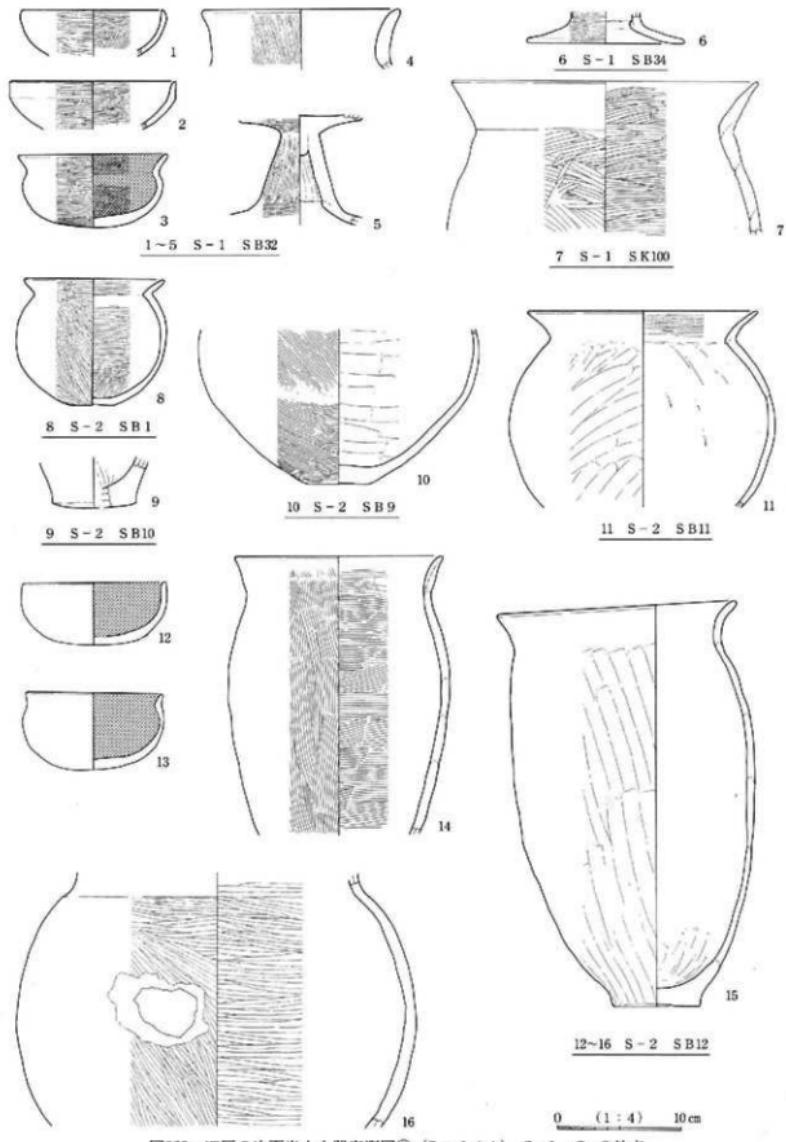


图263 VII区2次面出土器実測図(5) (S = 1/4) S-1・S-2地点

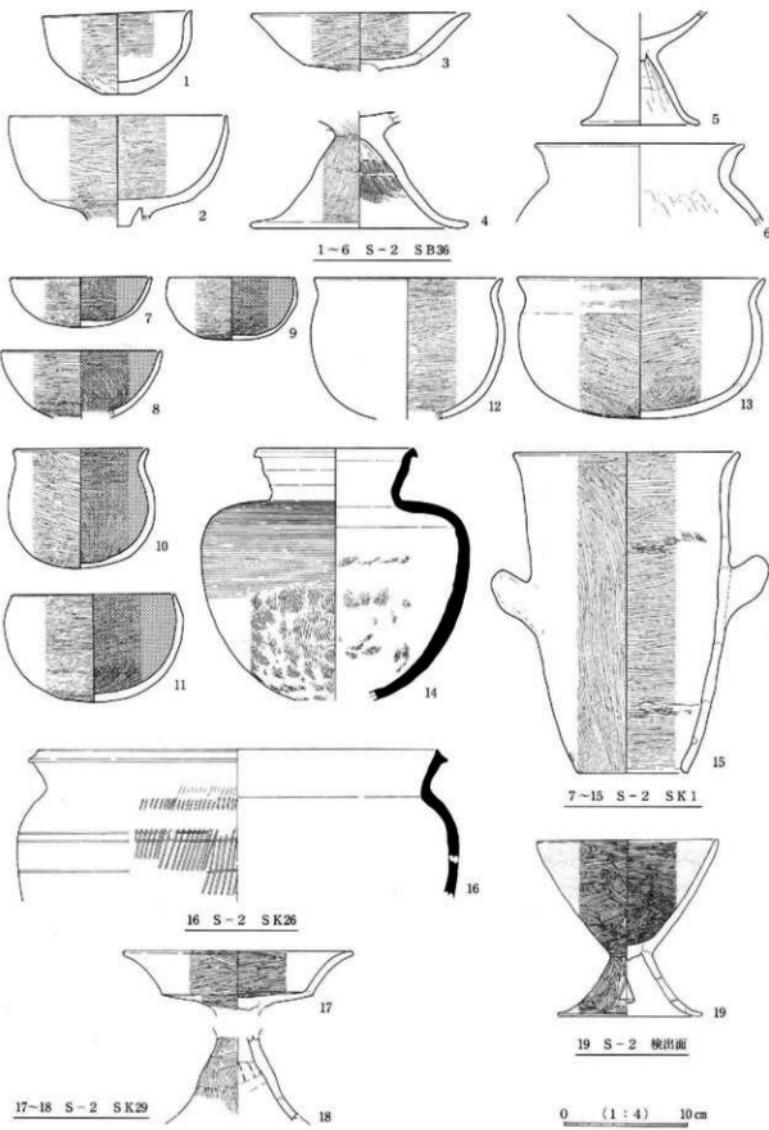


图264 Ⅲ区2次面出土土器实测图⑥ (S = 1 / 4) S-2地点

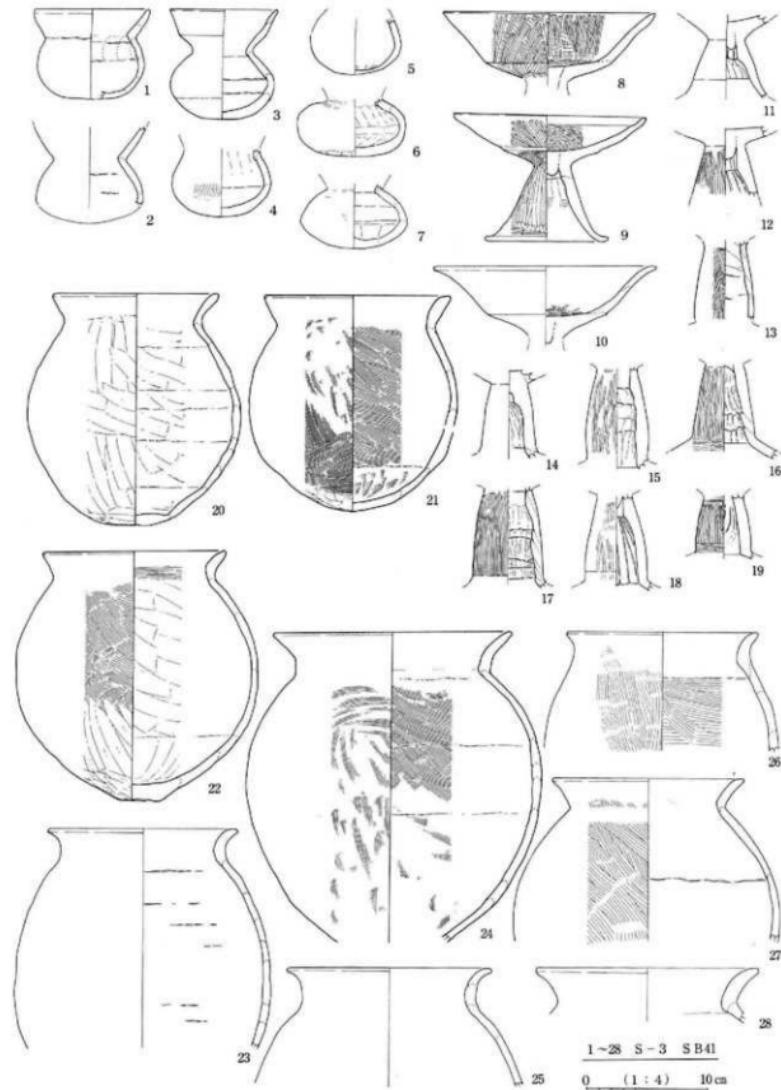


图265 VII区2次面出土器实测图⑦ (S = 1/4) S-3地点

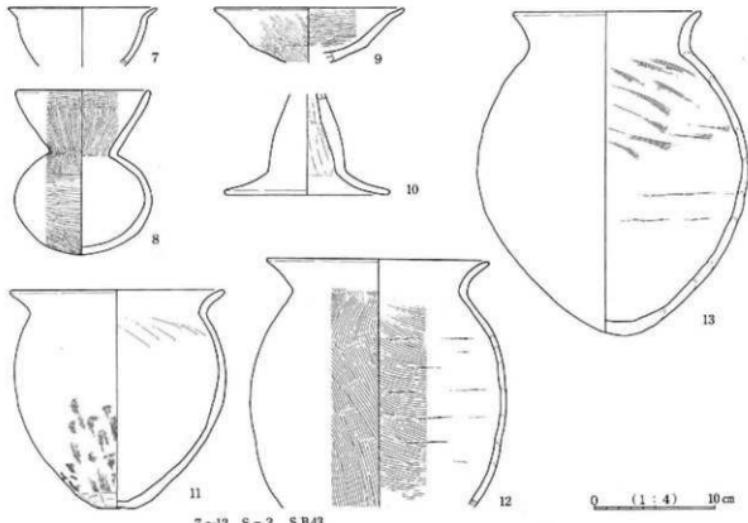
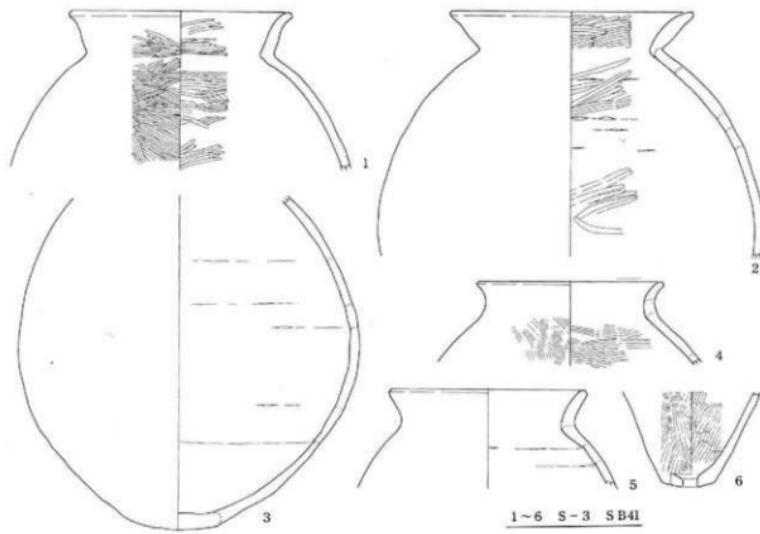


图266 墓区2次面出土土器实测图⑧ (S = 1 / 4) S- 3地点

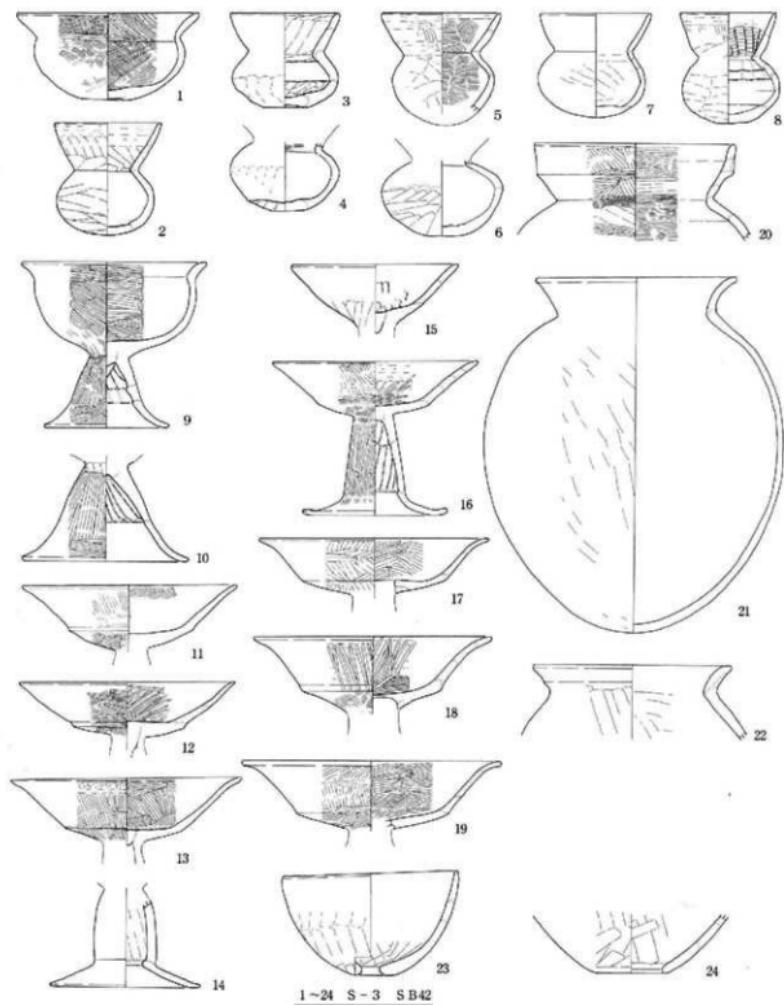


图267 墓区2次面出土土器实测图⑨ (S = 1 / 4) S-3地点

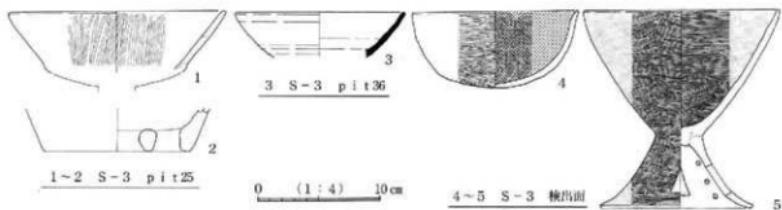


图268 雅区2次面出土器実測図(S = 1 / 4) S-3 地点



写真237 S-1 地点SB33



写真238 S-1 地点SB28



写真239 S-2 地点SB36



写真240 S-3 地点SB40



写真241 S-3 地点SB42

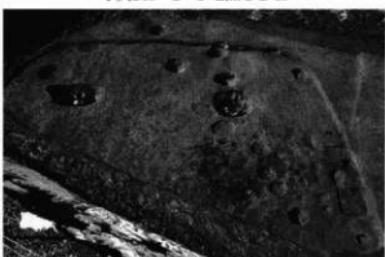


写真242 S-3 地点SB43

XII IX区の調査

1 調査実施範囲の確定経過

IX区は調査対象地の西端で、西側では国庫補助事業地点X区へと続き、北側では市道塩崎中央線地点と直交して位置する。この直交する本区ならびに市道塩崎中央線地点には北側の県道77号線からの搬出入口として北陸新幹線建設時以来、工事用仮設道路が設置されていた。本区調査時は既に新幹線開業後であったが、引き続き本事業建設工事の搬出入口として使用され、工事用道路の確保は継続課題であった。工事用道路は工事計画との調整によって、VI~VII区S地点の発掘が完了した時点で南側への一斉切り替えを実施した。ただし、本区は直角に折れ曲がるうえ工事用車両の交換場を兼ねていたこともあって、北側用地際に設置されていた既存の仮設道路を使用することが安全確保のうえ最も有効と判断されたことから、切り替えは実施しなかった。これにより工事用道路以南を調査対象地とした。また、調査の進捗状況に伴う工事用車両の交換場確保の計画策定のため、先行して試掘調査を実施した。試掘坑は東側と西側に各1ヶ所設定して行った。東側の試掘坑（第1試掘坑）では遺構の存在が確認されたが、西側の試掘坑（第2試掘坑）では基盤層上まで搅拌が及んでおり、包含層の堆積ならびに遺構の存在を確認することはできなかった。このため、さらに西側でもう1ヶ所試掘坑（第3試掘坑）を掘削したが、第2試掘坑と同様の結果であった。遺構が確認された第1試掘坑と確認されなかった第2・3試掘坑は煙が異なる。果樹と一般畠地という土地利用状況も異なっていて、従前の畠地区分が遺構の残存状況に大きく関わっていると予測された。この点より、第1試掘坑が位置する東側の旧果樹畠を調査対象地として選定した。

表土掘削は東側より着手して順次西へと拡大したが、調査区西端部で遺跡基盤層である黄褐色粘質土層が急激に立ち上ることが確認された（図269）。調査区西壁では遺構の存在は確認されず、包含層内での遺物包含量が極端に低下することから遺構分布が希薄になることが確実視された。前記した隣接畠地との位置関係や調査区隣接地への出入口の確保を踏まえ、この地点までを調査範囲と確定した。これにより、IX区は長さ約36m、幅約12mの範囲に対して一発掘調査を実施している。なお、工事用道路下については、盛土造成ということもあって遺構が路床下に保存されていることを確認している。

2 調査の概要

調査面は他地区同様に調査限界点となる南壁際に排水溝を設定し、この壁面観

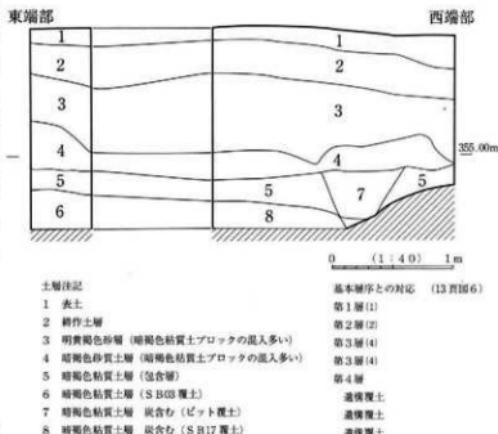


図269 IX区土層堆積状況実測図 (S = 1/40)



写真 243 IX区全景（西から）



写真 244 IX区全景（東から）

察によって確定する方法をとった。包含層の堆積厚は他地区に比べて薄い。排水溝内での観察によって下層遺構の存在は確認されなかった。また、検出遺構の底面断削によって下層遺構の存否についても逐一確認しながら、單一面で調査を実施している。

方形ピット群 部分的ではあるが、黄褐色砂を覆土とする方形ピットが検出された。列をなす状況の確認はなかつたが、本来は他地区同様、面的に展開した可能性が想定される。また、遺物の出土はなかつたが、確認された重複関係からは最も新しい時期と考えられる。

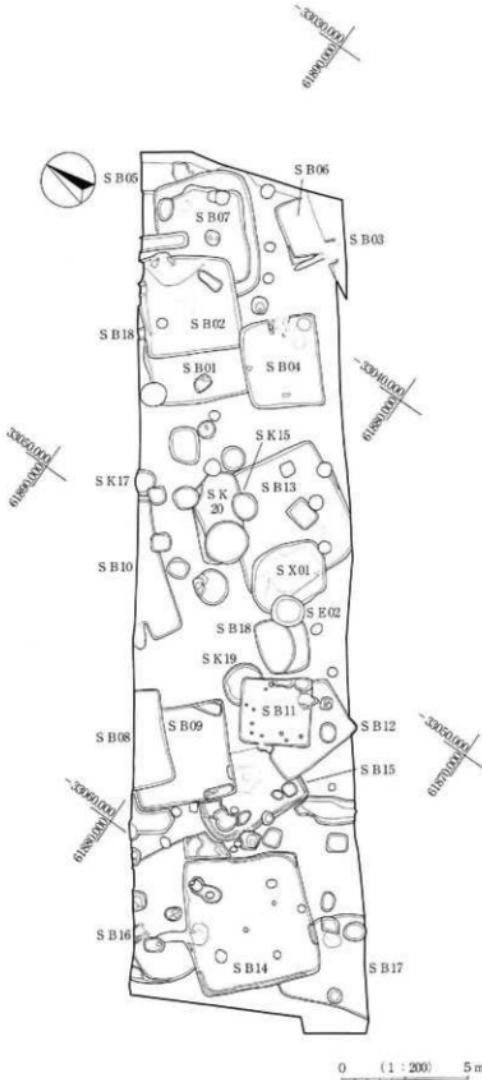


図 270 IX区遺構分布図 (S = 1 : 200)

平安時代 壁穴住居4軒・土坑1基ほかが検出された。全体が検出されたSB04・11は石芯構造と考えられるカマドを布設した小型住居である。カマド方位は北西・東・南東と各住居それぞれ異なって一定しない。東側に隣接するV区では西端部付近で該期住居が密集して検出されており、これらとまとまりを持つと想定される。

奈良時代 壁穴住居2軒(SB02・18)、土坑1基(SK20)ほかが確認された程度で、遺構の分布密度は低い。東

地区名	遺構名	時代	遺構開拓		材質特徴	特征記述	備考	遺構番号	土質番号	方置番号	
			先	後							
IX 1次面	SB04	古墳	SB09・17		壁穴 柱穴 4	カマド(北壁) 壁構	覆土中より灰骨瓦片ならびに白玉出土	南東中央にコモ石状の石材 見出	271	273	253
IX 1次面	SB16	古墳	SB14		船床 1(SK25)	カマド(北壁) 壁構	6点の進溝跡を含め、 床面より白玉出土		271	275	
IX 1次面	SK25	古墳					SB16柱穴		271	275	
IX 1次面	SB17	古墳	SB14		船床 なし	カマド残欠(東壁) 壁構	円玉出土		271	275	
IX 1次面	SB15	古墳	SB09・12		船床 2	船床 壁構	鉄面間に炭鉱布 白玉出土	P 1 覆土中より青銅製湯勺 出土	271	275	
IX 1次面	SB12	奈良	SB15	SB11	船床 なし	船床 カマド(南穴) 石材あり	覆土上層より白玉出土	小銀雀新	271	275	251
IX 1次面	SB11	奈良～平安	SB12	SB19	船床 なし	船床 カマド(南穴) 石材あり	覆土上層より白玉出土	小銀雀新	271	275	251
IX 1次面	SB09	平安	SB09		船床 なし		覆土上層より白玉・白玉出土	271	273	250	
IX 1次面	SB09	平安	SB15	SB08	船床 なし	(未確定)	墨跡	覆土上層より白玉・白玉出土	271	274	250
IX 1次面	SK18	古墳	SB02					271	275		
IX 1次面	SK19	古墳	SB11				覆土上層より白玉・白玉出土	271	276		
IX 1次面	SD02	平安以降	SK18 SK01		(未確定)	墨跡	覆土上層より白玉・白玉出土	古墳時代遺物を含むが重複 南側より平安時代以前である ことが明らか	271	276	
IX 1次面	SB10	古墳			船床 なし	カマド残欠(西壁) 柱次の石材(玄武岩)	白玉出土		271	274	
IX 1次面	SK17	古墳						272	275		
IX 1次面	SB13	古墳	SK15	SK20 SK05	船床 なし		南西側床面上に炭鉱布 白玉出土	SK01から出土した石製櫛道具 品、白玉は本遺構に帰属する ことと判断される	272	274	252
IX 1次面	SK04	平安か	SB13	SK02	底面 SH13に伴うと書かれ 甲組(不明)		底面より石製櫛道具品(有 孔円筒)・白玉出土	SK01よりSK02底面 で発見 覆土は強烈質生	272	274	252
IX 1次面	SK15	古墳		SB13 SK20			SH13よりSK02底面 で発見		272	275	
IX 1次面	SK03	奈良か	SD13 SK15				底面	土器類はSD13に帰属する可 能性高い	272	276	
IX 1次面	SB01	古墳 (-全員)		SB02・04 SB01	洗弱 なし	壁構(北壁) 壁構		中央部で検出された後土・ 灰は崩壊のように非常に 脆っている	272		
IX 1次面	SB02	奈良	SB07・18	SB01・04	船床 なし	カマド(北壁) 石材あり	青銅製環状品出土	中央部で検出された後土・ 灰は崩壊のように非常に 脆っている	272	273	245
IX 1次面	SB04	古墳～奈良	SB01	SB02		未検出	カマド(北壁) 石材あり	SB02以北の壁面で検出	272		
IX 1次面	SB07	奈良か	SB05	SB02	船床 なし	カマド残欠(東壁) 石材あり	SB07	272	273	245	
IX 1次面	SB05	古墳か	SB06		未検出	カマド(東壁) 石材あり	SB07により破壊	272	274	247	
IX 1次面	SB06	古墳後以前		SB05	洗弱 なし	カマド(北壁) 石材あり	白玉出土	盤穴住居の可能性低い	272	276	

表21 IX区主要検出遺構一覧表

側のⅤ・Ⅵ区でも密集せずに広く点的に分布する状況は同様で、一連のあり方と評価される。出土遺物ではSB12覆土中より青銅製巡方が1点出土しており、注目される。

古墳時代 古墳時代は中期から後期の竪穴住居・土坑が検出されている。古墳時代後半は遺物量が少ないと定かでないが、調査区東端部のSB05・07が該当し、奈良時代に継続するとみられる。古墳時代中期は調査区中央より西側に重複関係をほとんど有さず展開する。竪穴住居5軒、土坑4基以上が検出された。SB15は確実に炉を有し、SB13は不明、他はカマドを有する。カマド導入直前に集落の形成が開始される点はⅤ区と共通する。また、調査区西端部のSB14は中期住居に重複し、模倣杯・長嗣甕を土器組成に加える。図化・掲載資料がないがSB01を含め、後期前半代に位置付けられる。なお、古墳時代中期集落は全体的にⅤ区に比して新しい傾向が伺われる、住居密集域が西側へ拡大した可能性が想起される。



写真245 SB 02・SB 07



写真246 SB 03・SB 06



写真247 SB 04



写真248 SB 04 カマド(石芯)



写真249 SB 05



写真250 SB 08・SB 09

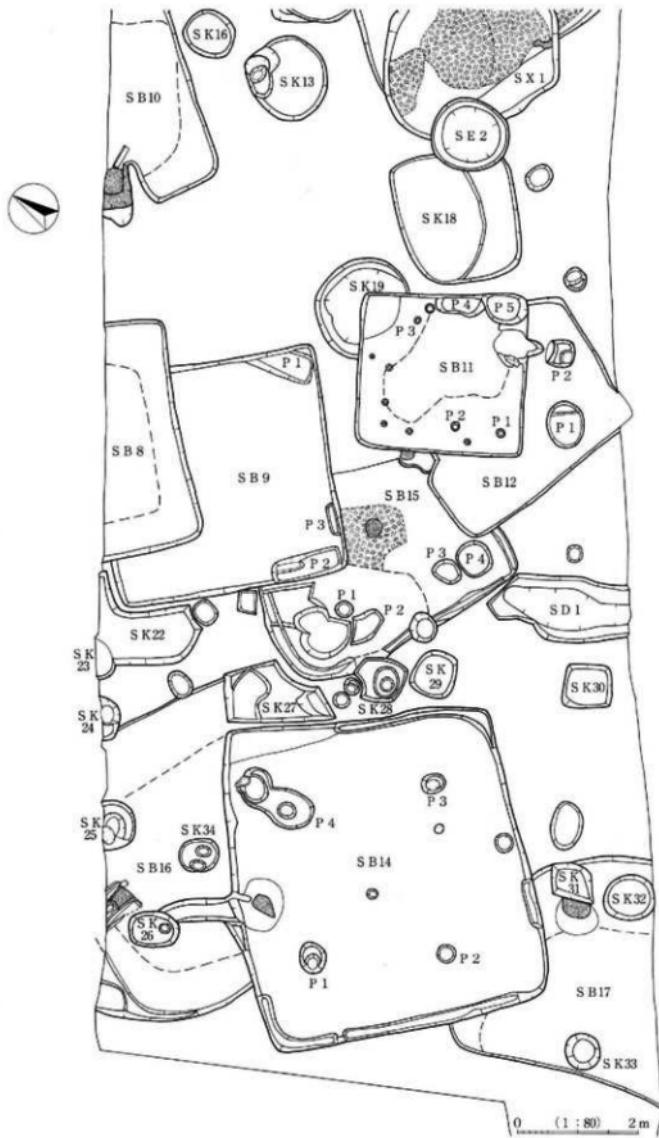
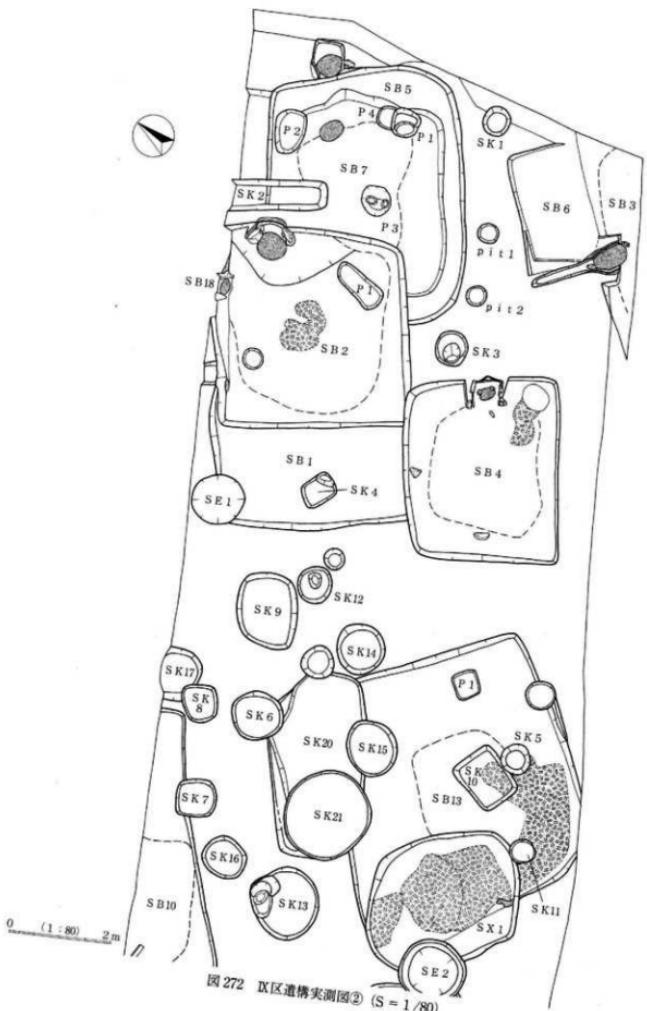


図271 IX区遺構実測図① ($S = 1/80$)



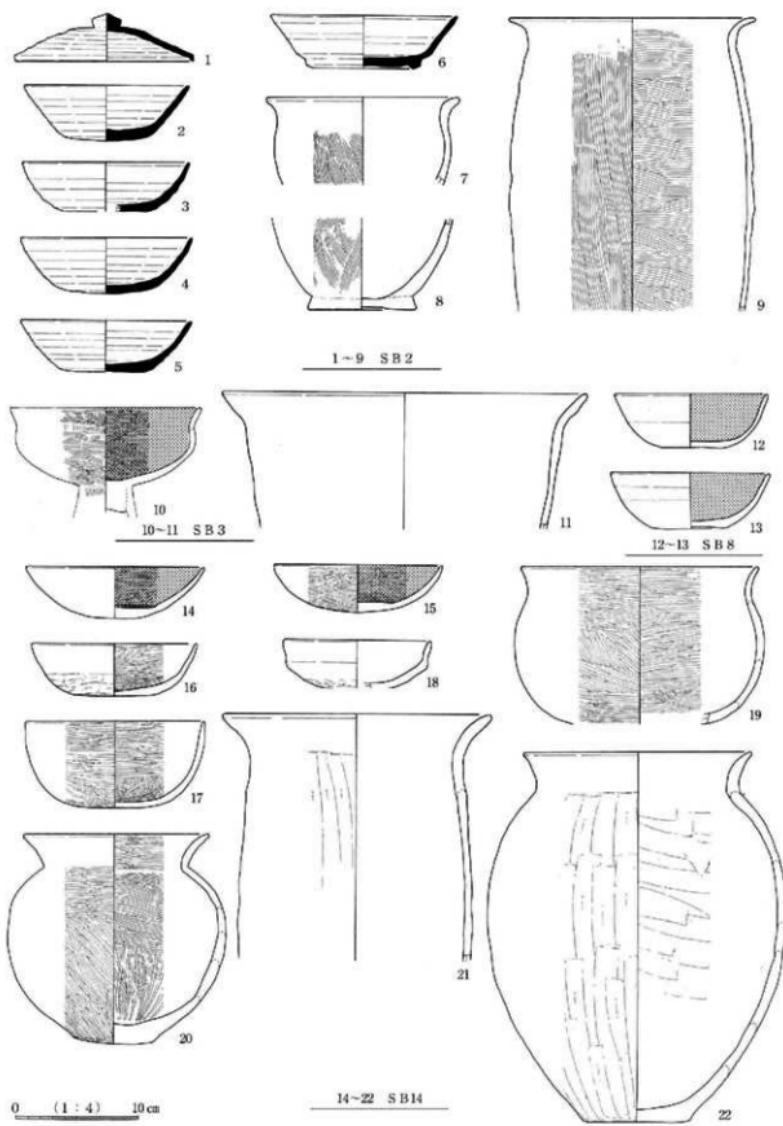


図 273 IX区出土遺物実測図① (S = 1 / 4)

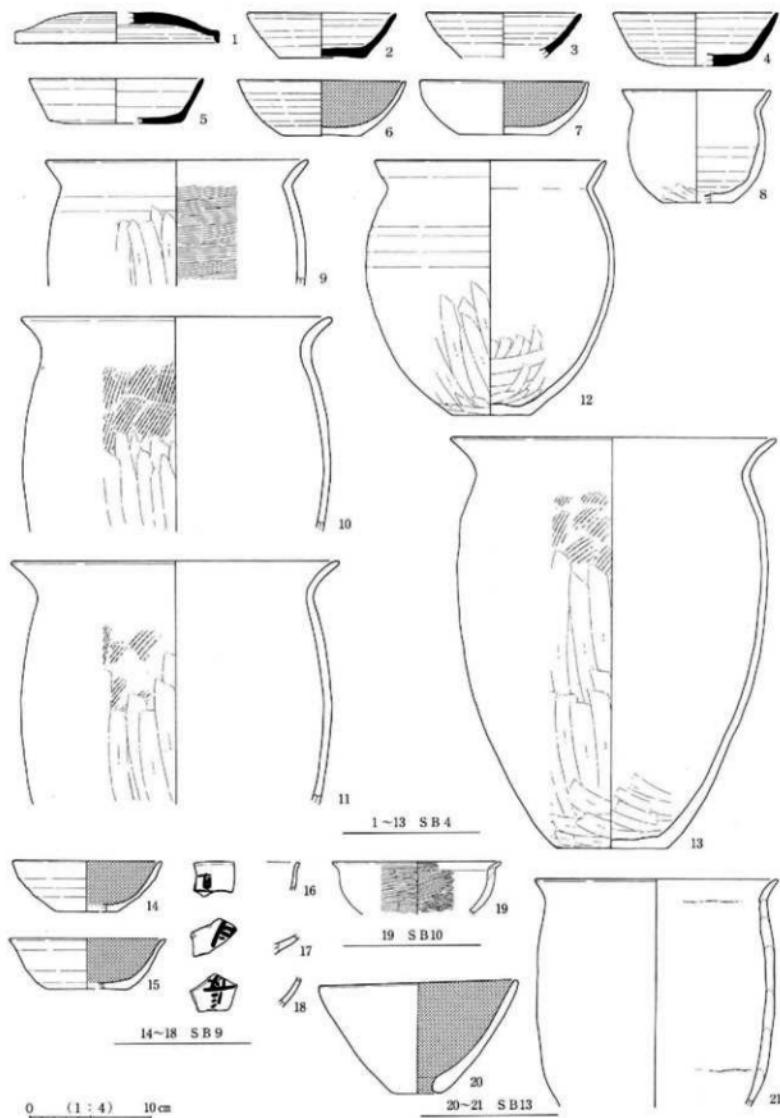


图 274 IX区出土遗物实测图② (S = 1 / 4)

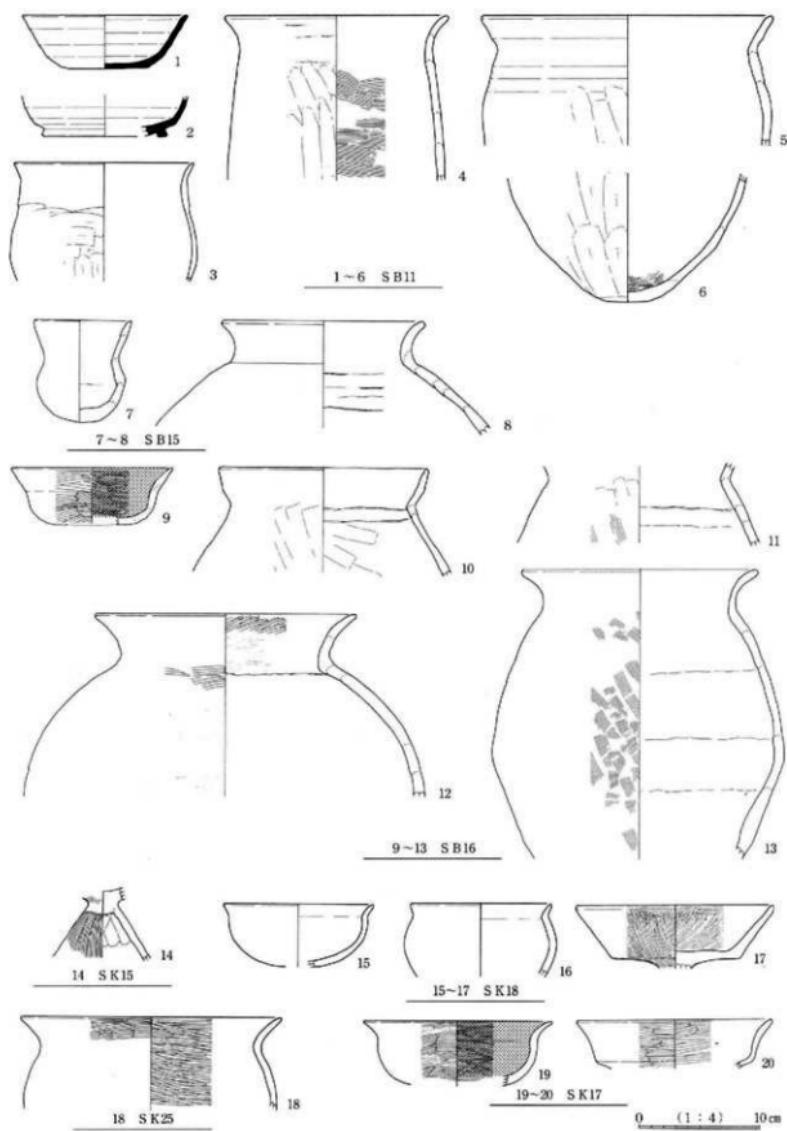


图 275 IX区出土遗物实测图③ (S = 1 / 4)